

野球文献史話

野球はこうして伝わり

神田三橋広場で行われた



藤三郎

生れはイギリス

私の野球文献蒐集道楽も大正十二年の震災直後あたりだから、かれこれ三十年近くにもなろうか、今ではどうやら病膏言に入つた模様である。実をいうと最初の私は明治三十七、八年ごろのいわゆる早慶戦時代に興味をひかれて、そのころのものからボツ／＼蒐め出したのだが、大正末期までのものを大方手に入れると、こんどは逆コースを辿って順次一高全盛時代、新橋クラブ時代、さらに遡っては草創時代とも混雑時代とも呼ばれる野球浸来年代に移るといふジグザグ・コースを歩いて来た形にな

つた。もちろん、現在の私はそれが最初の野球文献かなどと言いつ切る自信はないが、目の届いた限りでは明治五年、七年、北海道開発の目的のもとに創立された「開拓使」という役所で発行した「英和对訳辞書」という和紙で刷つた大形の辞引の第三十七丁目にある「Base Ball」を「玉遊び」「BATS」を「太き棒」とあるのが文字として移入された最初のものではないかと考えている。昨秋木村毅氏が本誌に書かれたワイルソンの「ファースト・リーダー」の挿絵とその説明については私もぜん／＼そう思つていたので、さて改めて調べてみるとうどうやら怪しい箇所が目について来た。これを

べきを「クラブ」とあるなどがそれだ。これは恐らく「ラウンダース」に違いないと思ふ。

アメリカ野球協会の公式声明(?)によれば、野球はアメリカに生れアメリカに発達した独特のもので、決して他国の遊戯から変化したものでないということになつていゝるが、それは野球特別委員会のあつた一九〇八年ごろのことだ、現在ではイギリスで生れたラウンダースがアメリカに渡つて、「タウン・ボール」となり、やがてその整理発達したものがベース・ボールと呼ばれるようになったという事は彼地でも常識になつてゐるらしい。

私は昨年秋、ロスアンゼレスの学校で育つて、昨春早大に入学した大原外野手にそのことを質ねてみたが、面白いことにはこの、大きな柔かいボールを打つて走るランナーに、捕つた野手が叩きつけるという原始野球の形態が今でも残つており、ハイ・スクール以下の年少者間では盛んに行われているといふことである。

「好球生」の貴重な投書

さて、話題は一足飛びに明治二十九年に移る。この年五月二十三日、一高は横浜、アマチニアの連合軍と戦つて二十九対四の大スコアでいわゆる第一回国際試合に大勝した。何しろ体格も技術も本場の連中にあつては問題になるまいという予想を、しかも段違いのスコアで破つたのだから、野球ファンはもちろん、何にも知らない者までが有頂天に喜んで、祝電が殺倒したといふからおよその見当はつくだろう。

結果からいへば一高のこの時の勝利が野球を津々浦々にまで普及させる上に非常に大きな役割を果したわけだが、当時「日本」といふ新聞社に關係していた俳人の正岡子規は、好機逸すべからずとばかり七月十九日から三日間にわたりベース・ボールの紹介記事を書いた。子規は人も知る通り明治二十年前後の大学予備門(一高の前身)時代一流選手として鳴らし、いささか度を過したために健康を害し、やがて血を吐くようになったのだが、(これは彼自身告白してゐる)それは別問題として、とにかく子規は当時有数の野球通だつたのだ。

さて、子規はその第一回に「この技の我邦に伝わりし来歴は詳かに之を知らねども或は云う元新橋鉄道局技師(平岡源と云う人か)米國より帰りてこれを新橋鉄道局の職員間に伝えたるを始とするとかや(明治十四、五年のころにもやあらん)云々」と書いた。

ところが、この記事の載つた三日目の二十三日の同紙に「野球の来歴」と題したかなり長文の反駁文が寄せられ、それには、「好球生投」と署名してあった。

好球生は先ず子規の十四、五年説を真向から否定した後、

「そもくベースボールのはじまりは明治五年のころなりし今の高等商業学校のところに南校という学校あり、明治五年のころは第一大学区第

一番中学と名付けて唯一の洋学校なりしが、英語歴史などを教うるウィルソンと云える米國人あり、この人常に球戯を好み体操場に出てはバット持ちて球を打ち余輩にこれを取らせて無上の楽みとせしが、よりやくこの仲間に入る学生も増加し、明治六年第一番中学の開成校と改称し、今の錦町三丁目に宏壯の校舎建築成り、開業式には行幸などもあり、運動場も天覧ありしくらいにひろくと出来たりし事故、以前に変わって体操の方法も扱

張し夾り、兵式体操器械体操などもはじまり、彼のウィルソンは米國の南北戦争に出でたる人とて、兵式器械体操なども仲々によくやりたり、各学生も氏について大分学びたり。このころよりいつとなく余輩の球戯も上達し、打球は中空をかすめて運動場の辺隔より構外へ出る程の勢いを示せしが、ついには本式にベースを置き組を分ちて野球の技を始むるにいたり。



明治五年、十五才當時の中沢博士

「されど、はじめの事としてその業の見るべき程の事もなかりしが、明治七、八年に至りては非常に発達し、ついにある人の紹介によりて横浜の米國人と試合をなしたる事も度々なりし。八年、九年のころは校内毎土曜日には球技盛んに流行し、見物人も山をなして、外人と戦う時などは非常の人氣なりし。」

好球生はこう書いてから、当時親しくボールを握つた人々の名前を挙げ、その中には石堂博士、中沢博士、平賀博士、谷田部

梅吉、大久保利和、牧野伸顕など後年知名の士が多く顔を並べている。以上の諸氏のうち石藤豊太氏には意外なきかけから一度お目にかかり、牧野伯にはある人から紹介して貰うことになつてはいたが、その後間もなく起つた二・二六事件などのために訪問の機会を失つてしまつた。ところが勇敢にぶつかつて行つたら案外会つて貰えたかも知れぬが——と、今でも時々それを思い出して残念に思つているのだが、すべては後の祭りである。

好球生のこの投書は日本へ野球が渡來した当時の事情を知る上には非常に大切な記録で、その点ではアメリカの一八三九年野球創始説などよりはずっと確實性に富んだものだが、それがなぜいままで埋もれていたかというに、従来はそういう方面の資料と真剣に取組んだ研究家がいなかつたからだと思ふ。現に好球生のこの寄書の後で

「我曰く、わが輩のおぼろげなる伝聞をもつてベースボールの來歴を掲げしに、好球生此寄あり、以てその誤を正す。わが輩の詳にその來歴を知るを得たるは実に好球生の賜なり。よつてその全文を掲げて正誤に代うと云爾。」

と、卒直に自説の誤りを認めていたのだから、彼がもう少し長生きして、後で前記の野球紹介記事を訂正でもしておいたら、明治六年説、七年説などさまざまの異説を生むよりなかつたらう。

明治六年渡來説は疑問

一体、従来の定説となつていた明治六年開成校説はどこから出たのだらうか。私の知つてゐる限りでは大正五年朝日新聞社が発行した「野球年鑑」第一号に載せられた日本野球史の一節に、

「明治六年のころ、今の帝國大学が開成校といつて東京一ツ橋外、高等商業の前に置かれた時分、その教師にウィルソン及び同校予備門の教師にマジネットという二人人があつて、初めて野球なるものを同校の生徒に教えた。これが恐らくわが國の空中に野球のボールが飛ばされたイの一番であらう。」

とあるのが最初で、それがいつの間にか定説になつてしまつたらしいが、明治四年ころから六、七年にかけての外人お雇い外國人二百十四人のうち米人十六人の中にはマジネットなどという名前はぜんぜん見当たらないし、一高の前身東京英語学校が神田一ツ橋に建てられたのが明治八年そし

て東京大学予備門と改称されたのが明治十年四月であったことなどから考えると、この六年説がかなり怪しいものだということになる。一高そのものでさえも「わが部の開祖とも称すべきはストレンジ氏にして「云々」と部史の冒頭に記している点から見てもます／＼マジエツトなる人物の存在が疑われて来る。要するに六年説の根拠はほとんど信用に値しないものとなる。

これに反して好球生の記述には一点の誤りもない。これは筆者の当人が親しくプレイしてからまだ二十三年、四年にしかならず、従って記憶の新鮮さからいっても問題にならないのは当然で、たとえば、学制の移り変わりでも明治四年南校、五年第一大学区第一番中学、六年錦町側に移って開成校と年ごとに改称されて行った煩雑さも間違いなく挙げておられるし、ウイルソンという米人教師にしてもこの前年八月に雇入れられ、その月給も二百円とハッキリした記録が遺っているのだから、これで好球生などという匿名でさえなければ、ほとんど完璧に近い文献といつていいと思う。

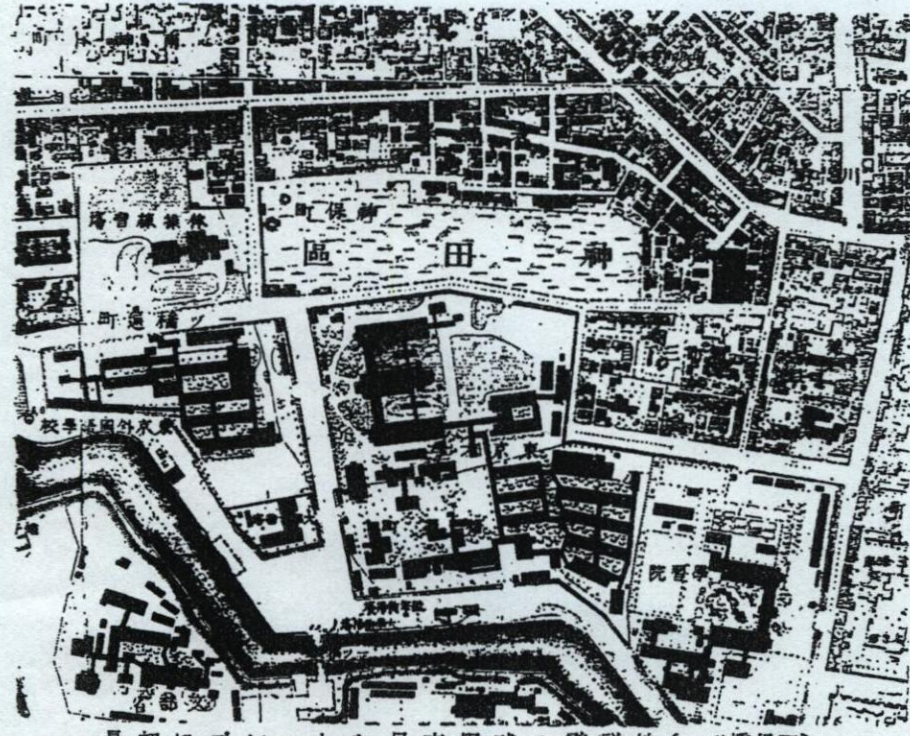
車通りから西へ約五、六十メートルほど入った小学館、岩波書店卸部、一ツ橋中学校、これを含めた地帯だということがわかり、これで名実共に日本野球発祥之地が判明したことになる。

実をいうと、私がこの記録を探し当てたのは昭和十年ごろで、その後読売新聞に発表したこともあったが、戦争中のこととあまり問題にもならずそのまま埋もれていた。昨秋東京都庁に木村毅氏をお訪ねした時この話をしたのできつ／＼かけて安井知事の耳に入り、都の史蹟指定地に選ばれて記念碑か何か建てられるそうだし、学生、ノンプロ、プロと文字通り全野球界に呼びかけ盛大な野球祭が行われる予定だとのことだが、もし出来れば、伝来当時そのままの野球を三回でも五回でもいいから実演して欲しいと思う。素面、素小手、ワラジャゾウリばき、そして服装も洋服あり、和服ありチヨンまげにザンギリ頭という百鬼夜行にも似た原始時代のベース・ボールはかならず喝采を博することだろう。

取締役をしていた石藤豊太氏(工博)を訪ねたことがある。

「そのころピッチャーは直立して腕を正しく腰に着け、二、三度ハズミをつけてからそうつと押し出すように投げたもので、それもバッターの要求する高さ以外はみんなボールに算えられたものだった。私は何十年ぶりか先年ベース・ボールを見ました。が、ちかごろのあのダンスをやるようなブザマな格好はナンです。それでいて点がなかなか入らないじゃないか。私どものやっていたころは三十点や四十点入るのは珍らしくなく時には六十点も七十点も入ったことがあります。従って試合は非常に活潑なものでした。

いつか横浜の外人と試合したことがあったが、夏の暑い時で、こっちは手桶からヒシヤクで水をガブ／＼飲む。ところ



最初にプレーした日本野球の発祥地(一ツ橋界隈)

もう一つ信用していいことはこの最初にプレイした体操場の見取図がちゃんと残っていて、これを現在実地に踏査して見ると、だいたい立講堂の北側、一ツ橋通りの電

一九三九年——といえは戦争がいよいよ長期戦の様相を呈し、野球にもそろ／＼弾圧の手が延びかかっていたところだが、この私は開成当時自ら左利きのキャッチャーとして活躍し、当時日本火薬製造会社の

石藤博士大いに叱る

順序として、当時どんな野球が行われていたかをザツと書いておく必要があると思う。

一九三九年——といえは戦争がいよいよ長期戦の様相を呈し、野球にもそろ／＼弾圧の手が延びかかっていたところだが、この私は開成当時自ら左利きのキャッチャーとして活躍し、当時日本火薬製造会社の

が向うは何だか知らんがビンに入ったものをポン／＼抜いて飲む。なんだ毛唐はゼイ沢な真似をしとるなどと憤慨したものだ、なんとそれはラムネだった」と氏は笑われたが、学校を出てからフランスに留学、帰朝後はずっと専門の仕事に没頭し、ほとんど野球とは五、六十年も縁を断っていた氏が、たま／＼通りかかった早大の球場で何かのゲームを見たらしいのだが、投手の腕をふり廻したり、腰をひねったりするのを一種のスタンド・プレーと観察したらしく、「どうもちかごろのベース・ボールは行儀が悪くてイケません」を

繰り返していた。

現在われわれの常識から考えると、いくら盛んだといっても大したことはなかったろうと一応は想像するのだが、当時の野球熱はなかなかナマヤサしいものではなかったらしく、明治七、八年のころ「東京開成校」で流行った「三幅対」（三十六年六月十日吉川弘文館発行）という小さな本を見ると「球玩好」としては久米祐吉、高須録郎（二十九年ころ一高教授）宇田川三郎の三氏、「球遊のとき赤脚にて走る人」として宇田川三郎、谷田部梅吉、山岡義五郎などの名が見える。赤脚にてという意味はチョツと

分りにくい、要するに三人ともムチャクチャに走り廻つた熱心家というくらいのことであるらしい。

石藤博士の説によると、ベース・ボールの始まりは牧野仲頭氏がアメリカ留学から帰つた時に持って来たので、アメリカ人から教つたのではなかったと言ふし、牧野さんもそのちうな談話を何かに発表したことがあつたけれど、この二人とも八十に近い老齢当時の思い出話ではありあまり信用出来ないと思ふ。この程度の話だと札幌農学校の第一期生だつた文学博士大島正健氏の開拓使仮学校説や、海軍兵学校説、ある

いは熊本説などさまざま／＼挙げられるが、私としては最も古い、そして精密な記録としてやはり好球生の「野球の来歴」を信用するのが正しいと思ふ。たゞ、石藤博士の話で面白いと思つたのは、あの日例のようにベース・ボールをやっていると、急に使ひの者が来て牧野さんを連れて帰りそれ以後再び氏の姿が学校に見られなくなつたといふ。これは維新の元勳大久保利通卿が明治十一年五月十四日、麹町の紀尾井坂で島田一郎等六人の壮士によつて暗殺された事件のことで、いふまでもなく牧野氏は利通卿の二男だつたのだ。

野球が渡来した明治五年ころから十二年、三年ころまでは、明治維新という大変動の直後だつただけに世間も物騒なら、諸藩から選抜されて上京した学生達の多くはみな一ト癖も二ト癖もあり喧嘩や喧嘩口論は朝前飯のこと、開成校とは柵一つ隔てた英語学校の連中と毎日のように石合戦をやつたといふし、消燈後にも「腹がへつた」といふのを口実に禁制の塀を乗り越して遠く昌平橋のあたりまで遠征するものがあつたと絶たなかつたそうである。今でこそ大夏高松野を並べている神田界隈もそのころはあつちこつちに人家が点在しているだけで、学校の窓から小川町、須田町、昌平橋辺一帯の盛り場の灯が、松の並木の間からチラリホラリと眺められたといふ。（続く）

（筆者は野球変遷史研究者）

野球文献史話②

一試合半日ばかり
休憩入り古式野球

齋藤三郎

珍重された野球用具

東京開成校の野球がどうやらホンモノになりかけたころの明治九年五月(十年ともいふ)アメリカで機関車製造のことを学んでいた平岡憲氏が帰朝、伊藤博文の引き立てで工部省出仕の技師に任ぜられ、この吏員達にアメリカ直伝の野球を教え、やがて十四、五年のころには新橋鉄道局構内に日本最初の球場を造りこれを保健場(レクリエーション・パーク)と呼んだ。場所は浜離宮の西側だったというが詳かでない。ボールはアメリカから持ち帰ったものを見本にして神田今小路あたりにあった靴屋にこしらえさせ、バッドは挽物屋に作らせたというから今から見たらかなり変則なものだったろう。それでもユニフォームは

けは本場そっくりのひどくハイカラなもので、十七年にはユニフォーム姿の写真をかっつてボストンの名投手で、当時有名な運動具店を経営していたスボルディング氏のもとへ送ると、折り返しボール、バット、マスク、胸当て、手袋など野球用具の一式が寄贈されて来た。当時の値段で五、六百ドルほどの品物だったというが、氏はさっそくこれを慶応義塾その他の学校に分割寄贈しバットは四十年ころ折れてしまったが、マスクだけは震災当時まで平岡家に珍藏されていたということだった。セーヤーという運動具商がマスクを發明し、チャーリー・ウェイトが初めてグローブを使用したのは一八七五年(明治八年)、プロテクターの發明は十年後のことになっているから、本場のアメリカでも流行りたてのホヤノ、というところだったろう。漂

「FAR EAST」という雑誌にたしかベースボールをやっているらしい写真があるから調べてみなさい」と言われたことがある。事実とすれば何か素晴らしい収獲があるだろうと思ひ、東大明治資料編纂室と、早稲田大学図書館所蔵のものをかなり克明に調べてみたが、一八七三年(明治六年)度のある号に横浜外人運動場の写真だけは載っていたが、野球をやつたらしい記事などは遂に得られなかった。ついでだがこの雑誌には当時の日本のいろ／＼な職業や風俗、風景などの実物写真を一枚一枚貼りつけてあって、その方面では実に貴重な資料である。明治十四年三月第二回内国勸業博覧会が開かれた時の「文部省教育品陳列場出品目録」を見ると「体操伝習所出品」中に、「ベースボール、珠四箇、打球棒二本(一組(価金四拾錢)) 神田紺屋町一丁目

渡辺徳次郎製」とあり、独立した運動具商であるかどうかは別として、当時すでにそういう方面の仕事に手を着けていた者があつたことがわかり、野球熱も想像以上盛んだったのではないかと思わされるものがある。明治十六年六月には東京大学予備門お雇い教師、エフ・W・ストレンジという人が日本の若い学生達のために OUT DOOR GAMES と、英語の小冊子を出している。これは文字通りさまざまの戶外遊戯の實際をわかりやすく紹介したもので、そのうちベース・ボールのために十頁ほどを費している。

現在と大差ない

競技の方法は現在とあまり変わってはいないがストライクに高球と低球の二種あつてバッターはその好む球をピッチャーに要求し、ピッチャーは上や横から急速に、激しく投げることは許されず、下手から押し出すように投げ(現在の下手投とは別)なければならぬことや、現在の四球がセブン・ボール、すなわち七球であつたことくらいで、ピッチャーのスリー・ストライク制は、バッターの要求する一点だけに限られていただけに、現在よりはむしろ負担が重かつたわけである。これを別の言葉で現わすと、現在の投手があらゆる種類のボールを操って打者を苦しめようとするのに持し、当時のピッチャーは、なるべく打たせるように投げなければならぬ。

なども八十何点対七十何点とか、時には百数十点というようた天文学的数字も生れて来るワケで、おまけに守備側が素面、素小手という無手勝流なのだから、もし現在のような反撥力の強いボールを、現在のような鋭い打法で打つとしたら九回の攻守を完了するまでには三日も四日もかからなければならぬだらう。

前に挙げた石藤博士なども「私共時代のベース・ボールは大てい半日ばかりで、試合の最中に弁当をつかつたり菓子を食べたりして二度くらいは中休みをしたものです」と話されたことがあった。そういう仕来りはずつと後まで残っていて、現に私などが小学校でボールをやっていた明治四十年ころまではたしかに「途中茶菓に憩い」という珍風景が見られたものである。

「アウト・ド・ア・ゲーム」の著者は一高野球部史のいわゆる「吾部の開祖はストレンジ氏にして、云々の同人として有名な英国人だが、明治二十二年七月五日、突然死去、一高木下慶次校長の名で死亡広告が出された。変死説も伝わっているが、それはそれとして、氏は広い意味における日本運動界の恩人ともいべき先駆者であつた。

というの著者はこの小冊子でフットボール、ホッケー、ローン・テニスなどを始

め百、二百、四百四十、八百八十の各ヤード・レース、それから高跳、幅跳、三段跳、棒高跳、鉄槌投げなど、おそらく当時の日本人としては考えも及ばなかつた世界の紹介であつたし、現に私なども三段跳がこん



明治十三年頃の新橋クラブ。中央にバットを持っているのが平岡熊氏、後列の外人はコーチのフォード氏。

な年代に移入されていたとは夢にも考え及ばなかつた次第である。この「アウト・ド・ア・ゲーム」を骨子と

して、外に欧米の競技運動を加えた「西洋戸外遊戯法」という本が下村泰大編集の下

に出版されたのが明治十八年三月であつたもろろん「ベース・ボール」の項があつて「打球おにごっこ」という珍妙な日本名が付けられている。ベース・ボールの術語の日本訳としてはおそらく最初のものと思つたので次に少しく挙げて見る。

ベース・ボール	グラウンド
受球者	捕手
打球者	投手
第一ベース	一塁
第二ベース	二塁
第三ベース	三塁
右郊者	右翼手
中郊者	中堅手
左郊者	左翼手
判者	アンパイヤ
組長	キャプティン
書記	スコアラ
走者	ランナー
失敗者	アウト
打球者	バッター
死球	ファウル・ボール

たいたいこんなものだが「ショート・ストップ」と「ホーム・ベース」だけは適当な訳語が見つからなかつたものか、そのまま原名を使用している。

前にも言つたようにルールなどは七十年も経つた現在とは殆んど変つていない。少し変だと思われるのは、

別の定約あるにあらざればすなわち其打球者を「アウト」に宣告すべし。また障壁、立木等より落ち来りて未だ地に達せざる前受取りたる時もまた同じ」とあつて、屋根や立木などに障つて落ちて来るのを捕まえたり、ワン・バウンドで捕つてもアウトにするというのは、なるべくアウトを多くする便法から考へたのだらう。

進歩的な「戸外遊技法」

前に挙げた二冊はいわゆるボール表紙という洋式の本だが、十八年四月出版された坪井玄道、田中盛業両氏合纂の「戸外遊戯法」は、一名「戸外運動法」ともいつて、日本紙に刷り日本風に綴じた風変わりなものだがストレンジの著書以外の資料によつたものらしく、

「之を北米合衆国の現況に徴するに、全国到るところ都府と村落とを間は皆な「ベースボール」会社を設け、男子壯幼此に従事せざるものなく、いやしくも戸外遊戯の方法を知らんか、先ず「ベースボール」の規則を知らざる者なく、己に之を知る、また之を好まざるものなしとまた盛んなりと云ふべし」などという文字が見えるところから考えると、スポルディングのガイド・ブックなどから得た知識ではないかと思われるフシがある。

この本で珍らしいのは、「チェンジ・オブ・ベース」の効用を説いていることであ

一ピッチャルの球を投ぐる真正の術は、打球者の眼を欺むにあり、之を詳言すればピッチャルの球を投ぐるや、あたかも打球者をしてその所望の球の如く思惟せしめ、実地之を打つ時は高低遅速其意外に出でしむべし」

これなどは立派な近代野球の領域に踏みこんだものだが、バッテリ間に交わされるサインの重要性を強調した。

「蓋しベースボールにおいては恰かも戦場におけるが如く最も謀略を要す。故に

ベースボール勝敗表 明治 年 月 日

赤組	打者姓名	位置	アウトライン									アウトライン	縁由		
			一	二	三	四	五	六	七	八	九				
一	何 誰	ケッチャル	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	受敗
二	何 誰	ピッチャル	1	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	受敗
三	何 誰	ピッチャル	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	受敗
四	何 誰	第一ベース													
五	何 誰	第二ベース													
六	何 誰	第三ベース													
七	何 誰	アウトフィールド													
八	何 誰	センター													
九	何 誰	インフィールド													
各人			3	2	3	3	1	2	2	2	2	2	2	2	20

明治初期のベースボール勝敗表。「戸外遊戯法」所載

ケッチャルとピッチャルは互いにその暗号を知ること文字を讀むと一般なる熟練を要す。さればケッチャルは若しもベースを走る演習者は放心してベースを離れてある時は直ちに球を投ぐべきを指示せる合図をピッチャルに伝ふべし。また打球者の球を打つの習慣を知る時は、ピッチャルはあらかじめ其習慣に依じて球を投ぐるの疾徐緩急をケッチャルに暗号を以て伝ふべし、云々」

と、具体例を示してあることなども注目すべきだし、原始的ではあるがスコアのつけ方なども図例を掲げている点など

他の類書に見られない進歩性を見ることが出来る。アメリカアメリカではアランドという人が赴任した。だが、なにも言葉が通じなくて困るところから、当時仙台にいた坪井氏が中央に呼び出されり氏が明治十四年任を了えて故国に帰るまで終始通弁として立ち働いていたが、この三年の間にリ氏の体育学というやうなものをすっかり身につけた氏は、いつの間にかリ氏の後継者として伝習所をリードする立場におかれていた。

さて、この辺でこの本の著者の一人、坪井玄道氏のことを少し書いておこう。明治十一年十月のすえ神田昌平橋の傍らに体操伝習所という体育の専門学校が設けられ、その初代講師としてアメリカのトーマス・カレッジ出身のジョージ・E・リーランドという人が赴任した。だが、なにも言葉が通じなくて困るところから、当時仙台にいた坪井氏が中央に呼び出されり氏が明治十四年任を了えて故国に帰るまで終始通弁として立ち働いていたが、この三年の間にリ氏の体育学というやうなものをすっかり身につけた氏は、いつの間にかリ氏の後継者として伝習所をリードする立場におかれていた。

ンバイヤのことを「友達を持たぬ動物」と言っているそりだが、この割の悪い役割はそのころでもやはり変らなかつたらしく、「まことに判者の職掌は、あたかも誹謗の淵藪にして不快の地位なりといえども一たび意を決して其職に任ずるときはまた其毀譽褒貶を意に介せず、断乎として其明瞭爽快なる音調を以て之を決定するを要す」

などと、ハツパをかけている。與えられた枚数に限りがあるので詳しく紹介出来ないのは残念だが、この本は当時としては最も整った好著といつてよく、その証拠にはこの後十二、三年間というものは、全国の各学校間で殆んど独占的に愛読されたものだった。

さて、この辺でこの本の著者の一人、坪井玄道氏のことを少し書いておこう。明治十一年十月のすえ神田昌平橋の傍らに体操伝習所という体育の専門学校が設けられ、その初代講師としてアメリカのトーマス・カレッジ出身のジョージ・E・リーランドという人が赴任した。だが、なにも言葉が通じなくて困るところから、当時仙台にいた坪井氏が中央に呼び出されり氏が明治十四年任を了えて故国に帰るまで終始通弁として立ち働いていたが、この三年の間にリ氏の体育学というやうなものをすっかり身につけた氏は、いつの間にかリ氏の後継者として伝習所をリードする立場におかれていた。

トレンジ氏とはリーランド氏の紹介で知り合い、体操以外の競技運動に関する知識は主としてこの人から得たものといわれるが、人一倍研究心の強い氏はそれだけでは満足出来ず、いろいろの洋書を取り寄せてベースボール、ローン・テニス、ボート・レスリングなどについてはことのほか勉強し、近く国際的

スポーツの花形として浮んで来た卓球も、明治三十四五年のころ、二ヶ年の外遊から帰朝する時、氏がはじめて日本へ持って

来たものだそうである。前に挙げた三人の外人教師は開拓者として忘れてはならぬ人達だが、その後を引き継いで日本運動界今日の基礎を築いた坪井玄道の名はもつとつと知られてもよいのではなからうか。生涯を日本体育界のために捧げられた氏は大正十一年十一月、七十一歳という高齡で他

「戸外遊戯法」はこの時代の編著だが、前掲げたフレデリック・ウィリアムス・ス

が建てられた筈だが、(つづく)

野球文献史話

3

一高を騒がせた

イムブリー事件

芥藤三郎

天馬空をゆく一高

明治五年、東京神田一ツ橋第一番中学(東大の前身)の校庭で米人教師ウィルソンが

皮で包んだ硬い毬を投げて見せたのが日本野球の濫觴となり、これを学んだ生徒たちの技倆がようやく上達したころ(明治九年

五月)それまでアメリカで機械工学を学んでいた平岡源氏が帰朝早々工部省へ雇われて、その若い職員たちにいわゆるアメリカ直伝のベース・ボールを教えた。これが

動機となって日本の野球は学生と一般人と二つの線に沿って急速な普及発達を見た。

民間人の中でも三田の徳川達彦伯のように築山泉水を埋めて邸内にグラウンドを造り、ヘラクレス倶楽部などという名前をつけて見物人に菓子をやったりするほどの篤

志家も現われたが、平岡氏が新橋クラブから転身するころにはいつの間にかその主流は学生チームに移っていた。徳川一門の野

球も、平岡氏が英語教師として同家に入入っていた関係からその影響を受けたものだったが、中心人物が去ってしまうと自然衰

微の運命を辿ったのもあるいは当然だったかもしれない。

学生軍では大学予備門(後の一高)工部大学、駒場農学校、青山学院、明治学院、立教大学、慶応義塾、東京商業学校(後の

商大)などがいに覇を争っていたが、明治二十二、三年になると、俄然一高が頭角を現わして来た。慶応は後年早稲田と並んで永く学生野球の中心勢力をなしていたが

そのころの野球部といったらまだく影のうすいものだった。ところがたまたま二月にもおよぶ同盟休校があり、その間に学生達は大手をふって練習をしたのが、部の基礎になったというから愉快である。

予備門時代の一高(第一高等中学)も別に目立つほどの存在ではなかったが、二十年春本郷向ヶ岡の校舎が新築されて一ツ橋から本郷に移り、その年九月数千坪といわれた運動場が完成され、二十三年三月寄宿寮の設備とともに学生のほとんど全部が強制的に入寮させられるようになってから

急激な進展を示したのだった。一高が二十年五年名実ともに球界の覇権を握ってから三

十六年早慶二大学に連敗するまでの十数年間を、まったく天馬空を行く勢いで独走することのできたのはこの全校一丸となつて敵にあたるという寄宿制度にあつた——と私は考える。

さて、ジャーナリストイッタな意味で野球が一般人の眼に映つたのはいつごろだったろうか。私の知っている範囲では明治二十三年五月十九日附の時事新報に「双方の行違ひ」という見出しの記事がもっとも古い。

「一昨十七日日本第一高等中学にて、ベースボール(球戯)の催しあり、芝白金の明治学院生徒は招きに応じて疾くより来会し雙方打交りて数番の勝負を試みたるごころしも、白き服を着したる外人一名、樽外より

土手を越えて入来れるものありければ、必定無法者ならぬ、速に追出せと立願ぐうち遠方に控えし同学院の生徒も馳せ来りて何

人ならんと見れば、神学教師イムブリー氏なり。依つて驚いて止めんとする間に早や同氏は何人にか打撃され、飛び来る瓦の欠けに当りて左の頬にいさゝかの傷を受けたり、云々」

これは有名なイムブリー事件を取扱つたもので、時事のはかにも東京日日、郵便報知、国会の各新聞が三面記事や社説でこの問題を採り上げたが、後年運動記事、ことに野球のため非常に力を尽している読売はどうした訳かこれを見逃しているのはちょっと不思議な気がする。所謂イムブリー事件はどうして起つたかというところ、この年五月十日一高に高等商業学校を自校に迎え、四十何点の大差で圧勝し有頂天に喜んで

いた。すると、その直後に明治学院から「一つお手合せが願いたい」との挑戦状が届いた。これは表面から見たらなんでもないことのようにだが、実際は明治学院の欧米文化第一主義と、一高の国粹主義、または反動主義とも呼べるべき教育方針の正面衝突なのである。永い間続いた封建時代からやつと開放されて間もなかつた明治二十年ころまでの日本は、あらゆる面で混乱をくり返していたが、わけても若い血気さかりの



イムブリー博士

学生たちの間にはかなり無軌道な者が多く「酔うては枕す美人の膝」式に放埒な日々を送るのはあたり前のこととされ、古い厳格な教育を受けた人たちから見たらずいぶん肩をひそめるようなことがいくらでも眼についた。そこで文部当局のある智慧者が考えたのは正服正帽で、後に「学士さまなら娘をやるか」とまであこがれの的となつた角帽も実は風紀整正の手段として執られた副産物だつたというようなエピソードもある。

だが、そんなことくらいで時勢のブレーキがかかるものではない。三十四年の西寮々歌が、「嗚呼哀へぬ東洋の、二千余歳の君子国、銀鞍白馬華を銜ひ、翠袖玉簪美をつくし、栄華の夢を貧ほりて、文明の香に人酔へり」と悲憤慷慨しているように世は挙げて外来文化の心酔時代だつた。六十何年も経つた現在でも私たちは鹿鳴館時代と呼ばれるそのころを想像すると一種異様な感じを受けるのだが、当時の国粹主義者から見たら實際黙視していられたかつたのだろうか。

明治学院戦が発端

そこで考え出されたのが当時法科大学教授だつた法博木下広次氏を教頭に起用し、全校生徒に寮生活を強要するという思い切つた強請政策であつた。明治二十一年十月一日、三日の両日全校学生を前にして行つた有名な籠城演説の中で木下は「私は諸君の言動が高潔で自重自敬の精神に富み社会

一般から尊敬されているとはどうしても考えられない。たと単に、諸君が容易く大学に入ることができるといふ、それだけのことではないか」とか、「諸君が教師に敬礼をするのは落第点をつけられることを恐れる卑劣心からではないか」

「大学は決して諸君を歓迎してはいないのだぞ」などと痛烈にやつけた後で、「籠城を欲せざる人、又堪えざる人はわが輩共に守ることを願わず早く脱去あらんことを切望す」などというずい分思い切つたもの、要するに混濁しきつた一般社会から純真な学生たちを切り離し、將來の日本を担当する健全な分子を育てようというのだつた。だから一度俗世間を超越した以上、たとえどんなにさゝやかな垣根でも、それは城における堀やとりでとおなじだから、断じてこれを踏み越えることも

外部から犯されることも許してはならぬと教えた。

一方明治学院はというと、明治五、六年のころ横浜にあつた米人ブラオンと、ドクトル・ヘボンの家塾から出発して東京一致



明治23年より25年春までの第一高等中学校チーム優勝記念。前列左から福島、伊木。中列左から小林、中馬、高田、鹽谷、伴。後列左から福井、恩田の各選手。

では面白くなかつたのだ。このように一高と学院は、少し大げさないえば当時の日本を代表する二大思潮の対立で、いわば食うか食われるか思想的には犬猿の間柄にあつたわけである。

さて、その日両軍のいでたちは——という、一高方が体操部から借り出した青とも黒ともつかぬようなツッソルテンの小倉服に、素ハダシという蛮的なのに反し、学院方では雪白のシャツの胸にピロウドで大きくMの字を現わし、白フランネルの半ズボンには赤糸で桜の花の縫いとりをしてあるという、ちかごろでもちよつと探し出せぬほどハイカラなものだつた。

ところでいよいよ試合がはじまると一回一高方無得点なのに反し、学院方二点を得その後も次第に点をかさねて六回には悠々六点をリードしこのまま進んだら一高方無惨の大敗を予想された。

この日一高には柔道大会が開かれていたが、一高危しと聞き數十人の猛者がどつどつ野球の応援に押し出してきた。なるほど味方繰くすれの形勢である。そこで彼らは棒切れで大地を叩いたり、声をからして声援大いに努めたり、なんとかして頼勢を食いとめようと躍起になつていた。

するとちよつどその時、彼らが陣どつていたすぐうしろから一人の外国人が土手から顔を出したかと思つとヒョイと垣をまたいで入ってきた。これを見つけた例の応援隊の一団は、

「やや、あいつ垣根を踏み越えたぞ」
「なにッ、無礼者——」

と、たちまちその外人を取りかこんでしまった。この外人がすなわち問題の主人公明治学院教師のウイリアム・イムブリー氏だったが、少しおくられてくると一高の正門が閉まっているので、本郷通りから根津、谷中方面へ抜ける道路を球場の喚声をたよりにやっていると垣根の低いところが目についた。そこで彼は土手を這い上ると垣をまたいで球場へ入ったのだが、そこを運悪く見つけたわけである。

もと／＼イムブリーにしてみれば、別に個人の邸宅というワケでもなし、ましてや自分の学校の選手が試合している球場だしそれにヤンキー一流の気安さも手伝って別に悪いことをしたとは思っていない。それで早く自校の応援席へ行こうと急いだのだがこれがイケなかった。なにしろ「何時に来るか」という電報を「汝逃ぐるか」と誤読するほどの一高だったから、イムブリーが自校席へ逃げ込もうとするのだと直感し、口々にわめき合いながらおっとり囲むと手当り次第に石や棒切れを投げつけ、その一つがイムブリーの額に命中した。一説に加害者は当日一高のピッチャーをつとめていた岩岡保作で、石でなくバットでなぐったともいうが、真相は判らない。

「遙に一人の異人が高き籬欄を越して入り来るを見る。皆その無礼に驚き馳せ行きてこれを詰責す。これ手をもつてかれを推すかれ足をもつてこれを蹴る、これもかれも皆な行きぢがいが、たちまちにして鮮血淋漓。行きぢがいがより出でし血しほ。これもかれも悟りを開きたがいにコレハドーモ、ソレ

ハソレハと事落着せり。云々

これは一高校友会雑誌の前身「筆華」第五号に掲載された報告記事の一節だが、昭和十二年筆者がある新聞にこの事件のことを少し書いたとき、当時一高の教授で後に学習院長・宮中顧問官などを歴任した山口鏡之助氏が、「或者が砂利を拾って投げつけた、先生は額から少し血が出たのみで、そのまま驚いて帰ってしまったのである。事件というのはそれだけで決して伝えられるような押す、殴る、蹴るといふような騒ぎではなかった」と抗議されたことがあったが、果してどうだったろうか。――なに

正岡子規のノート

外字新聞がこゝを先途と一高を非難するのにも理由があった。というのは前にもい

ところが収まらないのは外人方の世論だ。中でも十九日附横濱「ガゼット」のごときは、これこそ日本人が日常抱懐している排外思想の現われだと言った。きつかけに「初めは無礼なりとして加害者を憤り、つぎに幼稚なりとて高等中学をぞしり、ついに進んで野蛮なりとて日本人を罵りて止まず」（日新聞記事）はてはナイフで斬りつけたのではないが、土足で蹴つたらしいというような憶測まで飛び出す始末だった。

外字新聞の記事から領事の乗り出しとなり、領事からアメリカ公使館へ、アメリカ公使館から日本の外務省への抗議となり、さらに外務省から文部省、文部省から一高へと事件は意外な進展を見せ、このまゝだと由々しい国際問題にまで波及しそうな形勢になってきた。そこで一高方もじつとしてはいられず、結局一高方からは砂利を投げたという二、三の学生が英語の教師と松田幹事に連れられてイムブリー氏を訪問、改めて遺憾の意を表し、イムブリー氏も釈然と握手をのべたのでさしもの難問題もようやく解決した。

まけた。そのまけ方見苦しき至りなり。折から明治学院の教師インブリー氏学校の垣をこえて入り来りしかば、校生大に怒り之を打撃して負傷せしめたり。明治学院のチャンピオンにも負傷ありければマツチは中止となりたり。」

たゞしこの負傷は試合中の出来事で、乱闘の際の副産物でなかったことを書き添えておく。

事件はともかくこれで一応落着したが、収まらないのは一高方だった。なるほど形式上は無勝負になつてはいるが事実は明かな大敗北である。そこで彼らはこの日を屈辱と敗北の記念日とした。部史によれば、この敗軍以後のベースボール会は、球を弄するが為に非ずして、奮勃たる一片の氣を球に托して外に表示するの其となれり、しかして校友は大學して是れが後援となり、ベースボールはすでに校技に進み、我が校風はベースボールを仮つて其奇風を吐かんとせるの時なりしを以て、我が部の覚悟は曩日の比にあらず、従つてその責任また重きを致し、練習頗る殫猛を極めたり。とあるから一高野球部の指導精神はこの時にはじめて確立したわけである。果然その年十一月八日の対明治学院戦に二十六対二に復仇したのを皮切りに二十九年の第一回国際試合まで三十八連勝を記録し、さらに三十二年早慶両校に連敗するまでの十数年間覇権を守り通したいわゆる一高黄金時代の基礎は実にイムブリー事件当日の高価な敗北がもたらしたものと見えるかも知れない。

「野球」命名事情

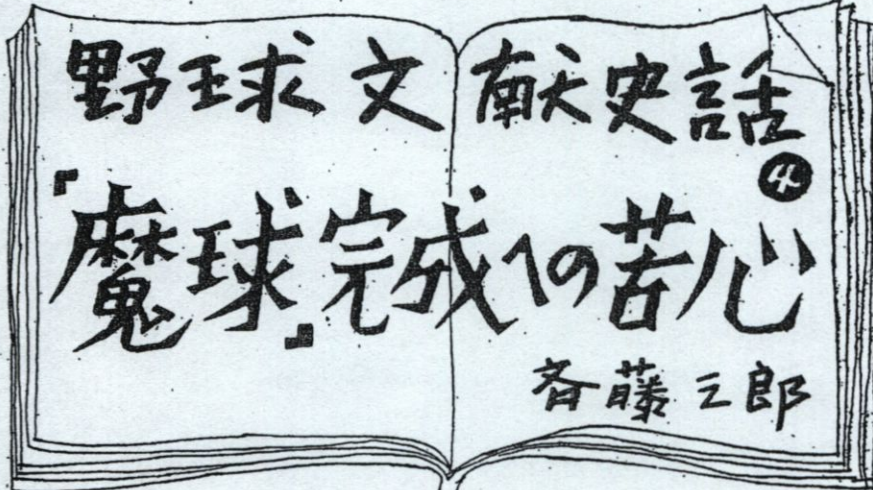
けた Ball in field だから(野球)はど
うだといわれたので。なるほど通訳だ、
云々」

二十八年二月、一高は「野球部史」を校
友会雑誌の号外として発行した。これは当
時の一高が如何に野球そのものと真
剣に取組んでいたかを物語るもの
だが、それにも増して重要なものはこ
の部史あるが故に、混沌時代と呼ば
れる明治初年の野球渡来時代から、
一高が黄金時代を築いた迄の二十数
年間の経路を系統だつて知ることが
出来るわけで、もしこの部史と校友
会雑誌に掲載されているその時々の
ベースボール部報がなかったら、日
本野球の上代史はそれこそアイマイ
モコ、つかみどころのない一箇の伝
説となつていたに違いない。

こんなワケで一高は校友会雑誌で予告し
ていた「ベースボール部史」の名を改めて

「自分はどうしてもベース・ボー
ルを日本訳して買いたいものだ」と
前から考えていたので、中馬庚
マネジャーは三高では三角形の底辺の
Baseをとつて底球と訳していたが、余
り直訳過ぎていたので笑つていたので。
ある晩、バットを夢中に振っていると中馬
が馳け付けて来て、青木、よい訳を見つ

「野球部史」の名を用いた。もちろん「野
球」という日本訳が活字になつたのはこれ
が最初で現に編者中馬氏もこの本の序文で
「余はろんでにす部ヲ庭球トシ、我部ヲ野
球トセバ大ニ義ニ適セリト信ジテ表題ハ野



球部史ト題シ、又、左野、右野、手捌き
(Motions in throwing A Base) 球扱い
(Fielding) 等ノ語ヲ用ヒタリトイエドモ
其他適宜ノ語ニ想到セザル者ハスナワチ原
語ヲ用ヒタク」と断つてゐる。
ところで、これより数年前「野球」とい
ふ文字をペンネームにしていた人がある。
ほかでもない正岡子規だ。子規と野球につ
いては書けばいくらでも材料に不足しない
が、ここでは割愛するとして当面の問題を
片づけよう。

二十三、四年ころまでの子規はざつと数
えて三十近くのペンネームを使つていたが
その中でボールに関係ありと思われるもの
にも一つ「能球」がある。知つての通り
彼は野球にかけてはよほど自信があつたら
しく、虚子や碧梧桐の書いたものを見ても
わかるが私の推測では「ボールに堪能な」
という意味を通わせて「能球」と彼自身は
読んでいたと思う。子規の本名が升とい
ふ字を「のぼる」と読ませることから考へる
と、もう一つの方の「野球」もやはり自分
の本名に語呂を合せて「のぼる」とシヤレ
たことも容易に想像される。

彼が「野球」と呼ばなかつたらうと考へ
られるのはこの「文献史話」の第一回に奉
げた二十九年七月の新聞「日本」に寄せた
ベースボールの紹介記事に他の熟語、たと
えば「投者」(ピッチャー)、「擲者」(キャッ
チャー)、「基」(ベース)、「除外」(アウト)、「
立戻」(スタンディング)、「外曲」(アウト
カーブ)、「内曲」(インカーブ)、「墜落」(ド
ロップ)などとかかなり難解な言葉を使いな
がら、「ベース・ボール」だけはいせんと
して原語そのままを使つてゐるのを見て
わかつた。

たゞ、ちよつと妙に思われるのは、これ
より一年も前に彼の母校である第一高等学
校が、「野球部史」という訳語を使つてい
るのを知らなかつたのだらうかということ
で、もし承知してゐるとしたら彼のことだ
からもろろんその文字を用いてゐたらうし
また彼がそのペンネームを野球と呼んでい
たとしたら「そもそも野球なる文字は過ぐ
る二十三年のころ、わが輩のこの技に熟
中せる頃、この文字を雅号とせることあり
し」ぐらいは書きつけたかも知れないと思
う。要するに子規はどうも「野球」という
言葉を知らなかつたらしい。

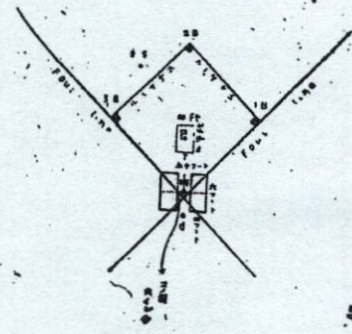
デイレード・スチー
ルとバントの始め
二十二、三年ころの一高が案外高度の野
球をやつていたことは前にも書いたが、一
二の例を部史から拾つて見よう。
二十三年十一月二十三日対溜池クラブ戦
の時である。二塁走者の伴宜は既に二死で
はあるし何とくして三塁へ進みたいと考へ
ていた。そこで彼は投手が投球すると同時
にバットとスタートしたが遊撃手の前あたり
まで行くと急に立ち止つてしまつた。溜池
の捕手は内心「しめたッ」と思つたが悪投
を恐れて急に投手へ強く返球した。投手は
走者の飛び出したことを知らなかつたもの
だから瞬間ちよつと戸迷ひしたが、それで
も振り返りざま二塁手へ送球した。けれど

もその時伴は素晴らしいステイディングをやったのでマンマと生かしてしまつた。

「投手甚だ悔色アリ、然レドモ復々奈何トモスルナシ、再ビ打手に投ズ、伴故ラニ再ビ中間に至ル、捕手復々急ニ投手ニ投ズ、投手受ケテ急ニ2Bニ面スレバ伴ハ疾走シテ3Bに向フ、投手急ニ熱球ヲ投ゼントスレドモ体勢已ニ2Bニ面セルヲ以テ逸カニ3Bニ面スル能ハズ、怒色清面、而

シテ伴ノナスニ任セタリ」

部史の一節である。つまり伴は一度テストしておいてからもの見事にバッテリーの虚を突くことに成功した訳である。これはホンの一例だが伴は非常にいいランナーだったらしく、しばしこのような放れ業をやっているし、投手の福島金馬などもこれに劣らぬ好走塁を示している。



二十四年四月四日、駒場の農学校で行われた対連合軍戦の時福島

が二死後三塁にランナーとして出た。相手方の町

田、白洲のバッテリーは当時老巧無比の名手なので、尋常一様ではとうていホームイン出来そうにない。ところが福島は何

と思つたか、町田の投球と共に猛然ホーム目がけて突つこんだ、まさにス

チール・ホームの態勢である。然しさすがは名捕手白洲文平、ボールを手

にするとバツとベースの前に飛び出した。既にホ

ーム近くに迫っていた福島は「しまった」とい

ながら三塁方面へ帰ろうとしたがこれを見た白洲

は何のとばかり三塁へ矢のような球を送つた。と

ころが、これは福島が始めから計割していたこと

だった。すなわち彼はボールが三塁へ送られたのを知ると、スルー向きを変えてアツ

という間に、まんまと白洲の懐ろへ飛びこんでしまつた。

これももちろん一種のデイレッド・スチールだが、その次のインニングに連合軍の町田がこれと同じことをやつた。けれども

一高の捕手伊木常誠はボールを捕ると三塁へは投げずに、グン／＼とランナーを追いかけた。

「町田氏愕然急忙、疾走セントシテ体勢正サニ前ニ満張セルトキ伊木已に追及シ

鉄拳ヲ延ベテ之ヲ突ク、町田氏体軀人ニ秀デ体勢甚大ナルニ、加フルニ伊木ノ

強力ヲ以テス、六尺ノ偉漢倒レテ声アリ輕塵町田を包ム、我爾次拍手哄笑、運動

場為メニ嬉グ」

つまり町田は鶴の真似をする鳥の例をそのまま、あたら物笑いの種を作つてしまつ

たのだが、これなどの例を見ても当時の一高は技倆でもヘッド・ワークでも断然他を

引き離していたことが判る。ちなみに今迄の定説だとデイド・スチールの初めに三

十九年十月二十八日の早慶戦に、早大の河野安通志投手の政行したのがそれだとい

うことになっているが、いずくんぞ知らん二十三年代の一高がチャンと先鞭をつけて

いたのである。

大の竹内投手が前にいった河野氏に「先生

の頃にもカーブがあつたんですか」と聞いたという話は有名だが、そのカーブが七十

何年前すでに日本へ輸入されていたといつたら今の若いファンなどは本当にしないか

も知れぬ。

明治九年五月ごろアメリカ留学から帰つた平岡熊氏が新橋クラブをつくり、カーブを投げたのが最初だというのが常識になつ

ているが、技倆の程はいつさい判明せず、従つてそれは創世紀の一伝説としてあがめ

奉つておいていいだろう。

さて、このカーブがいつの間にか第一高等中学(一高の前身)に伝えられ、二十年

ころ例の正岡子規居士とバッテリーを組んで、当時、海内随一の勇名をとどろかした

岩岡保作投手にいたつて漸やく突戦に用いられる程度に進歩し、次代の福島金馬投手

にいたつて全く完成されたといえられて

る。

当時の人々が如何にこの新らしい技術の出現に驚異の眼をみはつたかということはそれを表現するに「魔球」の文字をあては

めたことでも分ると思う。

岩岡が苦心研究の末やつと習得したのは「アウト」と「イン」の二種類といわれて

いるが、インは恐らくイン・シートで、アウトはアウト・カーブであつたらしい。

福島は初め岩岡から手ほどきを受けたがそれだけでは満足せず、二十三年夏、たま

／＼アメリカから帰つた堀尾という人からカーブの原理とか、投げ方を指導された

のに自分の工夫を加え、その年十一月二十

二

三

四

五

六

七

八

三日の対連合軍戦には、敵も味方もあつて、いとられるほどの働きを示したというから、えらいものである。

この試合のへき頭第一に彼はいきなりファースト・バッターを捕手飛球に、つよく二者を三振に打ち取って敵の度胆を抜いた。二回も一塁凡打・フライとたちまちツーアウトを算えたので一中方は、またこの回も難なく終了するだろうと、いささか飽気ながつていた。ところがどうしたことか福島の投球は俄かに狂い出し一球、二球、三球、四球、五球とも全部ボール。そこでランバイヤーは大声に「ファイブ・ボール・ス・テーク・ユアー・ベース」と長たらし宣言を下して、ランナーに一塁を興えた。当時は四球でなくて五球だったのである。連合軍方は多少喜色あつたが、既に二死後だったので、いくらかへんだなくらいに思つていた。

ところがである。あつうることか、あるまじいことか、一度狂い出した福島の右腕は、まるで曠野に放つた奔馬の如く、次の打者もまた次の打者もことごとくファイブ・ボール、しかも全部がストリートというから十五球投げつて一のストライクもなかつた訳だ。ツーダウンとはいへ今や各塁人で満さい、すなわちフル・ベースである。

これには敵も味方もあつて、氣にとられてしまった。が、人間は現金なもので、こうなると相手は急に元氣を恢復してチャンスをもものにしようとはしゃぎ出し、味方の彌次は意氣消沈するばかりか、中には「あいつがシカラン」などと憤慨する者すら出て来

るといふ始末。とにかく満場の視線は期せずして福島の隻腕に集注されたのもつともである。

この回の第六打者はすでに意氣軒昂ボツクスに入り、眼中福島など問題にしていない模様である。彌次の喧騒は耳も聳せんばかり。さて、プレートは眼を移すと、「金馬右掌ニ唾シテ庭上に擲シ、又洋袴ニ擲シ」というのだから、ちようどスタルヒン投手がピンチに追いこまれた時そのままと思えば間違ひなからう。さて、

「姿ヲ整ヘテ猿臂ヲ揮フ、球勢盤屈、敵長棒ヲ揮ヘド及バズ、ストライク・ワン！ 第二球来ル、敵マタ揮フ、魔球マタ遠シ、ストライク・ツウ！ 敵大ニ警戒シテ第三球揮ラズ。第四球来ル、迅速風ヲ生ジ直進矢ノ如ク、敵ノ胸前ヲ掠メテ本塁マ上ラ飛ブ。敵狐疑一瞬ノ間、ストライクボール已ニ逸シ、判定者叫ンデ曰ク、ストライクス・スリー・アウト！ 敵相見テ苦笑シ、福島ノ唇辺ニ微笑ノモルヲ見ル」

と一高野球部史は伝えているが、これで見ると、どうやら福島はひそかに期するところがあつたので、わざと五球を連続し、フルベースにしておいてから、おもむろに伝家の宝刀を揮つて一頭兩断の快挙に出たものらしい。

この試合一高方の打撃大いに振い、塩屋の三塁打、小林のホームラン等続出し32対5、実に27点の差を以て一高の大勝に終つたのだ。事実、福島のドロップはよほど凄いのム

であつたらしくこの年十一月八日に行われた明治学院とのイムブリト事件復仇仕合の記事にも、「福島更ニ球ヲ擧ゲテドロップヲ投ズ、球勢猛烈、敵ノ頭上ヲ飛越スルガ如クニシテ、却テ其足下ニ落ツ、二人色ヲ失シ：云々」

などと見えている。二人云々というのはネット裏で福島の魔球を偵察していた明治学院方の彌次を指しているのだ。

ところで、こゝに見逃せないのは、このすぐあとにつづけられた次の記事である。「打チ方ハ此試合ノ際大ニ進歩シ、熱球一打遠ク野外ニ逸スルヲ願ハズシテ、球勢強弱ノ中ヲ得、唯敵ノ隙ヲ覘フノ策ヲ取り、殊ニ山本松雄ノ如キハ球ヲホームニ死セシメ、敵ノ拾フニ暇アラザラシメテ、疾走1Bヲ奪ハント勉ムルニ至レリ、云々」

つまりこれを現在の言葉でいえば、いたずらにホームランなどのロング・ヒットを打つこと考えずに、時にはブレイス・ヒット（ねらい打ち）もやれば、山本松雄の様にホームの前へコッソリと落ちて、相手方の呆然としているうちに疾走して一塁に生きることの研究した。つまり彼等はこの時代既にドラッグ・バントという高等戦術を応用していたのである。

ついでに十八、九年ころから野球がどのよりに移り変つたかを部史の記事から要約して見よう。当時の練習は大いにノックだつたが、これは主として打撃練習のためだつたらしい。試合の時は教室用の机をホームの右側に置き書記がそこで記録を取り、

判定者は捕手の邪魔にならぬようにずっと後ろにいた。そして打手が振りさえしなればストライクに算えず、もし振らぬにカウントを取れば大いに抗議するのが常だつた。当時はファウルを打つとアウトにする規定だつたからである。捕手がバウンド

キヤッチだつたので二、三塁をスチールするのは朝飯前で、スチール・ホームも珍らしくなかつた。また一回に六点や七点取るのは普通で双方共二十点前後の得点があればそれで勝敗を定め、試合が終れば両軍が茶菓に疲れを慰し、最後に彼我入交つてノックをしてから解散することになつてた。

そのころ新橋クラブでは既に現在のようになデイレクト・キヤッチをしてしたが、学生では駒場の町田が素面素手でやつたのが最初で、一高では高田源五郎が二十三年五月十日の対商業学校戦にやつた大いに賞讃され、それ迄バウンドで捕つてもアウトだつたものが、この試合から現在のように改められた。捕手で手袋を使用したのは明治学院の白洲、一高では堀尾権平寄贈の半指の手袋を高田が用い、やがて堀尾の帰朝後はその持ち帰つたミットを使つたのがきっかけとなり遂に全国に普及したので、それも初めは捕手だけだつたのが間もなく一塁手も小形のミットを使った。けれども、各

野手がグローブを持つ様になつたのは明治三十年以後のことであつた。

国際試合の始まり

一高が群がる強剛を尻目にかけて遂に栄ある覇権を握ったことについては、学校当局が野球を土気振興の一方法として奨励したことが何物にもまして大きな推進力となったのはもちろんだが選手達の精進もなみく〜でないものがあつた。たとえば福島金馬が投手の重責を荷うや、夏休みを利用して駒場、明治学院、豊応などの連合軍の練習に参加して技術のみが一方相手方の長所欠点をす〜かり探つて一種のスパイ活動みたいな仕事をやってのけた。これがどれだけ役に立ったか知れなかつた。

しかし、覇者一高にも悩みがあつた。というのは彼等の持つてゐる力が他の諸校とあまり違いすぎたために、中央球界ではもはや相手になるものがなかつた。そこではるばる京都の第三高等学校に書を送つて挑戦したが、これも体よく敬遠された形となり、どうにも拳のやり場に困つたすえに、白羽の矢を立てたのが横浜のアマチュア倶楽部だつた。

このクラブがいつ頃創設されたか不明だが、明治六年頃の雑誌「フアー・イースト」などに運動場の写真が載つてゐるところを見ると、かなり古くからブレイズと想はれる。そこでアマチュアの倶楽部員といふのは主として外国商社の支配人だとが技師長或いは店員といつた風な妻帯者が多く、いわば紳士連の社交クラブの色彩が強かつたので、一高では果して自分達のような若い学生チームなどを相手にしてくれるかどうか

野球文献史話

⑤

一高対外人クラブ戦の前夜

斎藤三郎

いフアンは知つてゐるだろうが、横浜の外人グラウンドと神戸東遊園の外人グラウンドは創立の歴史が古いせいか、それとも手入れがよかつたためか、それこそ文字通り毛せんを敷いたような緑の芝生に蔽われていたもので、一高では「あのグリーンのグラウンドでボールを打つたり投げたりした事はないから、負けても良いからあのグラウンドでやつて見ようじゃないか」(井原外助氏談)といふことになつた。これが世に伝えられる第一回国際試合である。

かといふ不安があつた。けれども「断わられたつて別に恥じゃあるまい」と勇敢にチャレンジしてみると、米人方も相手欲しいと思つていたやささきと見え「こっちへ出かけて来てくれるなら」との返事だつた。古

「選手は本日をして監督と共に敵地に入らんとす、天候の悪若し明日素懐を果す能はずんば永く彼地に掩留し徐るに決勝の期を待たんとす、因て後事を大和田、篠田、守隨の三氏に托す」

「校友皆憂慮に堪えず、しばしば窓を推して天を望み、黎明雨稍止むに至り、始めて寝に就く者比々皆是なり」と云り、二十三日細雨濛々東都の天を蔽う衆皆以て大事去れりと」と、それこそ天を仰いで長嘆した。

「一高の挑戦はこの前にも一度試みられたのだが「野球は我輩の国技なり、我輩の軀幹諸君に倍す、敢て遂す」と、てんで相手にしなかつたが二十八年の冬、青井鏡男投手が横浜に遊んだ時クラブ員と会つたのがき、かけとなり、一高教授W・B・メソン氏の斡旋もあつて、いよ〜交渉がまとまつたのは二十九年五月十九日、そして試合はその月二十三日と決定した。

「一高がひどく心配したのは当日の天候だつた。と云うのはアマチュア方の言い分として「日曜は教会に赴かざるべからず、廿四日以後は商機多忙貴命に応ずる能わず」と云うのでもし当日のチャンスをつかぬことになり、いつ試合が出来るか見当がつかないことになる。そこで背水の陣を覚悟した一高野球部は生徒控所に次のような

「一高がひどく心配したのは当日の天候だつた。と云うのはアマチュア方の言い分として「日曜は教会に赴かざるべからず、廿四日以後は商機多忙貴命に応ずる能わず」と云うのでもし当日のチャンスをつかぬことになり、いつ試合が出来るか見当がつかないことになる。そこで背水の陣を覚悟した一高野球部は生徒控所に次のような

「校友皆憂慮に堪えず、しばしば窓を推して天を望み、黎明雨稍止むに至り、始めて寝に就く者比々皆是なり」と云り、二十三日細雨濛々東都の天を蔽う衆皆以て大事去れりと」と、それこそ天を仰いで長嘆した。

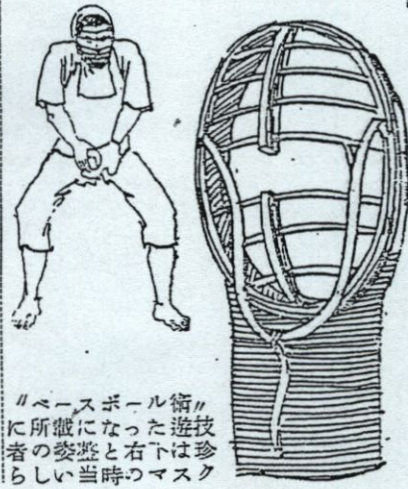
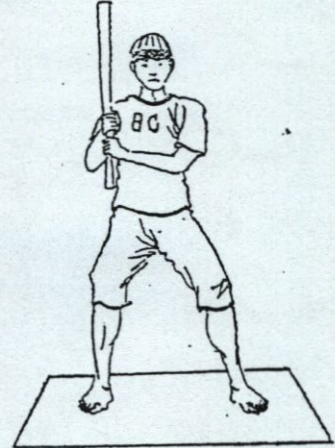
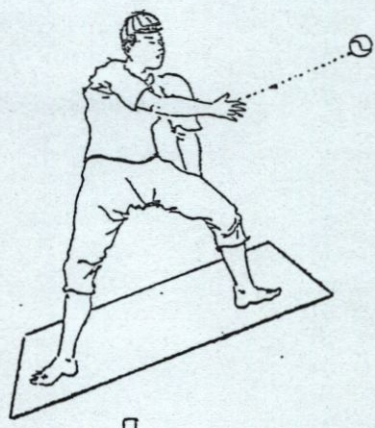
「校友皆憂慮に堪えず、しばしば窓を推して天を望み、黎明雨稍止むに至り、始めて寝に就く者比々皆是なり」と云り、二十三日細雨濛々東都の天を蔽う衆皆以て大事去れりと」と、それこそ天を仰いで長嘆した。

「校友皆憂慮に堪えず、しばしば窓を推して天を望み、黎明雨稍止むに至り、始めて寝に就く者比々皆是なり」と云り、二十三日細雨濛々東都の天を蔽う衆皆以て大事去れりと」と、それこそ天を仰いで長嘆した。

「校友皆憂慮に堪えず、しばしば窓を推して天を望み、黎明雨稍止むに至り、始めて寝に就く者比々皆是なり」と云り、二十三日細雨濛々東都の天を蔽う衆皆以て大事去れりと」と、それこそ天を仰いで長嘆した。

「校友皆憂慮に堪えず、しばしば窓を推して天を望み、黎明雨稍止むに至り、始めて寝に就く者比々皆是なり」と云り、二十三日細雨濛々東都の天を蔽う衆皆以て大事去れりと」と、それこそ天を仰いで長嘆した。

を来し馱夫の狼狽一方ならず、(中略)
場内には斯道のエラ者らしき外人参々伍々陰に我小兵のなすなきを罵り面なり、張幕の中には来賓と覚しき數十の紳士これも得意気に嘯々せり、欄外には數百の勝負如何にと片唾を呑みてひしひしと詰め合ひける。時は三時となり彼我の身支度なりて彼先づ場の上る。云々」
この日一高のメンバーは遊撃井原外助・三塁村田素一郎、一塁宮口竹雄、左翼富永敏彦、投手青井鏡男、捕手藤野修吉、二塁



「技珍ク 遊撃はス ルた下マ ポナと時 スに盛当 一載委い へ所のし に者ら

が投ぜられた。ところが
「球は米國製の新球なり、滑脱駈すべからず、我青井投球常を失しミス四球の恩に浴す、ギン2Bを襲う、村田の投球亦正鶴を失す、エリス四球たりフルヘース校友の憂慮云うべからず。荷場寂たり心動聞くべし、外人の歓声耳に喧く殆んど我を惱殺せんとす、エブル長棒一揮熱球飛で流星の如くLFを超て外廊に達す、校友色を失し洋客齊しく歓呼す、敵の生還二人、我軍動く」

「一年来の強敵拉り去つて朽木の如し、校友狂喜為す所を知らず、人車をやとつて選手を載せ、擁して停車場に赴く(略)已に帰る、先着の校友火を点じ、正門を開き選手を迎えて万歳を祝し校庭に至る」
そこで鼓譟な祝勝の式があつて小宴に移り「壯談快語歡を極めて散ず」というのだから、一高大勝の知らせが伝わるると全国各地に於て校友先輩はもとより広島、岐阜などの中学や小学校からの祝勝電報、郵書の一寄せらるるもの積で堆をなすのの有様、

井上匡四郎、右翼上村行栄、中堅森脇幾茂これに対する横浜方は三塁ミス、左翼ギン、捕手エリス、遊撃アーベル、一塁チルデン、投手シウイヤー、左翼クロフォード中堅ハント、二塁ロングの面々で、もちろん両軍の精銳を網羅したものであつた。

こんな風に一高方のすべり出し悪く、一回表一挙四点を献じてしまつたから日本人の心算は気がでない。
しかし、一高もさるものその裏二点を得、二回にはア軍三者三振の後を受けて一挙四点奪い、どうやらこの試合の主導権を握りその後次第に点をかさねて九回には二十九点という驚異的の得点を挙げ、これに反して、ア軍は第一回の四点のみという全く敗

殊に木下前校長の如きは「ベースボール国際試合に大勝を得たる由の電報唯今読了、遂に積年の御志望を遂げ、大慶至極と存候、予は諸君に望む、臨戦尙不失礼、勝而不慢敗而不挫は日本武士道の本意にして、第一高等学校の夙に特色とする処なることを」

「一、吾人少壯青年者は、独り技術の点のみならず、智識の点に於ても、同く光輝ある全勝を博するの責務あるを記憶されんことを」

さて、試合は午後三時かきり判者スト、イン氏の開戦命令により青井投手の第一球

「吾々の時代には大下いの試合は一時間内外の短時間で完了していたのに、この試合は二時間近くもかかっている。これは投手が少し乱れて来ると内野手が皆一ヶ所に集まって何かチョボ／＼話し合つたり、われ

いうまでもなく木下氏は青年客気の赴くところ、あまりスポーツにはかり熟中することの危険を思つて一本釘をさしたわけである。
学校の名譽を代表するといふ責任感もあつたろうが、当時の一高選手はスポルディングのガイド・ブックなどを参考に寄宿舎の二階で布団を敷き枕をベース代りに猛烈なスライディングをやつたり、投手は校庭の片隅の堤に向つて風雨を厭わず投球練習に励み、朝晩や学業の余暇の校内散歩に特別製の重いバットでスライディングの稽古を、また雨天には二階寢室の廊下でゴロの捕り方を研究するなど「そんな事をすれば学校の方では先生に睨まれ、お前は学校に何しに来たんだ、学問をする気があるのか無いか」と先生に叱られる」というようなことがあつたらしい。(井原氏談)けれども当時の選手達が後年いづれもそれ／＼の分野で名を成していることを考えると、もちろん学業の方も一倍增強したのであつたことが推察される。
ところで当時の一高野球なるものは果してどの程度のものであつたらうか、井原外助氏は昭和十一年学士会大阪支部の講演「我國野球の幼年時代の思出」中で、ちょうどそのころ発足したばかりの名古屋金鯱と東京セネダースのゲームを見た感想として、

われ時代の第二選手でもしない失策をしば
／＼やっているからだ。もちろん失策も時
によつてはやむを得ないが、しかし自ら許
すべき失策と許すべからざる失策がある。
その許すべからざる失策を準備、走塁、打
撃においてやっていると基礎が出来てい
ないためだ」という意味のことを力説して
いられるが、試みに近頃の大学野球など
内野手（捕手もよくめて）が投手へ返球す
るのでさえ満足に出来ないようなのが多い
のを見るようになるほどと考えさせられる。

野球専門書の出現

国際試合における一高の大勝は、一高の
黄金時代に錦上更に花を加えたものであ
たが、それにも増して意義のあったのは、
この試合が刺戟となり恐ろしい勢いで野球
熱が普及したことだ。何しろ問題にな
るまいと思われていたのに本場のアメリカ
人チームを、それも段違いのスコアで敗
たのだから、日本国中が眼の玉をでんぐり
返したのも無理はない。それは、今まで野
球など取り上げたこともない新聞や雑誌が
一よりにデカ／＼と書きだしたのを見て
判るやうなものである。

「文献史話」の冒頭でも書いたように、正
岡子規が忘れかけていた愛球心を喚び起し
て新聞「日本」にベース・ボールの紹介記
事を書いたのもこの試合の直後だ。たし、
これから話そうと思ふ日本最初の野球専門
書が発刊されたのも、この時であった。す
べての物事は、何か大きな事件や問題が起

ると、それがきつかけとなつて進歩したり
改良されたりするものよりである。近く
に例をとるまでもなく、イムプリ事件が一
高発奮の動機となり、後に早大の海外遠征
という有史以来の快挙があつていゆる早

慶戦時代をつくり、これが刺戟となつて明
大や法政や、立教、東大などをはじめ津々
浦々に至るまで恐ろしい勢いで普及して行
つたことはあまねく人の知るところ。

ところで先ずこの記念すべき著書のアウ
ト・ラインを説明すると、著者は当時帝國
大学在学中の高橋慶太郎という人、書名は
「ベースボール術」またの名を「ART OF
BASE-BALL PLAYING」といふ。明治

二十九年七月十八日、発行所は東京神田同
文館、菊半截、本文四〇頁といへば、まこ
とに片々たる小冊子である。

私の貧しい知識から云うと、この本に掲
載されたボール、ミット、バット、マスク
ベースなどの実物図は、この種類のものの
紹介としては恐らく日本最初のものよう
に思われるし、投手は巨大なボックスから
投球している図や、怪しげな面に形だけの
手袋は当時としてはハイカラだつたらうが
現在から見るとたしかに前世紀の遺物とし
か思えない格好だ。

また、アンパイアの職責を重視して「ヘ
ースボール規則を確実に行わしむる裁判官
なり、その裁判は始審にして終審なり、遊
技者之を一步も犯すべからず、云々」とあ
る。従来審判官と云う名前は、初めの頃海
軍士官などに判定を依頼してから起つたと
云う事が定説となつてゐるが、三十年頃ま

で判者と呼んでいた事から考えるとこの説
は少々怪しく、私の推察する所ではこの書
の裁判官あたりがこの言葉の起源ではない
かと思ふ。

また、この書では打球の方向が一定する
と敵に乗せられる不利を説いて、ある試合
の際巧みに敵の虚を突いて喝采を博した好
打者の実例を引き、当時すでにベース・
ヒットを実戦に應用していた事を証拠立て
てゐるのは一つの驚異と云うべきだらう。

前に私は、井原氏の談を引用して当時の
一高選手が「許すべからざる失策はしな
かつた」と書いたが、なる程この本の口絵、
野手がゴロを捕る図を見ると腰をガツチリ
落し、身体を中心でつかんでゐる。すなわ
ちこの体勢なら絶対に後逸（トソネル）す
る筈はない訳だ。学生野球に比較してプロ

にトソネルの少いのは日本のプロ野球が終
戦後漸く本格的な捕り方を習得したからで
ないか。戦争前に来朝したゲリッツ、モラ
ン、ゲリーンチャーなど云う名手でさえ、よ
く／＼のゴロでない限り必ずこの体勢でガ
ツチリ受け留めていたことを考えると、一
高で六十年も前すでにこの正しい野球をや
つていたことが分り、今更ながら彼等のえ
らさに頭が下るばかりである。

ついでだが古い記録に見当る○はホーム
・イン、×はアウトでその右肩に123F
またはHとあるは一二三、及本塁でアウト
になつた符号、Fとあるはフライ・アウト
またSはスタンディングを意味することを
書き添えて置く。
高橋氏のこの著書は数多い野球書の中で

最も稀なもの一つだが、昭和十四年三月
この書を入手した前後のいきさつなどを讀
売新聞に発表した際、在日朝鮮留學生某氏
から著者高橋氏が京城の延禧専門學校に教
鞭を執られる傍ら、体育運動の普及に尽力
されて半島運動界の父として畏敬されてい
ることなどを知らして頂いたが、その後
「昭和五年頃の東京帝大に高橋一」といふ
手印のいたことをごぞんじでしよるが、この
高橋投手こそ外ならぬ先生のご令息であり
ます。という意味のことが書き添えてあ
つた。

当時のフアンなら高橋投手が五高時代に
明大予科を十九回の延長戦に完投して勝利
投手となつたことや、帝大に進学後これも
田部、吉相、辨、鬼塚、中村らを中心とす
る第二期黄金時代の明大をストリートに敗
り、感極まつた選手達が相抱いて泣くとい
う劇的場面を覚えてゐる筈だ。古い言葉な
がら正にこの父にしてこの子ありと云うべ
きであらう。

◇：野球試合で大貴得点のレコードは一
八六九年のパフアロー対コロンブスの二〇
九対一〇が横綱格で、一八六五年のサズレ
ック対ダンヴィルの一六二対一一や、

一八七〇年のシカゴ対メンフィスの一五一
対一など有名なものである。日本の職業野
球では阪急32-2南海（昭和15）グレート
リング26-10金星（昭和21）などが一級品で
ある。大学チームでは早大34-10法政（大
正14）早大37-10立命館（昭和16）が最高
記録であらう。

くやしがる外人

第一回の国際試合に不覚の大敗をまねいたアマチュアはよほど口惜しかったらしく折から横浜に停泊中の軍艦チャールレストン号とデトロイト号から、精銳をすくって必勝の意気込みも物凄く復仇試合を申し込んで来た。

しかし、一高としてはなるべくゲームをしたくなかった。というのは折悪しく学年試験を目前にひかえているので、選手はもろろんだが一般学生の応援を期待することが出来なかつたからだ。それともう一つは一年間に僅か百円内外の部費では往復の汽車賃だけでも大変な負担だったのだ。

ところが今度の場合は一般のファンが承知しなかつた。「都下の土人諸校生、来て之を問ふ者門に接し」というから前回の大勝が如何に一般の野球熱をおおめたかがわかるかと思ふ。これは中央ばかりでなく岐阜の小学校、広島中学などからは「再勝を期す」の電報が寄せられるし、横浜の有志からはビルニダース菓子三百包の寄贈申出があり、またそれまであまり関心を持たなかつた時事、読売、日本などの諸新聞社から「試合の経過をぜひ知らして欲しい」と申込まれるなど部史

が「天下の耳目悉く致にあつまる」といつているのも濱更のホラではなかつたのだ。前景気はこのようにすばらしかつたが、結果は32対9の大差で再び一高に凱歌が挙げた。然し、その後がイケなかつた。「校

友先づ凱歌を上げ、内外一万の同胞狂呼拍手と相和し、万雷の一時に発せるが如く、絶て前回の静肅に似ず、甚しきは聞苦しき悪口雑言を吐く者あり」とあるから調子に乗って「ザマア見る」とか「バカヤロー」

自慢にならないことをやっているのだから仕方がない。しかし、一高の大勝が外人の対日本人観を大分変えさせたことは確かだつた。それ迄は何度申込んで「野球は我国技なり、

相手になつたのに、その年六月廿七日の第三回戦にはデトロイト号の方からはばる一高へ出かけて来たのを見てもわかる。前二回はいずれも横浜だつたので見たくてもなかつた。見られなかつた東京市民も、今度は天

野球文藝史話

新聞にモテた国際試合

〔6〕

斎藤三郎

などをやつたのだらう。横浜、神戸、長崎等の外人新聞はこぞって「運動場裡のユチケツトを知らぬにも程がある」と吊しあげ

観衆が場を埋めつくしたとあるから、これはまさに前代未聞の出来事といえよう。

一高遂に敗る

し血の氣が多いせい、遊びごとと果し合

さて、このゲームも22対6また一高

の開始されたが、不思議なことには前三回の試合でいつも凡打三振をくり返していた

いをゴツチャにする傾向があるようだ。部の編者が「我君子国の体面に一汚点を印せし者なり」などと嘆息しているが、その

鼻をひよこつかせたりばかりだつたが、一回裏大ホームランを飛ばした捕手のシモンソ

が手をつけて血を流しながらも奮戦をつづけ、投手バッターソンが高い鼻の尖端を熱球に打たれながらも「なお手鼻汁をかみつづ」一高勢の前に立ちはだかつた武者振りには、驚嘆の眼をみはらぬものとはなかつた。

のではないかと思ひほど素晴らしい打撃ぶり
を示し、一高が頼みとする青井鏡男投手は
しきりに打たれ、自慢の好守備も安心出来
ない状態、何しろ一回すでに一挙五点を得
られたなどは過去にかつて無かつたことだ
けに、一高方はやや狼狽した形であつた。

だが一高もさるもの、二回五点、三回一
点、四回四点と次第に態勢をもち返し、ど
うやらこの試合の主導権をとつたかに見え
た。その日アマチュアの遊撃手はチャーチ
という男が守つていたが、味方危しと見る
やプレートに現れ、必死に食いさがる一高
方の目前に立ちふさがつて、容易に点を興
えなかつた。

さて、互に一進一退のすえラスト・イ
ンニング14対12、アマチュア二点のリード
一高最後の攻撃である。部史に拠れば「チ
ャーチが今までくわえしパイプを口より取
りしもの時なり」とあるから、彼はそれ
まで遊び半分に投げていたものらしい。そ
こで一高は「九選手いづくんぞ慨然けり起
せざらんや、鼓譟突貫甚だつとむ」と、二

点の差を何とかして取り返そうと奮戦した
が、実力の差はいかんともし難く「米国人
の忘るる能はざる独立の記念日は、我に忘
るる可らざるベースボールの記念日とはな
りにけり、噫。」と部史が嘆息しているよ
うに第四回にして一高は始めて敗者の悲哀
をひしひしと味わされたのであつた。

一高はどうして敗れたのだらうか。彼等
の誇る青井投手は何故打たれたのだらうか
それには次のような事情があつたのだ。
つゞく三回の敗戦に面目をつぶしたアマ
チュア方はオリンピア号の水兵チャーチに
その敗因を究めて貰うことにした。そこで
チャーチはデトロイト号のゲームの時、何
食わぬ顔をして一般観衆の間にまじり、ひ

そかに青井の球筋を研究し、それに適応す
るいわゆる科学的打法をアマチュアの選手
に教えこんだのだが、そんな事とは知らな
い一高が「これはく」とばかり驚きあき
れたのも無理はない。しかもこのチャーチ
先生、今でこそ米太平洋艦隊オリンピア号
の一水兵だが、かつてはあるプロフェツシ

ョナル倶楽部の一員として、四ヶ月に一万
四千弗の高給を受けていたという豪の者、
しかも捕手モナハン、三塁手スタンレーは
いずれもオリンピア号乗組の士官で、野球
にも練達の士。だから一高が二点差の惜敗
はむしろ天晴れしごくの善戦といふべきで
あらう。

だが、思わぬ苦杯をなめた一高方は、校
友が天津の水泳場で慰勞会を催そうといふ
のを「帰京直に練習に就かん事を以てす」
と、なか／＼聞かなかつた。敗けるとクサ
リ切つて練習を休んだりするような近ごろ
の選手達とは、ちと心がけが違ふようだ。

独立祭当日の敗戦は一高にいろ／＼のこ
とを教えてくれた。始め一高がワンバウン
ド・キャッチから現在のようないレクト
・キャッチに移つてから、捕手だけはミツ
トを使ったがあと八人は皆素手だつた。
そしてこの素手時代は九年続いた。始めて

の国際試合当時は小さな身体日本人がビ
シャリ／＼と素手で熱球を捕っているのを
見た外人が目をもいで驚き、一高ではまた
それをひそかに誇りにしていたが、七月四
日の試合で走者富永が二塁で刺されたこと
など、それ迄は夢想だになつたことだ
けに受けたショックも大きかつた。ミット

を持つていないと、いきおい投手から各塁
手への牽制球にしても加減して投げること
から殺せる場合でもみす／＼生かしてしま
うことが多い。つまり素手には限度がある
ということが分つた。
そこで中堅手森脇茂等が自らデザイン
して赤門前の皮革商美満津商店に作らせ、

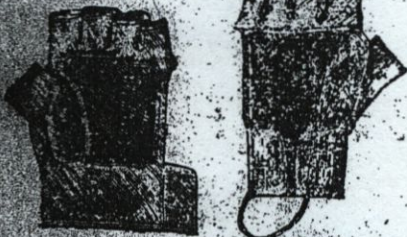
一方打撃でもそれ迄の「当らずと雖ども遠
からず」式の力に任せてブツ飛ばすメチャ
振りをやめていわゆる「サイエンスファイツ
ク・バッティング」(科学的打法)を採用
することにした。これは突に野球が日本に
渡来してから二十五年目にして訪れた空前
の一大革命だつた。
そも／＼捕手がいわゆるダイレクト・キ



A号フィールド
ス・グローブ



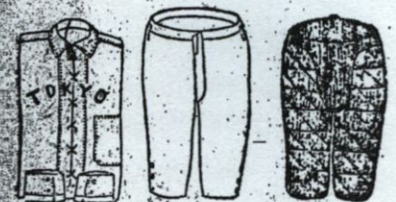
B号フィールド
ス・グローブ



号外グローブ



各号キャッチャース・ミット



ベース・ボール用衣服



上、並等壘当
右、バット

ヤッチを始めたのは新橋クラブで年代は明治十五、六年ごろと推定されるが、学生チームでは駒場農学校の町田が素面素手の放れ業を演じて世間を驚かせた。一高でこれをやってのけたのは二十三年四月の対商業学校戦の高田源五郎で大いに彌次を喜ばした」と記録に残っている。

用具の値段調べ

要するに球から目を放すな。ボールをよく見ろという事は、野球技が今後どんなに発達しても千古変らぬ鉄則であろう。

こゝに面白い話がある。三十四年十一月

捕手で最初に手袋を使用したのは明治学院の名捕手白洲文平で、これは普通の手袋の少し厚目のものだったらしい。一高では前に言った高田でこれは第一関節あたりからフツリ切断した形の手袋だが、やがてアメリカから帰った堀尾権太氏の持ち帰ったミットを使いようになり、それがおいおい全国的に普及したのであった。

宮崎県師範学校の生徒が修学旅行で日光見物の帰り道に一高と手合せし6対26で大敗したが、この時の師範方を見るとヘースマソ全部が素手だったので、当の一高がかえって驚いた。昔は吾部赤手熱球に当る、中ごろ技術の進歩のためにミットを用ゐるに至りしもの、古今思ひ及んで多少の感なき能はず、即ち彼等に謂て曰く、諸君の元氣絶倫、唯惜む素手の受球は程度を越ゆ能はず、技術の進歩を妨ぐるものなり、乞ふミットを用ゐて斯技の研鑽を積め、元氣は心に在つて形のみ存するに非る事を記せよ」と

次はバットだが、一号から四号までは各五十銭、号外バット大形二十三銭、小形二十二銭。そして当時のバットはいわゆるノツハラボール型で、中程から先はどこへ当つても割合によく飛ぶように作られているとがわかる。

次はベースボール用衣服(ユニフォーム)だが八円五十銭、四円の二種類があり、折襟で左の胸にポケットがあるのも面白く、パンツは前方に綿を厚く入れてミシンを刺子のようにつけ、スライディングなどしても容易に破けないようにしたものがあったが、一高では明治二十年代から大正末期まで一貫してカツラギ製の丈夫一方なものを、黒い兵子帯にカラツ脛、それに普通の紺足袋という襪カラなもの、スパイク付の野球靴をはき始めたのは大正二年四月一日以後のことであった。

しかし一高ではこれを新人に許さなかつた。理由は「初心に在てはミットの害あり益なく、大に斯技の進歩を妨ぐるを以てなりき」。つまり基礎の出来ていない者はミットに頼り過ぎて球速の殺し方がまずく、球から目を放す悪癖を生ずる結果に陥りやすいことを指したものであろう。ついでながら近ごろの若い選手で、一番不足しているのはキャッチ・ボールだと思ふ。七、八間くらい距離で相対した素手の二人が最遠距離へ投ずる力でもって投げ合い、相手の手からボールが放れた瞬間目をつぶってそれを正確に捕るだけの基礎が出来てさえいれば、バッティングなんかワケなく上達するといふのが一高の選手養成法の極意だったし、事実一高に入って初めてボールを握つたよりな素人が、僅か半年か一年の間素晴らしい選手になった者は少くなかつた。

ところが、一高が「ミットを使いなさい」といつてから五年後の明治三十九年ごろ、北信濃の越後境に近い山の奥の小学校で十二、三歳くらいの私達少年選手が、ナマリ

の芯の入った石みたいな堅いボールを、素手でピシャ／＼やっていたのだから、ことによると私などは素手野球の最後の選手だったのかも知れない。因みに、アメリカでミットが使われた最初は一八九一年(明治二十四年)といわれている。

付言。第一回にベース・ボールという言葉の最初に見えたのは明治五年云々と書いたが、その後、明治四年十月発行の「和訳英辞林」(一名、薩摩辞書)に「BASE BALL 玉遊」とあるのが目についたので、こゝに訂正しておく。

た。要するに球から目を放すな。ボールをよく見ろという事は、野球技が今後どんなに発達しても千古変らぬ鉄則であろう。

宮崎県師範学校の生徒が修学旅行で日光見物の帰り道に一高と手合せし6対26で大敗したが、この時の師範方を見るとヘースマソ全部が素手だったので、当の一高がかえって驚いた。昔は吾部赤手熱球に当る、中ごろ技術の進歩のためにミットを用ゐるに至りしもの、古今思ひ及んで多少の感なき能はず、即ち彼等に謂て曰く、諸君の元氣絶倫、唯惜む素手の受球は程度を越ゆ能はず、技術の進歩を妨ぐるものなり、乞ふミットを用ゐて斯技の研鑽を積め、元氣は心に在つて形のみ存するに非る事を記せよ」と

次はバットだが、一号から四号までは各五十銭、号外バット大形二十三銭、小形二十二銭。そして当時のバットはいわゆるノツハラボール型で、中程から先はどこへ当つても割合によく飛ぶように作られているとがわかる。

次はベースボール用衣服(ユニフォーム)だが八円五十銭、四円の二種類があり、折襟で左の胸にポケットがあるのも面白く、パンツは前方に綿を厚く入れてミシンを刺子のようにつけ、スライディングなどしても容易に破けないようにしたものがあったが、一高では明治二十年代から大正末期まで一貫してカツラギ製の丈夫一方なものを、黒い兵子帯にカラツ脛、それに普通の紺足袋という襪カラなもの、スパイク付の野球靴をはき始めたのは大正二年四月一日以後のことであった。

野球文献史話 (7)

生命がけの一高式野球

斉藤三郎

名著「野球」のこと

三十年七月、大阪の前川文栄堂から発行された中馬庚氏の「野球」は一高式野球虎の巻ともいふべき名著だった。

著者中馬氏のことには前に幾度も出て来たように、その前半生を野球道普及のために生きて来なような熱血漢だったが、氏のとくに野球を一般青年にすすめたい理由として、

「一球各々三拾銭乃至七、八拾銭、数箇以テ僅ニ一個月ヲ支テ可ク、打棒数本或ハ半年ノ用ニ充ツ可ク、二反ノ平地ハ随処ニ存ス球ヲ懐ニシ棒ヲ肩ニシ紺ノ脚絆ニ足袋既足以テ他校ニ赴ク可ク、練習半日以テ敵ノ野球場ニ熟スルヲ得ベシ、故ニ今日日本邦富ノ程度及ビ学校所在地ヨリシテ、予ハ此技ヲ以テ最モ行ヒ易キモノナルベシト信ジ、」
などは、現在から考へるといささかおかし

いようだが、そこまで説明しなければわかつて貰えなかつたところに、時代の移り変わりがうかがえようというものである。

次に技術的な方面をのぞいて見ると、「兩人相對シテ投ゲテハ受ケ、受ケテハ投ゲ、或ハ高ク或ハ低ク、高キニ失セバ飛ビ上リテ受クベク、低キニ失スルモノハS、B(シヨ)ト・バウンド、トナスベク、右ニ逸スルアリ左ヲ襲フアリ、期セズシテ各種ノ球来リ、各種ノ変式応用ヲ練習スルヲ得ルベシ(略)老手ノ投ゲ合ヒニ至リテハ對戰ノ久シキ、しばしば二時間ニ及ブコトアリ」と云

つてから、次のような実例を示している。「凍雲四方ニ塞ガリ、時ニ飛散ノ逆ルヲ見ルニ窓下ニ投ゲ合フ僅セバ指頭轟ンデ直伸セズ、両掌凍結シテ感電ナシ。第一球ヲ受クレバ塔然声アリ石ヲ打ツガ如ク肩ノ何ノ辺ニアラヲ知ラズ、第二球ヲ受カレバ奇痛全身ニ徹ス。兩人息ヲ吹テ凍雪ヲ暖メ、三球四球稍覺ニ熱ス、第十球

ニ至リテ投球漸ク猛烈トナリ全身漸ク生氣アリ。第二十球ニ至リテハ即チ真ノ奮闘トナリ。満身ノ力ヲ加フレバ熱球疾キコト矢ノ如ク身ヲ抽ンデ是ヲ受ケレバ両掌ニ一種ノ痒味ヲ生ズ。痒味生ズレバ体温已ニ上リ全身已ニ慣熟セルノ微ナリ、何ヲ為シテカ成ラザラ「ソウカネ。本當に出来てるかね」と微笑シ。受ケテハ返シ返シテハ受ケルニ随ツテ両液汗ヲ生ジ、吐息蒸氣ノ如ク、初メニハ上衣ヲ脱シ、終リテハ肌衣ヲ脱シ、人ハ皆外套ヲ纏ヘルニ我唯兩人裸体ニシテ満身

ノ發汗虹ニ似タリ(略)少憩十分、以テ書ヲ讀ムベク、以テ數理ヲ考フベク、以テ健啖十碗ナルベシ。云々」

この本を讀んで感心させられるのは、當時の一高が実にこまかい野球をやっていることで、たとえばキャッチャー前方や、三塁線附近に軟打(ドラッグ・バント)を試みたり、犠牲打を応用したり、狙い打ちをやったり、なまじつかのカーブよりも力強い速球の方が有利だと教えたり、スライディングは敵のタッチを避けるのが主目的だから「IBノ如ク踏ミ越スモ害ナキ者ハ」から「IBノ如ク踏ミ越スモ害ナキ者ハ」から「IBノ如ク踏ミ越スモ害ナキ者ハ」から「IBノ如ク踏ミ越スモ害ナキ者ハ」

これについては面白い話がある。尤しか昭和十二、三年ごろだったと思うが、ある日たまたま帝大の球場に現われた内村祐之博士が「諸君はキャッチ・ボールが出来ますか」といったら、並いる選手達は「様に頬をふくらして「キャッチ・ボールくらい出来ますよ」と答えたそうだが、内村氏は「ソウカネ。本當に出来てるかね」と微笑シを洩らしたということを、当時の捕欠投手Yという青年から聞いたことがある。それから十数年、野球も戦前のレベルに達したといわれるが、まだ本當のキャッチ・ボールの出来ていないらしい、大学の選手諸君のお手の内を拝見することに、筆者はいつも内村博士の言葉を想い出す。

この本を讀んで感心させられるのは、當時の一高が実にこまかい野球をやっていることで、たとえばキャッチャー前方や、三塁線附近に軟打(ドラッグ・バント)を試みたり、犠牲打を応用したり、狙い打ちをやったり、なまじつかのカーブよりも力強い速球の方が有利だと教えたり、スライディングは敵のタッチを避けるのが主目的だから「IBノ如ク踏ミ越スモ害ナキ者ハ」から「IBノ如ク踏ミ越スモ害ナキ者ハ」から「IBノ如ク踏ミ越スモ害ナキ者ハ」から「IBノ如ク踏ミ越スモ害ナキ者ハ」

ザルヲ利アリトス」とか「敵手常ニ両手ヲ非常ニ低クシテ此ルヲ妨グルノ癖アラバ、將ニ球ニ触レントスル時、敵ヲ飛越セヨ」などの例で、ことに五十年前から走り越す方が時間的に有利だと証明されているのは、今もって無用のスライディングに自分の足を捻挫したり、相手を負傷させたりしているのを見ると、「どうも野球は明治三十年ごろから見るとだん／＼とますます

来などといわれても仕方がないような気がする。

「ボールハ何ノ故ニ即チ遠キカ、近キカ、高キカ、低キカナルヲ以テ、ボールトスルヲ宣告スルヲ誠ニ満足ノ法ナリトス」これはアソパイアに対する注意だが、これでは出したことがある。というのは私達が小学校でボールをやっていた明治四十一年、二年ごろまではアソパイアがいち／＼「リットル、ロウーとか「ベリー・ハイ」または「リットル・遠い」「ニヤ・ボール」などと遠近高低に註釈をつけたもので、文句のない好球だと「ナイス・ボール」とか「いいタマ」などと宣告する人もあった。また「ロスト・ボール」というのはボールが見物人の中や、草むらの間に入ってなかく見つかからない時の宣告で、この命令が出るタイムと同じ効力があり、敵も味方も血眼になってボール探しをしたものだった。この本は非常に売れたものらしく私の知っている範囲では七版をかきかきされており、著者中馬氏のほかに森脇、宮口、上村、藤野青井、井上など当時の二高選手が殆んど総



二高当時の青井鋭男投手
(素手に注意)

最初の総合雑誌「運動界」

中馬氏の「野球」が出三十年七月、日本最初の運動総合雑誌「運動界」(THE ATHLETIC WORLD)が創刊された。編集には井原外助、伴宣、中馬庚、五来欣造、守隨啓四郎など一高出身者が担当し一号には「向ヶ岡の十二男」「横浜野球合戦」をはじめ、山口熊本両高校戦、静岡中、浜松中野球戦など約半分近いページを野球のために割いていることからも、そのころからすでに野球の人気の圧倒的だったことがわかる。

「宇治の川波漲らず、屋嶋の浦風さわがずども、弓矢執る身の覚悟程世に切なきはなかるべし。此に説き起す第一高等学校対外人仕合の瀝瀟を尋ねるに頃は昨年皐月水無月のことかや、向ヶ岡の岡の刃に、世の憂鬱を他所に見て、墨田川原の月に泣き、筑波風に身を曝せる一千有

記の一節だから驚かされる。

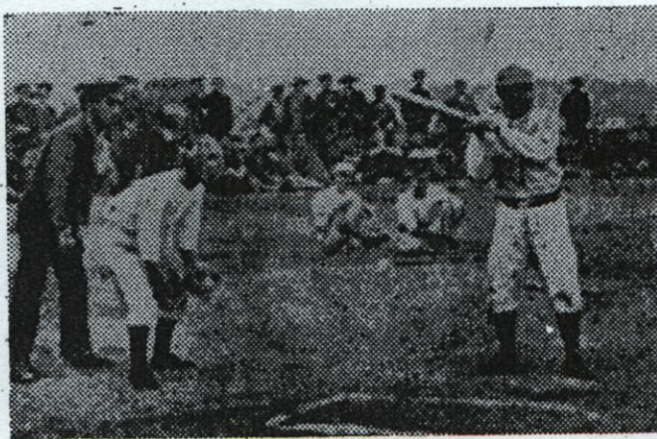
初にも言つたようにこの雑誌は日本で最初の運動総合雑誌で野球を筆頭にボート、テニス、水泳、自転車、陸上競技などあらゆる競技を網羅し、殊に野球、水泳には多くのページを割いているのが眼につく。それとこの雑誌独特の企画として殆んど毎号運動に関する資料写真や附録にしている点で、たとえば一高野球部員、棒高跳の図、嘉納治五郎、平岡潤氏等の肖像など珍らしいものがある。

が、それにもまして珍らしいのは、地方野球界の消息をかなり詳しく報道していることで、たとえば「本郷区の野球界」「水戸城内の野球戦(栃木尋中対茨城尋中)などをはじめ、東京以外で野球の盛んな土地は——と云つた風な珍資料がある。

「ベニスボールは盛んに流行しつつあれど何れの地が最も盛んなりやといふに、それは云ふ迄もなく東京にして、これに次ぐは横浜なり、以下流行の程度如何によりて各府県を区別せば」と以下、兵庫、大阪、山口、茨城、栃木、岡山、愛知、京都、広島、岐阜、静岡、熊本の順に挙げているが、これを現在のそれと比較してみるのも一興であらう。

「きなりこの一文を読んだら源平盛衰記か八犬伝を連想するだらうが、これが当時の野球戦り。云々」

ところで、この中の茨城はどうした経路から入ったものか彼の俳人子規の「水戸紀行」(二十二年春)に常磐公園で子供等が野球をやっていることが書いてある。



巻脚絆、タビ、袖長ユニフォーム姿での試合風景。審判は中馬氏(明治卅二年ごろ)

ピッチャーあり、キャッチャーあり、ベニス・メンあり、ストライカーは竹を取りて毬(女の持て遊ぶまりならん)を打つ。規則とのはずとはいへフアウル、アウト位の事を知りたり。此地方に此遊戯を存するは体操伝習所の卒業生などが小学校にひろめたるならんと思ひやれる。」

と、彼らしい観察を下している。この体操伝習所と云うのは明治十一年十月廿四日に東京神田昌平橋に設立されたもので、初代の講師にはアメリカのアーマスト・カレツジ出身のジョージ・E. リーランド氏が選ばれ、体育指導者を教育するのが目的だった。これで見ると従来日本の野球を一般

化した功勞者として、一高を中心とする学生野球の人々を推さねばならぬ。案外その裏には体操伝習所などの力が大きく働いていたものかも知れない。

雑誌「運動界」はこの外にも米国野球の紹介や、「一高野球部の歌」「第一高等学校野球部史」「慶応義塾体育会野球部秋季大会記事」などまた二巻八号(31・8・5)には竹の里人(千規の別号)の有名な「ベースボールの歌」九首も掲載されたが三巻十二号(32・12・12)で廃刊したらしいのは惜しまれる。

学生野球界の沿革

野球が日本へ渡来してから明治二十年ごろまでの主流は平岡潤氏を中心とする新橋倶楽部、次の十五年は完全に一高がリードし、三十六年ごろからの覇権は早慶の手に移り、その傍系として学習院、三高などの存在もある時代にはかなり重要な役目を果たしたことになるが、これから少し、それから野球部の沿革を書いて見よう。

「慶応義塾体育会野球部」といかめしい名のついた慶応野球部は明治十七年のころ、米人ストーマー氏から手ほどきを受けたのが芽生えだした。もちろん始めは微々たるものだったが二十年ごろになるとやや盛んになり青山英和学校(青山学院)高等商業校・明治学院などと数回戦って互いに勝敗ありと云う程度だった。

ところが二十一年春岩田伸太郎という人が米国から取って三田ベースボール倶楽部

を組織し二十三年春ごろからやっと選手らしい者が揃い、その年五月体育会が生れたのを機会にその一部となり、春秋二期に大会を催したり、駒場農学校、明治学院などと連合して弱者一高に挑戦したが一向に齒が立たず、漸く世に認められたのは早慶戦の始められた三十六年以後のことだった。

早稲田は慶応よりずっとおくれ公式には三十四年の創立となっているが二十八年四月二十日、「早稲田倶楽部」が生れた当日の発会式後に相撲、テニス、撃剣などと共に「ベースボール等の諸遊技あり」とあるのを初めとして、その年十月十七日大森八景園に遠足した時、早稲田倶楽部の旗を押し立てた下で「テニス、ベースボール、フットボール等種々の遊戯は初まれり」という記録が学校の機関誌「中央時論」に載っている。この紀行文の中に「汽車の便をかる警沢家あり」とか「道傍にひさぐ柿栗に腹を肥すもあり」などは、如何にそのころの学生生活の素材であったかが想像される。

早大が漸く有名になったのは初期の早慶戦以後であったことは前に書いた通りである。学習院も近ごろでこそあまりパツとしないがその歴史は古く、二十三年ごろの創立、もちろん初めはあるか無きかの存在だったが、三十七、八年ごろにやや頭角を現わし、三十五年横浜外人団や米艦「ニューヨーク」などと善戦し、その年十一月の対早大戦に十四対三で大勝したのをはじめ、三十七年七月には第一期黄金時代の早大と十二回の延長戦を演じ、三十八年五月には一高、横浜外人に連勝し、その年十月にはアメリカ

遠征から帰った早大に挑んで六対三の切迫戦に覇者の胆を冷やすなどの目ざましい武者ぶりを示し、「学習院強し」の印象を深く刻みつけたものだった。

三十九年秋、早慶二大学が応援のことで決勝戦を中止し、大正十四年秋復活する迄の二十年間の空白状態を埋める花形は何といつても一高対三高戦だった。大正末期夏期休業を利用する以前は四月の第二日曜前後に行われるのが例で、ちょうどそのころは球場の周囲を取り巻く桜の老樹は今を盛りと咲き乱れ、その花の下で母校の名譽を賭けた若者達が文字通りの死闘をつづける光景はまさにこれ青春を讀める一幅の名画だった。

第三高等学校蹴水会陸上運動部が発会式を挙げたのは二十七年十月ごろのこと、「建屋の諸子は、本春来十数回の基球試合(テニス)に其熱心の度、進歩の程、如何に非凡なるかを忘れざるべく又、底球団(ベースボール)の如何に股賑なるかを認知せば、云々」(蹴水会雑誌第一号所載)といっているがその実「一部有志の間に僅かに命脈を保っているに過ぎなかつた」程度であつたらしく、しかし三十二年ごろからそろそろ勃興の氣運に向い、三十六年には「寄宿舎門上電燈既に輝き、比叡愛宕は漢として見るべからず」という猛練習の甲斐あって、神戸外人団を十対八で破るくらい腕前になっていた。

対一高の第一回戦は三十九年四月四日、本郷の十高校庭で行われ五対四の大接戦裡に惜敗したが、翌四十年には九対四でみごと

と雪辱、大小數十の大大鼓小太鼓、石油の空罐、敷布をつなぎ合せた大応援旗、大小數十本の旗や吹き流し、乱吹するほら貝など、百姓一揆を思わせるような名物応援団が漸やく世に知れ渡つたのはこの頃からで今でも地方などへ行くと朴園にカラッ脛、腰にタオルをぶら下げた応援団が声を限りて怒号叫喚する一種独特な応援タイプはこの一高三高戦の名残りを伝えるものと考えて間違いない。

前に三高が BASE を三角形の底辺の義と解釈したことを書いたが、その当否は別として「ベース・ボール」を日本訳にした最初のものとして三高のこの「底球」という文字は一応日本野球史の一頁に記録しておいてもいいのではなからうか。

二組の双生児選手

従来のオリンピックにもフィンランドのアキレス兄弟のような有名な兄弟選手が活躍したが、ヘルシンキ大会でもドイツの体操のウィードとフランスの中距離のヴェルニールという二組の双生児兄弟が出場することになつてゐるが、特にウィード兄弟は優勝候補。また米国からは三千里障害にアシンフニルター兄弟が出場する。

リチャーズと少年の町

ヘルシンキの棒高跳優勝候補のゴブ・リチャーズ(米)は子供の醜聞を失い不良の群れに入ったのを教会の神父に救われて、イリノイ大学神学科を卒業した人で、一生を社会救済事業に投じてゐる。だから彼は「少年の町」の子供の応援がすばらしい。

野球文献史話 ⑧

用心棒つきの少年野球試合

斎藤三郎

一高の不正用球事件

中馬庚氏の「野球」が驚異的な売れ行きを示したことは前に書いた通りだが、これに刺戟されたものか、その翌、三十一年六月には高橋雄次郎氏著「新式ベースボール術」をはじめ博文館発行の「内外遊戯法」、今井信三氏の「ベースボール・フットボール案内」、山口高等学校野球部の「野球規則」、高橋忠次郎、依田直以、小野泉太郎三氏合著の「最新ベースボール術」、津田素彦氏の「ベースボール及クリケット」、前記高橋氏の「野球叢談」、永島小蝶氏の「実験遊戯全書」、高橋氏の「ベースボール術秘訣」、高見沢宗藏、島飼英次郎両氏合著の「ベースボール術」などが次々と世に送られ、しかもそれらの著書がいずれも相当の売れ行きを見せたらしいのは、もちろん一高対外人戦がいち早くの意味で、一般読者に非常な

影響を與えたためと思われる。

野球の専門書がこのように歓迎されたくらいだから「少年世界」、「少国民」、「海国少年」、「近世少年」、「中学新誌」などの青年向きの雑誌がわれわれと野球技の紹介やルールの説明、試合実況などを掲載し、その中には高山樗牛や河東碧梧桐という文人の名も見える。殊に碧梧桐の雑誌「ホトトギス」に寄せた「ベースボール」と題した写生文の如きは、野球文学の傑作として後世に残るだろうと思われる立派なものだが、これはいざ後日と取り上げることとし、ここでは一高の不正用球事件という珍らしい話題を探ろう。

この世にも奇怪な事件をあげたのは前に挙げた「ベースボール術秘訣」の著者高橋雄次郎氏で、その言い分を聞くと「世には度外の重量を、大きさを有てる球を仕合に持ち出して、対手の不備を衝き、之を破るの策を探れる者あり。明に規則以外の重且大なるを承知にて」此方略を創め、規則を蹂躪したるものは第一高等学校の撰手とす。而して同校の対手を制する秘訣として、今猶同校に珍重せられ、次第に地方に広がりんとするなり。」高橋氏はこのような爆弾声明をたたきつけてから、その実例として、二十九年六月廿七日の二高対米艦デトロイト号のゲームの出来事を挙げています。

「第一高等学校にては特に美満津屋に命じて、七十二匁の重球を製せしめ、仕合に持出せし事。然るに外人は、之を拒絶せしめ僅かに一回に用ひしのみにて廃したり、又、明治三十年十月中、対西片軍仕合、三十一年十一月対又軍の仕合には、周田八寸三分の地球を使用せし事とす。」

参考用球の大きさと重量を示すと、重量においては五オンスないし五オンス四分の一（つまり三十七匁強ないし四十匁弱）の周田は九インチないし九インチ四分の一（つまり七寸五分強ないし七寸七分五厘強）という勘定だから、七十二匁だと二十二、三匁以上も重いことになり、大きさでも五分五厘超過しているわけで、もしこれが本当だったとしたらまさに言語道断の不正行為といふべきである。

さて高橋氏は更に「練習の時に制限外のボールを使うのは私も認める。だが試合の時にそんなバカデカイ球を持出すのは卑怯で構わないか。四十匁以上のボールを四百球以上も投げたら腕や肩、腰を痛めるし、大きいボールだと不自然なカーブを起すばかりか遠くに投げたり、速力のある球を出すことが出来ず、試合の興味はひどく減殺される。それなのに一高ではそれを承知の上で相手をゴマ化し、多くの勝利を得ている。なるほどある時代の一高は確かに強かった。けれども相手が少し手ごわいと思ふとこんな不正手段をとり、しかもこれを秘法として次代に伝えるというのがけしからんと思う。野球が単に勝つことだけを目的とするものならば五十匁、百匁、二百匁の重い、フットボール大の球を使って相手のドギモを抜き、または豆ぐらいな小球を使うのもいいだろう。けれども試合とはそんなケチなものではあるまい。私は別に他の非行をあげて喜ぶものではないが、ただ野球界の正しい発達のためにこんなよくないやり方を排斥したいのだ。」

という意味の言葉で一高の反省を求めている。

しかし、高橋氏のこの記事には少々疑わしいところがある。というのは、いわゆる用球の重量と円周制限の規定は、すでに十七、八年ごろからいろいろの著書などで伝えられていて、決して一高だけが知っていた秘伝でもなんでもないのだし、(前掲、中馬氏の「野球」にも明記) 選手の間は非常にデリケートなもので、ホンの二匁か三匁重くても、ちまっと大きくてもすぐに分る

の、七十ニ奴という約二倍にも近いよう
なメロポウな球を、しかも本場の米人との
試合に持ち出したなどということは常識で
考えられぬことなのだ。

実はこの事について昭和十二年ごろある
新聞に発表した際、当時大阪市外吹田町に
おられた青井鏡男氏から手紙を寄せられた
ことがあるので、必要な部分だけを引用さ
して頂く。

これが秘法の真相

「高橋氏は野球の選手でも何でもなく、



明治三十年頃の少年野球（少年世界所載）

その当時頗る面白くなき事を発表致され
ましたが、何も野球家にあらずしてその
真相を知らぬ御方の書きましたものとて
吾々は一笑に附しておりましたが、それ
が因らざる後世の史家を誤らせた原因と
なりましたのは意外と存じます。当時の
選手中には高橋君が考えますような人は
一人もおりませんし、従ってかゝる事な
きを表明致します。

なるほど、重いバット、大いなる球は
ありました。然しこれは何も試合に使用
するものではありませんで、たゞ小生が
投球の練習のために特に作らせたもの
でありまして、五オンス、九インチで
は少しく大
きく感じられ、殊に日本人の中でも小生
のように丈低く且つ指の短いものにとっ
ては、直ちに九インチの球を握ると大き
く感じますので、これを小さく感じさせ
るために、少し大きい球で肩馴らしをす
ることを考えました。それでこれはその
当時一高投手の秘術として伝えました関
係上、高橋氏の記述に対し終始沈黙を守
りつづけた次第であります。

小生が練習に使用した球は特に五オン
ス半、九インチ半に作らせて、指と肩と
の練習をしたもので、現在の投手でもそ
の辺に気がつきますとまったく上手になる
のですが……（略）当節の人は唯他人の
真似をじているに過ぎないように見受け
られます。

またバットは三十五オンスの規程なる
が、毎夜一千棒の振り方練習のため四十
オンスか四十五オンスに作らせて振り方

を練習しましたものであります。それ故
に当時のバットを振って見ると、何だか芋
殻（おがら）のバットを握るような感じ
が致します。（略）

高橋君は見物彌次でありますので、そ
れに触れて見て勝手にかゝる記事を書い
たのでありましょう。もしこれが真の野
球家であるならかゝるものを見たならば
何故かと研究もせられたであらうし、ま
た同窓生の事なれば吾々に質問もあるべ
く、著書に記されたような不都合があれ
ば堂々と拵合つて訂正さすべきが本当と
思いますが、何故そうしなかつたのでし
ょうか、これは私の不審とするところで
すが、とにかく貴兄のように古い記録を
研究せらるる方のために、敢て当時の真
相を語り、且つ訂正しておきたいと思
います。（下略）

青井氏の語る一高不正用球事件の真相は
大体以上のようなものであった。私は巷の
一老ファンとして、往年の一高がいわゆる
日本式野球道完成のために尽した努力に対
してはいつも満腔の敬意と尊敬を捧げるに
ちゅうちよするものではないが、さりとして
不正を許容する程旨目的でないつもりだ。
だが、この問題は公平に考えてどうも青
井氏の言い分の方に筋道が通っている
ように思う。私は昭和十年前後三年間にわ
たりある実業団チームの面倒を見た経験
もっているが、その当時、軟式野球の試合
前に、硬球でウォーム・アップをさせ、非常
に好成績を挙げたことを覚えてゐる。これ

は重いバットを振ったあとで普通のバットを使用した時の軽量感から思いついたまのことで、とにかくそれと同じことを三十年前後の一高が意識的にちゃんどやってきた事が分った。ちよつとした事だが、やはりその頃の一高はえらいと思う。

この原稿を書いている十数日前、筆者は第一回国際試合当時一高のフアースト・ベーン・スマンとして活躍した宮口竹雄氏を青山福田のお宅に訪問、親しくその頃の野球談を承ったが、その時も談たま／＼青井投手のことには及ぶと「青井は随分と苦心もしたが、とにかく素晴らしい投手で恐らく一高歴代の投手中でも抜群の球力があつたと思

います」と口を極めて賞讃されたあとで、「実は、青井の投球にはある秘密があつたんです。それは石垣ズボン（註：H形）の粉ですか——あれを塗っておき、そこをボールでコスると片側だけがツル／＼になり、それでカーブを投げるとビククリする。ような屈折を成したもので、時にはバッターの後方からグツと曲りこむようなことさえあつたのです。もつとも、現在このような加工的投法は許されませんが」と言われた。

片側をツル／＼にする投法——これはたしかにシャイン・ボールと言って、これと反対にボールの片側に紙ヤスリをかけてツル／＼にするエメリー・ボール、独得な睡液をつけるスポット・ボールなど共にある時代の投手が盛んに打者を悩ませた変則投球法の一つであつた。青井氏は一体ど

してそんな投法を工夫したのだろうか。これは面白い研究課題だと思ふ。その頃の高では主として理化学的な方面から球の回転や、打撃術などを研究したというから、或いはそんなことが発明のいとぐちになつたのかも知れない。いずれにしても、二十年から三十年代にかけての一高が近ごろよく言われる科学的野球の領域にまで踏みこんでいたことはいろ／＼の記録が証明している通りで、たゞ驚くの外はない。

荒つばがった少年野球

前にも言つたように、二十二年の春、水戸の常磐公園で子供達がベースボールをやつていたという正岡子規の紀行文は、少年野球最初の記録として貴重なものだが、東京はもろ／＼全国各地でボールが投げられ、バットが振られるようになったのは、何といつても第一回の国際試合以後のことと言つてよいと思ふ。

喜多川渡次という人の著書「下町物語」（大正五年十二月発行）の中に明治三十年前後と思われる頃の少年野球のことが非常に面白く書いてある。

もそれはやはり刺殺にすることが出来た。捕手はまたマスク無しで打者の後に立つのであるが、ワンドで捕球すればよいものを、つまらない所に見栄を張つて、デレクトで受けようとするので時々大きな怪我を蒙る事もあつて、中にはファウルチップを受け外して、鼻柱を挫いた上気絶した者などもあつた。（略）

スタイルと来たらずく野暮で（略）肌襦袢に足袋跣足はまだ上等な方で、中には水練場の水着に赤褌で、平然と他所へ試合に押寄せるものもあつた。たゞ現今と比較しておびただしく勝つていたのは、丸の内へ這入りさえすれば何処でも自由にグラウンドを得られた事で、適当な場所を物色したら、その草をむしり地盤を均して、そのまま誰に憚る所もなく勝手に占領して仕舞うのであつた。（略）

また内野手は走者がある場合ひそかに後へ廻り、わざと足がらみを掛けて置いて、走塁の際ランナーがそれに躓つて倒れる所を刺殺にする位、極めて普通な手段であつて、（略）とにかく試合などと言えば全く活気横溢の結果殆ど半分は喧嘩眼であつた。

或時（略）坂本学校の選手と永楽町の原で試合を挙行した。（略）我々のベースボールは何時もゲームが荒くて、その時なども三十点対二十五点位の結果であつたから優勝した向組の応援団はこれ見よがしに雀躍して、一軍の總帥と看做した私の身辺に絶えず喇叭の筒先を向けてくるのであつた（略）この試合とても顔面を挽回出来ず見えて

取つた私は、いよいよ最後の手段に訴えてやろうと決心した。

最後の手段とは相手の選手に片端から死球の洗礼を與えるのである。其時ちよつと次打者に向組の主將が立ったので、私は早速捕手と合図をして、突然死球を一発食わしておいて喧嘩の種を蒔いてやつた。やがてチェンジになって、今度は私がボックスに立つと、位置につく前、向組のバッテリーが何か囁き合つたかと思つたら、果して（略）私へ死球を食らわそうとして来た。私は予め其事を期待していたのであるから、素早く身かわして、捕手の手から其球を引たくるが早い、反対に向の投手を目掛けて叩き返してやつた。

肩は好くなかつたがコントロールの正確だつた私の投げた球は油断をしていた投手の頭へ美事に命中した。そうなるると向も黙つてはいないで忽ち二言三言の争論から、気の早い応援団はもうそこでもこゝでもなぐり合いを始めて、果てはバットを振廻し乍ら入り乱れての格闘を演じた挙句、私等はそのまま勝負を踏倒して立別れてしまつた。（下略）

何ともハヤ荒つぱい試合もあつたものだが、そのためか、たいていの少年野球団には腕自慢の用心棒がついていて、前に挙げた高橋雄次郎氏なども「赤坂倶楽部」の指導者兼用心棒みたいな存在であつたと伝えられる。

話史文獻球野

9

一高盛衰史の1ページ

斎藤三郎

一高の王座に暗い影

栄枯盛衰は世の習いというが、古今の歴史をたどるまでもなく永遠の覇者は遂に許されぬものと見え、さすが海内無敵を誇った一高の王座にもいつの間にか暗い影が忍び寄っていた。

三十年春、青井、宮口、井上、井原らかつて国際試合に勇名をとどろかせた人達が相ついで後進に道をひらくと、宿敵アマチニア・クラブには十五対六の大勝を博したが、それまでぜんぜん問題にもしていなかった都文館中学に十八対十九(延長十二回)敗北を喫したので皮切り、西片クラブにも五対六と再び惜敗、対都文館の復讐戦には二十六対A対、二十五と未曾有の乱戦を演じた末、見事に返り討ちの汚点を残してしまった。

はいえ、これという相手と戦っていないし、三十二年には球史以来始めての選手推薦式という苦肉の策を行ったが、それには次のようなわけがあった。前にもいったように、一高野球部の台頭時代、つまり明治二十二、三年は、明治初年以來日本の朝野を風靡していた欧米文化万能主義に対する大きな反動時代だった。当時の一高当業者はその波に乗って全学生の寄宿舎収容というような思い切った政策をとり、ちょうどそのころ盛んになりかけた野球を新しい武道として学生間の士気を高める道具に使った。



軍隊時代の守山投手

このねらいは見事に当り、職員も学生もそれこそ一丸となって外敵に対抗した結果が全校を挙げての熱烈な応援となり、選手はまたこれに出来るべく異常な責任感の下に、日もこれ足らざる研究をつづけたのが見事実を結び、殆んど鎮国状態と言うべきそのころの野球界としては、まことに驚異的な發達を上げたのだった。だから普通の学校やクラブの選手達が普通の研究や練習をしていたのではとうてい一高の相手になれなかったのは、決して不思議でもなんでもなかったと思う。

ところが、その鉄の団結にもいつの間にか大きなヒビが入りかけていた。それは、今まで国家の隆盛とか学校の名譽とがいうことばかりしか考えていなかった青年達が、ニイチエの超人主義のような、個人を中心とする物の考え方——思想の洗礼を、(たとえ意識的でないにせよ)受けたり、野球の応援などに身が入らなくなるのは当然だろう。

このようなキザシは三十二年ごろボツボツ表面に出たものらしく部史の編者も「それ選手は校友の戦士たり、校友は選手の後援なり、戦士に推薦を要し、後援に鼓舞を要する、是に運動の衰微に非ずや」などとひそかに不平をもらしているのを見てもわかるし、校友会雜誌などにも校風や思想の問題が真剣に論議されるようになったのもそのころからで、一高がいよいよ凋落の色を見せるようになった三十六年ごろ、人生不可解を叫んで華嚴の滝に身を投じた藤村操を出したことも決して偶然ではなかったと思う。

一高野球部史はこの間の消息を次のように伝えている。「吾部は実に再戦再敗せしなり、およそ事の悲惨なるもの返り討にしくはなし、その練習し修養し、臥薪嘗胆つぶさに艱難をへて、しかも事志と違ふ悲惨と云はずして何ぞ、老選手諸氏絶叫すらく、三敗せば子等を破門せんと、むべなるかな戦の罪か天の亡か、前代未曾有の返り討仕合を演じたる、我部の汚点また極れりといふべし、云々」けれども、これを一方から見れば、それだけ一般のレベルが向上したことを示すものでもあった。そして、その新時代の指導者の多くは、いずれも一高の先輩達であつたところに宿命的な悲劇の原因があつた。

三十二年の一高は五戦全勝を記録したと、

さて、三十二年度の戦績を見るに九戦五勝、これは覇者を以て自ら任ずる一高としてはとうていいたえ難いものだったに違いない、都文館とは一勝の成績ながら、仙合に遠征しては後進二高のために二十一対A対十五に惨敗し、青山学院戦には間もなく早大に入學、創業時代の野球に加盟して第一期黄金時代の中心人物となつた橋戸信(項鉄)らの奮闘に十二対A十一、十八対十五と、文字通り刀折れ矢つきた末敗れ去つた。

たのばよくよく残念だったと見え「嗚呼終りに吾人が熱血を瀝ぎし復讐の拳は挫折せり復讐に敗れたるは吾部十年前後僅かに二回は一昨年の郁球仕合、一は此の青山学院仕合なり」と悲痛な文字で綴っている。

ところで、この都文館には、これも橋戸と前後して早大に進み、覇権獲得に大きな貢献をした押川清が攻守の中心を成していたのだから面白いといえれば面白いが、一高にとってはよくよくの苦手だったといえよう。

だが、とくに一人の天才が現われ、傾きかけた一高野球部史に、光輝ある一ページを記録することになるのである。

天才守山投手の出現

一高のこの運勢を見てふんがいしたのには先賢の青井等だった。殊に国際試合当時の花形だった青井は苛酷と思われるほどのスパルタ式練習を強行した。その一例として次のような逸話が残されている。

ある日、青井はいつものように激しいノックを内外野に浴せかけていたが、たまたまその一打は遠く右翼に飛んだ。野手が夢中で追っかけるのを尻目にボールは高く高く、抛物線を描いて右翼背後の垣根を越し、本郷から根津方面へ抜ける道路を越えて工科大学の構内に落ちた。野手は途中で追ったがとうてい捕球出来ないとして守備位置に引き返した。すると青井は烈火の如く怒り、「何故捕らないのか」と叱責した。野手がその理由を述べると青井は言った。

「一旦高く上ったボールは、必ず落ちてくる。それが捕れないとは何事だ。垣根があつたら飛び越せばいい。道路や柵は踏み越える。是が非でも捕ろうとする気魄がないからだ。意久地なしめが——」

無茶というか乱暴というか。然しそうしたスパルタ教育のおかげで一高はみるみるうちに実力をつけ、三十三年度には七戦全勝の記録を遺すことが出来、つづく三十四年にも宿敵アマチュア倶楽部に六対五と敗れたほかは十七戦全勝、さらに三十五年度も全勝してここに第三次黄金時代を現出したのだった。

当時一高の中心人物は何といつても左腕投手守山恒太郎だった。彼の才能を見抜いた青井は「就寝前三百以上の投球をなさしめ、野手はバットを百以上振らざれば寝合に上らしめず、降雨の際は廊下に於てスライディングをなさしむ」といった風で、とくに守山は非凡の球力を持ちながら、とかくコントロールに欠けていたのを矯正するために、わざ／＼狭い廊下で投球させ、連日の酷使で左腕が曲つたまま投球不可能になると、桜の枝にぶらさがつてまっすぐに伸ばし、直るとまたすぐに投球させるといふ荒っぽい練習を強行し、はては煉瓦の壁の一点を目標に、明けても暮れても投球練習をつづけた結果、ボールの当たった箇所が段々欠け、遂に五寸ほどの穴があいたと言われ、大正十年ごろまではたしか「守山先賢苦心之跡」として保存されていたはずである。

このような死身の練習にやや自信を得た一高は、二十九年七月四日の独立祭当日以来途絶えていたアマチュアとのマッチを復活し、三十四年五月廿五日、いわゆる第七回国際試合を行った。

この試合は非常な接戦で九回二死後に放った守山の右翼を抜く痛烈な二塁打に差一点と迫り、次打者は久保田敬一だった。「一球来り衣をかすめて去る、正にこれデッドボール、久保田これを訴ふれども審判者きかず、二球来り肩を射る、久保田バットを投じてIBに走る、何事ぞブレイキは佛然スワンを磨ぎて備えを撤し、衣を求めて場を出で去れり、衆茫然たり、審判者状を陳じて曰く、故意にデッドを喫せる故にアウトとなすと。然るか然るか、同胞の歓声四方に起り、選手自失して動作を知らず、走者として出でし者の如きは、ベースに座して拱手流涕、また動かざるなり。云々」説明するまでもなく外人方は、久保田の死球を故意と認めてアウトとし、さつさと引きあげてしまったのだった。結局、一高はせつかく今一ト押しのところまで追いつめながら一点の差で敵に名を成さしめたワケで、泣いても泣き切れぬ敗戦だった。けれども、これはいい刺激になった。「已に帰る、翌日直ちにグラウンドに立つ。悲憤まなじりを決して南天を睨み、慷慨胸を扼して長棒を振ふ、敵愾の気満校にほとばしりて戦後の経営頗る其盛を極む」と部史はいう。そのころまた「上野の森に鳥の鳴かぬ日はあつても、一高のグラウンドに選手の見えぬ日はない」ともいわれた。苦しい練習の間には早稲田専門学校(後の早大)生のチヤフル倶楽部、駒場農科

大學、都文館、麻布中學、正則中學、帝國學、學習院などとして、マツチを行ひ、三十五年五月十日、所も同じ横浜の外人グランドで対アマチュアとの第八回戦を挙げた。

この日守山の球威は前代未聞といわれ、黄金時代を誇るアマチュアの強打者連をしきりに弄殺し遂に四十一零、空前のシャット・アウト・ゲームを演じたのであった。

「急如として起る喊声は、空に轟き海に響く、げに我は勝ちたるなり、昨の辱を雪ぎしなり、而も未聞のスコングゲームを以て本家本元たる米人を敗りしなり(略)校友狂喜為す処を知らず、啼泣嗚咽或は選手を抱いて顛倒する者あるに至り、選手亦感極つて涙潑たり、云々」

まことに彼等の得意は察するにあまりがある。げれども、この試合を境として守山等が大學に進むとそれからは、たとえばつるべ落しの秋の日のように、一高にとつては悲痛極りない孤城落日の譜がかなでられるのである。言ってみれば守山は、まさに消えようとするともしびの、その最後の明りだった。

四球敬遠戦法の元祖は?

一点か二点を争うような接戦の場合、たとえ走者二、三塁などのとき強打者が現われると、バッテリは故意に四球を興えて一塁に送り、あとのランナーに全力をそそぐ、といったような場面は、近ごろでは少しも珍らしいことではない。これは俗

にマツシュニソン・メソッドと呼ばれる戦術で、発明者はニューヨーク・シャイアンツの投手で球聖とまで言われたクリスチー・マツシュニソンその人であることは今では誰一人として知らぬものはない。

ところが、そのマツシュニソンよりも早い時代か、或いは同時代の一高が、ちゃん、とその戦術を応用している——といったらざぞびくくりする人が多いだろうと思う。

明治三十七年三月、東京本郷の美津津商店から「魔球術」という小冊子が発行された。米人エドワード氏の原著を、当時一高の外野手だった長塚順次郎氏が訳述したものである。この本の原名は「ザ・アート・オブ・カーブ・ピッチング」といい、この場合は抄訳だが、その代りに、訳者長塚氏が十七ヶ所にわたり自分自身の意見を挿入し読者の参考にするという、親切な方法をとっている。

さて、この本の第二編「投手之注意」中、第二章の「策略」という所で原著者が「投手が大に打者の胆を寒からしめ、かつ苦心せしむるには、殊更に無鉄砲なる球を投ずるにあり(略)ワイルド・ボールは決して緩く投ずべからず、出来得る限り迅速ならん事を要す。云々」(註、これは打者の頭部をねらうピン・ボールのことではない)

訳者長塚氏はこれに同意し「走者塁に在るの際己れに向つては余りに老練なる打手なるときは、この法を行ふ断じて可なり」といつてから、さらに次のような注目すべき意見を述べている。すなわち、「或いは

くにツ、アウトにして次の打者全く己が掌中のものなるときは、四球を出すことも肝要なり。云々」

つまり走者塁にある時手ごわいやつが出て来たら遠慮なく四球を送っておき、その次の比較的弱いバッターをひねってしまえ、というので、これはまさにマツシュニソン戦術とぜんぜん同一のものだということとがわかる。

そこで問題になるのはこの戦法を一高がどうして考え出したか、またアメリカと日本でどっちが早かったかということになるのだが、実はそれを確かめるため当の長塚氏にぜひお目にかかりたいと思ひ、いろいろ手をつくして住所などを調べているうちに、はからずも数年前すでに逝去されたことが判明した。それで先日お会いした宮口竹雄氏にもそのことを質問したところ「ええたしかにわれわれもやっていましたよ」とのことだった。前にしばしば挙げた中馬氏の「野球」や三十六年三月出版された守山恒太郎氏の「野球之友」にそれが載せられていないのは、前に挙げた青井氏の規格外れの打球のように、それが一高野球部門外不出の秘法であったからだと考えられる。

次にこの戦法が発明された年代を考えて見よう。シャイアンツの監督ジョン・マゴロウの手記によると、一九〇二年七月彼がはじめて巨人軍を迎えられた当時のマツシュニソンは身長の高いのと打力にすぐれて

いるので一塁を守っていたが、マゴロウは一旦見て投手として非凡な素質のあることを見抜き、シーズン中途からピッチャーに転向させた。然しその年の成績はあまりかんばしくなかったが、一年と加速度的に上達し一九〇五年年度のワイルド・シリズにはユニ・マツクの率いるアスレチックズと相まみえ、三度連続して敵をシャット・アウトするという世界選手権史上不滅の快記録をうち立てたことは誰知らぬものなき事実であろう。

ところで大マチー(彼の愛称)はいつごろこの四球敬遠戦法を考え出したのだろうか。スタイズ・ブレイや盗塁を防ぐ方法としてウエスト・ボールを工夫したり、フェード・アウトという前代未聞の怪魔球を自由自在にあやつたりしたと伝えられる大天才の彼のことだから、とうてい常識で判断するわけにもゆくまいが、それにしてあまり若いころでなかつたらうという一応の推測は立ててもいいと思う。

そこで一応年代を比較してみると、この本の出た三十七年(一九〇四年)に当り、マチーがそろそろ油の乗って来た時代でも、ちろんそのような戦法が活字になつて日本に渡つたとは思われないし、一高では十九年ごろすでにこの戦法が実戦に使われていたというから、この軍配はどう考えても一高に挙げるべきではなからうか。

ついでながら、この本の訳者長塚順次郎氏は明治文学史上不朽の名作と云われる小説「土」の著者、長塚節の令弟だと伝え聞いたので、書きつけておく。

次はこの戦法が発明された年代を考えて見よう。シャイアンツの監督ジョン・マゴロウの手記によると、一九〇二年七月彼がはじめて巨人軍を迎えられた当時のマツシュニソンは身長の高いのと打力にすぐれているので一塁を守っていたが、マゴロウは一旦見て投手として非凡な素質のあることを見抜き、シーズン中途からピッチャーに転向させた。然しその年の成績はあまりかんばしくなかったが、一年と加速度的に上達し一九〇五年年度のワイルド・シリズにはユニ・マツクの率いるアスレチックズと相まみえ、三度連続して敵をシャット・アウトするという世界選手権史上不滅の快記録をうち立てたことは誰知らぬものなき事実であろう。

投手の受難時代

ベース・ボールが発明されてから二十年
ぐらゐの間、投手は小走りに走ってから投
球するならわしになっていった。二切強く投
げることを禁じられた上に、カ
ップやシニートなどの工夫され
なかつた時代としては、それで
もしなければ、バッターに対抗出
来なかつたためであらう。けれ
ども無制限に走られては困るの
で十二フィートを限度と定めら
れていた。

ところが、この規則の盲点をついて、左右の横から十二フィート走りながら投球することを考へ出したものがあつた。つまり現在でいうクロス・ファイアである。だが、これでは打者がメムくらうばかりか、かなりの危険さえ予想されたので一八六三年(文久三年)度から縦十二フィート横四フィートの鉄板を白く塗つたものをボックスとし、投手は小走りすることなく、その中で投球しなければならぬことになつた。投手にとっては大へん不利な規定である。

しかし、物事はよくしたもので、窮屈なボックスに押しこめられるとこんどは従来の下から押し上げるような投法からだんだん、サイド・スロー、オーバー・スローと

速力のあるボールを投げることを考へたばかりか、一八六七年(慶応三年)にはアーサー・カミングスという人が海岸で貝殻を投げたことにヒントを得てカッパーを発明するといふような大変革が起つた。ピッチャーのボックスが六フィート平方に改められ

野球文献史話

早慶大学台頭す

10

齋藤三郎

イートだつたのを五十フィートとし、それでもないけなと見たものか一八九三年(明治二十六年)からはボックスを廃したばかりか投球距離をさらに延ばして現在行われている通りの六十フィート半とし、ボックスの代りに横十二インチ、縦五インチのプレートを置いたが、これではあまりに小さすぎるといふので一八九五年からは二十四インチに六インチという寸法に改め、それがずっと現在に及んでゐる。これがプレートを中心としたルールの移り変りの、大體の歴史である。

変則的投球

さて、日本ではいつごろからこのプレートを使つたかといふと、明治三十年六月三日の「高対横兵アマチュア倶楽部のゲーム」が最初で、日本人同士としてはその翌年四月三十日にやはり「高と先輩の帝大生との連合試合で試験的にプレートを置いたといふ記録が残つてゐる。

ところで、ここに一つの疑問が起つた。

といふのは規則第二十九條の「投手の位置」についての中に「投手は打者に面した両足を直角に地上に置き、投手のプレートの前に位置を占むべし」といふ條文の解釈だつた。言葉を変えていへば「プレートの前とは、二塁寄りの方か、それとも本塁寄りの方か」の点だが、一高では初めその「前」を本塁寄りと素直に解釈し、すなわち軸足を右(右投手の場合)とときめていたが三十四年五月の対アマチュア試合のとき外人方は頭強に「左足」説を主張したので、一高方でも別に確信があるわけでもないところから、以後はそれに従ふこととし、それが定説となつて三十八年頃まで一般に行われていた。つまり軸足を左とする結果、一歩だけ遠い地点から投げたことになるのである。

ところが、この左足説に終始反対したのが前に挙げた高橋雄次郎氏で、氏はわざわざアマチュアの主将ブレイキに手紙で問い合せたが満足な解答を得る事が出来なかつた。その著「野球叢談」中に述べているがその前に出した「新式ベースボール術」には現在行われている通りの正しい投げ方をハッキリと書いてゐる。

がらも「横浜は本邦の本場なるが故に此れに従ひて練習する方然るべし余は無理とは信じつつ此れに従ひて練習したり」とひそかに不満の意をもらしている。

守山氏は床に就く前必ず三百球以上の投球練習を行つたを日課にしていたが、次第に球威を増してくるに従ひ、しまいにボールの飛来する時に起る風で、ホーンクの火を消したというから猛球の程もしのばれるが、そのころのルールの解釈がアマツヤだったために、記録的には大へん不利な立場に置かれたことを認めなければならぬ。

この変則的投球はずっと後までつづけられ、三十八年早大が日本人チームとして最初の米國遠征を行った際に始めてその誤りであることが判つたので、主将橋戸は帰國後間もなく「万朝報」紙上に「投手は投手板上から投げるべきで、従つて軸足は当然右足でなければならぬ」という意味のことを発表したところ、一高の旧選手平野正朝氏が堂々反対の意見を寄せ、ここにはじなくも橋戸対平野の間に論争を惹き起したことがあり、またその頃よりやく天下注目

投手板上から下つて投球していた時代の写真の模写



早慶台頭の原因

「拜啓 秋氣相催し候所益大に御練習の御事と推察いたし候。借貴校と当校とは是非ともマッチを致す可き者と密に門外漢の風評のみならず当方の彌次連も非常に希望し居り候様子に御座候へ共、兎角申込云々の角立ちたること有之候為幹事の内にも之を決しかね居る向も有之候様にて、されば此際御校にて御申込相成候はば直ちに成立可致候、此頃は丁度よき時候に候へば此期をはずしては正に双方に此後益々都合悪しく相成申すべくと存せられ候、小生などは貴兄の対手となることの変な者と存じ居り候へ共、然し仕合は是非いたし度心掛居候、御校の御様子は如何にや、双方機熟して戦ふと云ふ風至極おもしろしと存候、御校さへよろしく候へば当方は小生より申出、幹事達へも勸告致し見る覚悟に候間御一報煩はし度候、先は右迄如何に御座候、敬具」

この手紙は明治三十六年の秋、慶應義塾野球部の高浜徳一選手から早稲田大学野球部の泉谷祐勝選手に宛てたものである。近頃でこそ早慶戦といえは世界の三大試合の一だなどといわれて大変な人気を集めているが、その頃は早慶共にまだ一高の牙城を陥しいる実力はなく、殊に早大は野球部創設後三年目で、言わばあるか無きかの存在に過ぎなかつた。

ところが、中学時代すでに一高を敗った経験のある青山学院の橋戸信、都文館中学の押川清や神戸一中の泉谷祐勝など知名の選手が揃つて入学し、三十六年夏浜松中学の校庭で一ヶ月の合宿練習をしてからひどく自信をつけた。そこで何とかして腕ためしをしようと思つたが、一高は全然相手にしてくれそうもないので、折も折泉谷氏と同郷の高浜氏が慶應に在るのを幸い、試合をしてもらえるかどうか、さぐりを入れて見た。

はじめは「早稲田に野球部があるのかね」などと難色を示していた慶應方も長い間一高に押えつけられていた不満もあり、実は相手欲しやと思つていた際だったのと、ちよろどその一ヶ月程に早大がアマチュアを九対七で破つたことも分つたので話はずん／＼拍手に進み、さては前記のような「とにかく挑戦状を送つてくれ」という手紙が届けられたのだった。

何しろその頃の一高はアマチュア倶楽部以外にはほとんど対等の取扱いをせず、打撃順もつくらなければライオンも引かず練習試合と称して二軍の選手を出したりしていたというから、そのごうまんなやり方が早慶の擡頭を促進するよきな結果となつたのは皮肉である。

話がきまると慶應では隣接の蜂須賀侯邸の一部をゆずり受け、にわか造りの球場で早稲田を迎える事にした。綱町球場がそれである。さてその第一回戦は十一月二十日に行われたが、ここでは「早稲田学報」に掲載された当時のマネージャー小鶴氏の試合記事からその一節を紹介しよう。

「明治三十六年十一月二十日、昏睡せる東都野球界を覚醒すべく、本校対慶應義塾野

球試合は芝三田綱町グラウンドに於て舉行せられぬ。

早稲田大学對慶応義塾実業に絶好の取組ならずや、慶応は蓋し斯界の宿老東海遠征の猛者として馳名風高く、早稲田は皆新進鋭、先月南浜に外人を破りて旭日登天の勢あるものなり、例へば不識庵が機山と戦ふが如く、梅ヶ谷の常陸山と角するが如し、何物の壯観か此れに加へん。

此日天氣頗る快晴、澄空雲影を止めず、待ちに待たる清都の学生如何ぞ此の試合を見のがすべき、馳せ集ふ者約三千、さしもに広きグラウンドも立錐の余地だになしと見えにける。

前に言つたように、このゲームは當時にあつては二流どころに過ぎなかつたろうし

「待ちに待たる清都の学生」はチと大げさだが、慶応二回に二点を先取すれば、その裏早大五点を得、三回各一点、四回慶大

二点を入れて差一点と迫り、五、六回共に得点なく、七回慶早各々二点を獲得し、未曾有の大接戦となつた。が、「第八戦、宮原」

CFの間に大飛球を打ち、吉川博猛なるゴロに3Bを破つて生く、続く武者原博猛、柳、高浜、時任頻に2Bの背後を襲ひ、本塁に入るもの陸續相接す、辛く櫻井宮本を三度振に送りぬ、彼等が此の時の打撃は実に

雄猛なりき、縦横奮闘、守者観者眼を眩するに違なかりし。といふ慶応方の総攻撃が功を奏して一挙四点。之に対して早大は

に記念すべき第一戦は學大の勝利に終つたのだつた。

「此役両軍のバッティング共に頗る輝猛、守備亦完全、人をして驚嘆措く能はざらしめたり。且攻守の勢真に伯仲の間にありければ、観者に多大の興味を興へ、皆手に汗を握らしめぬ。実に近來の壯観にして、天下のモデルマッチと稱すべきものなり。而して從來斯界の弊習たる彌次の喧騒は両者互に礼儀を守れるにより少しも其声を聞かざりしは、誠に斯界の美事にして、吾人は切に此美習をして天下に汎ねからしめん事を冀ふものなり。宜なる哉、清都の新聞紙は争ふて其状況を報じ、此壯観と此美事とを嘆稱せざるはなかりき。」

四、一高の調落

この記事の筆者がいうように早慶第一回戦はゲームの興味といひ、観衆の態度といひ、當時にあつては申し分のないものであつたらしく、結果においては試験的にやつた早慶戦が一年と白熱的となり、一高對アマチュア戦に代つて一躍天下の人氣をあつめるようになったのは、長い間一高が独り場を擅いままにしていた反感やら、前にもいつたように一高自身の凋落やらから、時代が新しいチャンピオンの出現を待望していた。ちよつとその裏に於てひよこり躍り出したのが早慶二大だつた。しかもこの二大が三十七年には相ついで一回復し差二点を迫つたが泉谷三壘にゴロを

であらう。

「試合後慶応のクラブで餅菓子を食べひ乍ら茶話会をやつたが和氣飄々その気分よかつた事は今に忘れられない。(略)この茶話会の席上毎年春秋二期に試合しようといふ話がきまつて、来た時と同様バットやミットを担いでまた早稲田までテグつて帰つたが、云々」当時三壘手として活躍した押川清氏はこのようにその頃を語っているが、當時は早稲田から若松町、四谷塩町を

「早慶両チームが一高を襲ふて凱歌を揚

げたのは、彼が大学に進出後であつて、一高にとりては一寸弛緩を見せた頃であつた。若し守山投手がプレートに立つてゐたならば、早慶の覇業は、さう簡単には成功しなかつたであらう。」とは、当時早大のキャプテンだつた橋戸碩鉄氏の述懐だが、氏はかつて青山学院の投手として一高を破つた直後、その日アムパイヤをつとめていた青井鉄男氏が「一つ打たしてくれ」というので、橋戸氏もいささか意地になり目の色を変えてピニューク投げるのを、「中堅から左翼へかけて火の出るやうなライナートをボソボソ打たれるには、全く以て胆を奪はれた」と言つてゐるのをみて、全盛時代の一高の實力は推して知るべく、早慶の實力もさることながら、やがて非常な好運に恵まねて

野球文献史話

11

生きている 野球場の巻

斎藤三郎

「野球年報」の功績

明治三十五年九月、本郷赤門前の運動具商美満津から、「野球年報」第一号が発行された。

これはスバルディングの「ガイド・ブック」をお手本にして、青井鏡男氏を中心とする一高関係の人達によって編まれたもので、三十五年から大正四年の終刊第十四号まで（三十九年を除く）の長きにわたり続けられた。当時ほとんど日本全国の学校関係を独占していたか見え、美満津としても、相当の負担だったろうと想像されるが、いずれにしてもその業績は高く評価されている仕事であった。

この年報は大正五年朝日新聞社から「野球年鑑」が出るというので欣然これ

に編著をゆずったのだと伝えられるが、かりにこの十数年間年報で出ていなかったとしたら、どうだろうか。心ある人々には十分わかってもらえると思う。というのは、もしこの企てがなかったとしたら、東京や京都など著名な学校の戦績は新聞や校友会雑誌などを調べれば分かるが、全国にわたる中等学校の試合成績や、部員の写真など恐らく大部分が煙滅してしまったに違いない。いつて見ればかんじんな底辺の姿は失われて、ピラミッドの頂上あたりだけが残っているという、とりかえしのつかぬ結果に終わったであらう。

「年報」第一号は久保田敏一、高頭正太郎の両氏が編集に当り、全編を十項目に分けている。第一の「天外戦雲」は対外人との試合、第二の「千葉万紅」は各地の連合大会記録、以下「日本野球略史」

は読んで字の如く、錦織綾羅は主として東京都下で行われた対校試合、「東都余塵」は対一高の練習試合戦績。ここで断っておくが、そのころ東京の（地方もふくめて）各学校では、一高と対等の試合をしてもらえなかった。そこで「どうか一と手ご教授にあずかりたい」と頼む、すると一高ではライオンも引かず、ライオンアップも定めず、（つまり投手から順に打つ）しかも第二線級の選手を数名入れてこれに応ずるといった風だったこれがつまり練習試合なのである。次の「金科玉條は野球研究または、講義といった風のもの、「東海逐鹿」と「関西争玉」はその名の示すように東海地方や関西方面の中等学校、或いは高等学校の試合経過、そして最後に「試合規則」「附録」を加えての全十篇だが、このルールは一九〇二年度（明治三十五年）にアメリカで発表されたものを青井氏が訳し、さらに註釈をつけたもの、また附録として前にも挙げたことのある俳人河東碧梧桐氏の写生文「ベースボール」を採録するなど、現在から見ても実に感心させられる名編集ぶりである。

ところで、その試合記事をしるのぶ参考、一高対仏教高等中学練習試合の一節をお目につけよう。「潮の如き寄手の中より割って出たる

大入道の大内黒坊、首途の戦いかくこそなさまと衝かかりしを、一の木戸にて打止め、続く佐々木、樋口の二僧は一矢も放たず倒れけり。一高逆寄せに押出づれば僧兵堪へず散々になりて敗れ去り。一高手始めに四点を占めにける。」

説明するまでもなく、仏教中学の選手連を比叡山あたりの僧兵にたとえたので一の木戸は「一塁」のこと、なおこの後には「髯殿めしき大坊主馬を陣頭に進ませ」とか「同衆の怨思ひ知れと射出す丸は風を切つて左陣を襲へば城方の猛者大塚もたじたじと逡巡するを、此處そと一の木戸に跳入り何處までもと焦れども率ゆる勢続かねば力なく、二の木戸にて立腹をぞ切りける」などの名文句も見える恐らく左翼ライオン近くあたりに安打し、長駆二塁を突いて憤死とでもいう場面だったろう。ついでながら、これは三十四年十月三日のゲームで、22対3。もちろん一高が大勝している。

一高がいわゆる覇権保持のためにどのように苦心したかはしばしば伝えられるところだが、「年報」第二号（三十六年十一月発行）には平野正朝氏（一高二塁手）が次のように述べている。

「練習の陣猛は極まれりというてよい。三十四年の春の如きはまず二人の負傷者を生じ二十日以上も球を擱むこと出来ず引続き試合まで、三人の負傷を作り遂に半数以上の負傷者を以て——或る者は面の繻帯を前日はじめて取り、

或る者は癒えざる指頭に袋し、或る者は繻帯の儘対戦した事があった。(略) 上野の森に鳥の啼かぬ日はあるとも選手が場に上らぬ日ではない。夕ぐれの薄闇になお白衣の人の駆馳せるは、選手がゴロは見えずとフライを空にすかし取っているのではないか、すべり込みを練習しているのではないか、バットの振り方を研究しているのではないか。(略) 今も昔も変わらぬ選手の哀れさはさることながら(略) 意気の発するところ涙数行、実に涙を以て練習するのである。云々」

「年報」はこのように貴重な記録を収録したばかりでなく、文集中のいたる所に掲げられた全国各地の学校や倶楽部の選手の写真は得がたい資料となっている。たとえば水戸中学時代の飛田忠順氏や、安積中学時代の久米正雄氏など、今となっては珍中の珍にかぞえらるべきだろう

愛知一中と「野球使用」

三十八年一月、名古屋の愛知一中から「野球使用」と名づけられた小冊子が出ている。終戦後は「旭ヶ丘高」という名前になってしまったが、明治三十年代から大正末期にかけての愛知一中は全国を通じて五本の指にかぞえられる球界の名門として知られたものである。一中がどうしてそのように強かったかというところ、一高黄金時代の一塁手宮口竹雄氏が帝大卒業後、心魂を傾けてコーチしたのが基

礎を成したのだと伝えられるが、そう言われて見るとこの本のいたるところに「高直伝らしい秘法を見出すことが出来る」といえば「如何ニシテ敵投手ノ球ノ早サヲ測定スルカ」とか「敵ノ投手ノ球ノ廻転及ビ強弱ヲ如何ニシテ知ルカ」或いは、「何ノタメニ投手は打者ノ肩辺ノ球ヲ投ズベキカ」または、「第一塁ニ滑リ込ミノ可否ヲ問フ」「試合中比較的飛球ノ多キ理由ヲ問フ」「正確ナル球ヲ投ズ



明治38年、米国遠征した早大チーム、[上左]から右翼手獅子内、二塁手押川、投手河野、安部野球部長、一塁手泉谷、補欠細川、三塁手陶山、左翼手鈴木、[下]補欠立原、補欠森、捕手山脇、米国少年ジョン・マクスウエル、遊撃手橋戸、中堅手小原の各選手。

ル際ノ四素トハ何カ」「ナゼ試合前(開始少前)試合用球ヨリ少シ重キ球ヲ用フ可キカ」などの各項目は、現在の大学野球の選手達にもかなり参考になる点が多いのではないかとと思う。

またこの本の編集方法は非常に特異なもので、全篇を二百三十四項目に分ち、すべてを一問一答の形式にしてあること、恐らく雨天などで練習の出来ない時などは、野球の課題試合に用いたのではないかと想像される。

紹介したいことはいくつもあるが、目についたことの二、三を挙げると、相手の球が速い時は「打棒を肩よりサゲ」ろなどは近ごろやかましく論議されている近代打法に通ずるものだし「受け難キ球ヲ投ゲ、投手ニ余分ノ困難ヲ與フルガ如キハ、無

一ノ目的タル投球ノ正鵠ヲ過タシメ、タメニ全軍失敗ノ一原因トナルコト往々耳ニスル所ナリ」なども、近ごろの選手達(学生プロを通じ)にまず聞いてもらいたい一項目だと思ふ。また近ごろの一塁手であまり注意をはらっていないベースへのタッチでも「ソノツケ方、ハ足ヲ裏ガニシテ、ソノ親指ノ爪ノ部分ヲ以テ、球ノ来ル方向ニ、最モ近キ塁ノ端ニツケイルヲ最モ利益ナリトス」などは実にこ

まかい所まで研究がとどいていたものだと感心させられる。「判りきつたことじゃないか」と云う人は試みに手近のブロなり、学生野球なりの一塁手の足に注意して欲しいものである。

次に攻撃方面を見ると「日々練習シタル球ヨリモ早キ球ヲ重キ打棒ニテ打ツハ困難ニシテ失敗ヲ招クコト多シ。(略) マタカーブノ如キハ軽キ打棒ヲ用イザルベカラズ。コレカーブハ自由ニ方向ヲ変更スルモノナレバ、打棒ニオイトモ軽キ打棒ヲ用イテ、自由ニ運動ヲナスノ備ナカルベカラザルナリ」なども、分に過ぎた重いバットを使いたがる若い選手達のよい教訓で、フリー・バッティングや弱い投手にはバカ当りするクセに、少し鋭い投手には手も足も出ないようなバッターは大ていこの種の打者と見て間違いないと思ふ。

また「一塁へへ、一秒時間ヲモ等フモノナリ。然ルニ滑リ込メバ走ルヨリ多クノ時間ヲ費スヲ以テ損ナリ。一塁へハ決シテ滑リ込ミセザルモノト心得ベシ」も注目すべき一項だろう。このことは前にも一度触れたように思ふが、いまだにこの一塁での有害無益なすべり込みがあるとを断たないのは、明治三十年代の選手達に「僕達の時代にはあんなことをすると笑われたもんですよ」などと言われても返す言葉があるまい。しかもその結果として自分自身が捻挫するか、相手方にケガをさせるかがオチであることを知ったら世の指導者たるものはよくよく考えて

もらいたいものである。

ところで打者がボックスに入る前、バットを二、三本一緒に振ることを考え出したのは不世出の大打者タイ・カッパだと伝えられるが、この「使用」にも「試合前ニオイテ、打棒ヲ数本一緒ニ振ルハ、己レ打手トナリテ打ッ際打棒ヲ容易ニ振ランガタメナリ。数本一緒ニカタメテ振リシノチタダ一本振ラバ、如何ニソノ軽ク感ゼラルゾ。云々」も、前に触れた青井氏あたりの考案が伝えられたものか

この本は前に述べたように「野球虎の巻」とも云うべく、言葉を変えたとすでに立州な科学的領域に足を踏み入れていたことが分る。愛知一中が三十年近くの間、東海の重鎮としてニラミを利かしていたことも、決して不思議ではなかったのだ。

早大の米国遠征と

「最近野球術」

「早稲田大学打球選手十二名が体育部長安部磯雄氏監督の下にその優秀なる技倆を海外に試みんと渡米の途に上ることは既報の如し。試合の相手は最初はスタンフォード大学のみなりしが、その後カリフォルニア大学、ボマナ大学等より進んでは遠くデンバー、アイオワ大学等と技を試み、シカゴまで攻め寄せんず決心の由なれば、たゞさて戦勝国民に対する注意好奇心の盛んなる今日、定めし華々しき勝負に彼等米人の眼を驚かしむる事なるべし、しか

して、一同は予定の如く昨日午前九時三十分新橋発にて横浜に向い、午後出帆のコレア号にて出発せしが、鳩山校長以下生徒等百数十名いずれも新橋まで見送りたり。」

三十八年四月五日附の東京朝日にはこのような記事が掲載された。言うまでもなく日本人野球団による史上空前の米国遠征である。

一行は安部監督、橋戸主将以下総員十二名で四月二十日サンフランシスコ着、二十九日の対スタンフォード大学戦を皮切りに、六月十二日の対ホイットウォース大学試合までの間、アメリカ西部海岸地方一千五百マイル余を転戦、26戦7勝19敗の成績をおさめて、二月二十九日横浜に帰着した。戦績から見れば決して立派とは云えないかも知れぬが、初めての海外遠征ではあり、投手河野安通志が全試合を一人で投げ通したことを考えると、むしろ大出来と言わなければならぬまい。

安部氏が正式に早大の野球部長に就任したのは三十五年八月のことだったが、そのころからすでに海外遠征のことを考えていたらしく、「国内で全勝したらアメリカへ連れて行く」と約束した。けれども、当時、米国遠征などのことは云わば夢想に近く誰もその実現など信じていなかったというが、三十七年には思いがけなく、学習院、一高、慶応、横浜アマチュア倶楽部を連破、さらに学習院、慶

を成し遂げることが出来た。もともと学習院との二回戦などは院軍三島彌彦投手に苦しめられ、当時としては空前の延長記録十二回表にやっと決勝の一点を得たほどの熱戦だったが、ともかく全勝には違いない。そこで当然起って来たのがアメリカ遠征のことである。

ところがこゝに一つの大きな支障があった。というのは、その年(三十七年)二月十日、日本政府はロシアに向って宣戦の詔勅を發布、九日開戦当初よりイキつく間もない死闘をくり返していた最中だった。そして明けて三十八年にはロシア政府はそれまでの頽勢を一挙に挽回しよると、バルチック艦隊を組織、すでに一刻刻東洋の水域に近づきつつあるという、日本にとっても国家の興亡を賭けた容易ならぬ前夜だった。

そんな大変な時期に野球の遠征などを考える連中も連中なら、それをまたスラスラと許した当時の政府当局も、のん気と云えば云えるが、やはりエラかったと思ふ。

遠征から帰った主将橋戸信は夏期休暇を利用して遠征中に得た経験や見聞を土台にして一書を著し、その年十一月十二日「最近野球術」と名づけて世に送った。この本には非常に目新しいことが紹介されている。たとえばバントに対する投手、一塁手、二塁手等の動き方、ボデー・スウィングのやり方、フランネルやスエターで肩を保護する。必要走者一、三塁の時のダブル・スチールを防ぐ方法。

光線除け眼鏡の効用。ヒット・エンドランのやり方とその防ぎ方。コーチャーの重要性など、いわゆる近代野球の基礎は、殆んどこの書により説きつくされているといってもよからう。

また、この本の附録安部磯雄氏の「渡米日記」橋戸氏の「米国の野球界」は共に記念すべき好資料だが、ことに橋戸氏の紹介した「練習の方法」は劃期的な文献で、日本の野球界はこれによって従来とは全く異った合理的な方法を教えられたのだった。

次に「野球年報」の外に発行された類書を挙げると一高の「野球部史」守山恒太郎氏著「野球之友」伊東卓夫編「癸卯野球試合紀念」編者不明「明治三十六年度野球試合規則」(以上三十六年版)前掲長塚順次郎氏訳「魔球術」愛知一中校友会編「野球使用」橋戸信氏著「最近野球術」また三十九年に出た運動術士と称する匿名子の「運動界の裏面」は一高、早、慶、学習院、高等商業など各校の野球部と庭球部の成立やその裏面を描いた珍重すべき資料である。

「突如、応援隊の出現」

早大の層朝士産は技術的に見て非常に貴重なもので、いわゆる近代野球のスタートはこの時にきられたといっているのだが、その他にもう二つの目新しい様式ももたらされた。その一は三回勝負という方法で、一方が連勝しない限り決勝戦でそのシーズンの覇者を定めようとい

り現在大学野球などで行われているやり方。もう一つは集団応援の方法であった。さて、早大層朝後の第一回戦は三十八年十月二十八日、所も戸塚の早大グラウンドで行われたが、何ごとぞ五対一のスコアで早大の大敗に終わった。

この、あまりといえは意外な結果に驚いたのは一般の観衆よりも、むしろ負けた早稲田方だった。けんちん目を奪う真紅のオーバースニーカーや舶来のスバ

イグ・シューズに身をかため、サクリフアイズ・バントだのポディー・スウィングなどという新戦術に度胆を抜こうとしてもかんじんの試合に負けたのでは話にならぬ。しかも世間では「早稲田は一体アメリカ

かくだりまで何しに行ったのか、彼等のもたらしたものは最近の野球術ではななくて、どうやらアメリカ流の浮華軽佻であるらしい」などと甚だ面白くないことを取沙汰している。負けた早稲田はその晩選手会を開いて

野球文献史話 ⑫

W

早慶応援隊合戦始末記

K

斎藤三郎

名をされたのだから心中甚だ種やかならぬものがあつたのだ「ようし、彼等のヘナをあかしてやれ」と、ひそかに鋼を磨いていた慶応と、新層朝者の誇りを、胸一ぱいにふくらませて意気揚々敵を迎えたのとは意気くまがるで違ひ、そこに早稲田の敗因があつたのだ。

これに気づいた早大は次の試合までの十日間、殆んど寝食を忘れて慶応方の策戦を研究する一方、晴れた日はグラウンドで、雨の日は合宿で、或いはバツティングに、或いはランニングに、フィールドに全力を傾け、一般学生もまた連日大声叱咤して選手を奮励に当るといふ真剣さだつた。

十一月九日、慶応の三田綱町グラウンドで行われた二回戦は果然火を吐くような熱戦のすえ一対零、早大の雪辱なりこゝに一勝一敗の成績となり、いよいよ最後の決戦に持ちこまれることになった。

当日の模様を「運動界の裏面」と題する小冊子から引用して見よう。著者の「運動術士」はもちろん何人かの匿名である。「十一月十二日予定の第三回競技の日

は来た。都下の学生にしていやくも野球の趣味を解する者は一にこの勝負に向つて急いだ。学校の運動部は団体として向ふ。双方の選手と喜憂を同じくする者に至つてはすでに面色をさへ変へて小走りにしてゐた。正午、定刻に先だつ一時間ごろになると早稲田のグラウンドを取巻く長堤は人垣に人垣を重ねられ、観者無慮一万五千人余、秋

空一碧このごろに類なき小春の日影は華やかにグラウンドと観者の上を照してさながら空も心あつて今日の競技をまもるようである。観者のくゆらず煙草の煙は長く靡いて紫の霞の走つてゐるがやう、何となくどよめきも頭と肩と大海に見る波のうねりを想はしめた戸山の原、目白合へかけて物としもなきとよみはみなぎつてゐた。」

予想に違はず、この日も前試合に劣らぬ接戦となり延長十一回三対二早大の勝利となつたが、この日は図らずも衆目を見はらせたのは応援隊の登場であつた。

「此処に二、三の特異なることを告げやう。第一は応援隊である。これはカレッジ・エールと呼び、彼方では如何なる運動団体にもある、その用は或る必要なる場合において自校の選手を励まし力を添へるために用いるので、野球に練達したる指揮者が支配し、適當なる利那において観者の席より起ち上つて音頭を取り、他をして一せいに習はしむるので、選手と等しく日々の練習を積んでゐるのである。当日のカレッジ・エールはその一兩日前アメリカより早稲田にむかつて寄贈し来りたるもの、二百本あつた、手にしたものは寄宿舎の生徒である。それら一隊の、つと姿を現し「フレエー！フレエー！早稲田！」と一種の調子ある言葉に随つて一斉に振る、と見るとつと隠れたる有様は観者の耳目を新たにするに足つた。」

近ごろでこそ、この程度の応援方法など小学校の生徒でも知っているが、当時にあつては全く目新らしかつたらしく、慶応方がすっかり度胆を抜かれたというのもっとも話である。

河野のディレイド。

スチール

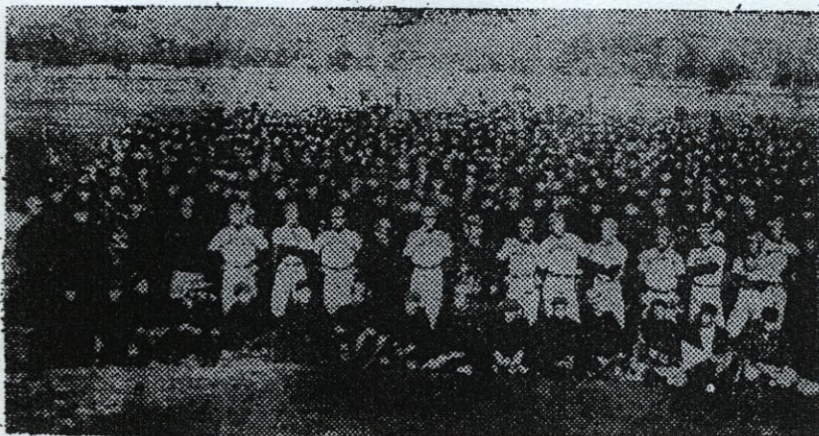
一勝一敗の後の決勝戦に勝った早大方は、少し誇張した言葉ではあるが、感奮と昂奮のつばに投げ込まれたような熱狂ぶりであった。何しろ選手は片っぱしから胴挙げにされるやら「よく勝つてくれた」と泣きながら抱きついて来る。グラウンドの混乱が静まるとこんどは祝電相ついでいたるといふ風に、とにかく大変な騒ぎだったらしい。

ところで、そのころは試合終了後、両軍の選手が一堂に会合して茶話会を開くならわしになっていたが、いつまで経っても慶応方の姿が見えぬので委員の一人が催促に行った。すると「いま服装を改めていますから」と障子をしめ切つて開かせない。二度目の使がそつと障子の穴から覗くと慶応方の選手はどっかと坐つたまま男泣きに泣いているのだつた。現在でも同校の人達にいわせると「リーグ戦で優勝しても、早慶戦で負けたら優勝したような気がしない」といふから、このゲームだけは全然別物なのであろう。

当時の記録によると、早大の寄宿生は前々日の夜一選手にご馳走してやろしじやないか」と相談がまつまり、またたく

間に十数円の金が集つたので、それで山海の珍味をととのえ、当日正午、競技のまさに始まらんとする時、立派なる屋敷はグラウンドにおいて饗応された」とあるから、話半分としても涙ぐましい美談として伝えるに足りよう。

こんなぐあいだから試合終了後の祝勝会も大変なもので、選手の一人一人が名前を紹介されて席につくと、歓迎者の代表者が起つて一場の挨拶を行った。「如何なる学校も、野球の振るつた時はその学



明治39年秋、早慶戦中止後応援団との記念撮影（早大球場にて）

校の校風が振起した時である。早稲田の野球が「やく天下に覇を唱えたことは取りも直さずわが校の校風が大いに華らんとする前兆である。たま／＼このような時代に籍を置くことの出来たわれ／＼はまことに幸福の至りであつて、選手諸君の労苦と功績に対しては満腔の感謝を捧げなければならぬ。云々」と、「言々誠と熱とを含んだるその言葉を聞かされては選手はうなだれ伏してしまい、不覚にも涙を流してしまつた。」

という、エピソードもある。

時も時、早慶の争覇に一層の拍車をかけるニュースがアメリカからもたらされた。それは在米の日本人有志が百五十ドルを投じて一大銀盃をつくりこれを母国日本の野球界に贈つてシーズン毎の優勝者に捧げようという破天荒な企てであつた。

年が明けて三十九年になると慶応は適材適所主義の方針で野球部の大改造を断行し、その春は三高、一高にそれ／＼勝ち軍艦オハイオに敗れたが、この三戦を最後にピタリと矛を收め、あとはたゞ秋期の対早大戦に備えて全力をつくすという策をとつた。

これに反して早稲田は対三高戦を皮切りに米陸ワイスコンション号、一高、横浜アマチュア倶楽部、学習院などと十回以上のゲームを行つたという放胆さであつたが、そ

のうち五回も負けたので、覇者にあるまじき醜態——とばかり、一部から非難されるようなことがあつた。

ところで、こゝに面白いのは両軍の策戦で早稲田はやや野放図のところがあるのに反し、慶応では「投捕手の練習は幕の中に行ひ、かりにも人に見せぬといつた裏方、塾生たりといえども幕中を伺ふを許さずと云ふ権幕。」と物の本にもあるように、そのころからすでに好対照を見せていることだ。

さて、満天下注視のもとに行われた第一回戦の様を「早稲田学報」から引いて見る。

「時しも秋の半ばとて蒼天高く澄みて小春日和の暖さに、九時頃より早稲田「グラウンド」は集ひ来れる観客もて十重二十重に入垣作られ、総勢奥に四万と註せられたり。場内は来賓席を本墨の後右方に設け、西側の中央には早稲田の応援隊陣を取り、早稲田中学はそれに隣りて陣を占め、同じく都文館中学は南側に相対し、その隣りには慶応の応援隊本陣を控へ、早軍方応援団は赤の小旗を、慶応方は紫の小旗を翻へし、また大小幾流の旌旗の秋風に翻舞たる、実にオリンピアの昔もかくやと思はれたり。」

総勢四万は筆者の筆のフヤで（三田評論には無慮五万とある）恐らく七、八千がせい／＼だつたらうといわれている。試合は両軍よく攻めよく守り非常の接戦となつたが、慶応方四回二死後、西川

の安打出塁を足がかりに四球、安打、安打とつづいて一挙二点を得、これに反し早大は三回二死後、二塁走者河野が突如ダイレイド・スチールを敢行して、青木投手の悪投に一学生選したのみ、結局、二対一慶大の先勝となった。

この試合に行われた河野のダイレイド・スチールは日本最初の企てであると多くの史家は伝え、当の河野氏もそう信じていたらしいが、この種の走塁は二十年代の一高がしばしば突戦に応用していた事は前にも言った通りだ。

ついに試合中止

勝った慶応方は歓喜のあまりグラウンドを引きあげる途中、早大正門前で万歳々々を高唱した。正門前には総長大隈重信邸がある。もちろんこれは別に当てつけのつもりではなく、恐らく青年客気の致すところであつたろうが、やられた方は甚だ面白くない。面白くないどころかひどく癪に障ったのも無理からぬことであらう。

この気持が野球部を奮い起たせたのに不思議はない。しかも二回戦に負けただけに切腹もので、洋行帰りの面目丸つぶれになるはいり迄もなく、場合によっては野球部自身としても何とが責任を執らざるを得ない羽目になりそうな形勢だつた。

二回戦は十一月三日の天長節、慶応方の三田綱町球場で行われた。当日の模様

は「早稲田学報」に詳しい。

「……三田合に押寄せる群衆引も切らず、試合の開始は午後一時なるに、私闘までグラウンドの隅二百の一団寒空を物ともせずして今日の勝敗を物語るあり、十時ごろには十重二十重に囲みたる観客の真に身動ならぬ有様、整には屋上樹上人ならざるなく、新聞記者、商人、紳士、令嬢の影も多かりしが、さて例によつて両軍の応援団はいかにと見るに、ホームに近き物見台柔道部の屋上には慶軍の一隊紫旗を翻し、外にグラウンドの西北隅と南側にも別働隊あり、銃器庫の屋上白旗打ぶれる幼稚舎生の愛らしき応援には、早軍の猛将も心を奪はれたる有様なりしが、早軍方の応援本隊は第一塁近き物見台より東北隅一帯にかけて、その数一千名にも余りつべし、これは早大の外、早稲田中学、早稲田実業よりも繰り出すものにて、さらに南側西側にも別働隊あり、西北の一隅慶軍方の応援隊と並びてAを染めぬきたる青旗をかざせるは、老將橋戸の出身青山学院の一隊なりと知られたる。云々」

なり勝ちな日本人の頭へ、さらに油をそそいだ結果になつたのではなからうか。さて、ゲームは第四回慶軍吉川無死にして三塁打を放つたが後援続かずして、ヤノスを逸した直後四回表、一死後三塁ゴロの一塁失に一挙二塁に出た走者を連続三つのバントに一点獲得、五回表慶軍また好機を逸した後、八回早大は二死後の二走者を押川の左中間に飛ばした痛打に貴重な二点を獲得、結局三対零に一勝を握つた。

ところが、その後がいけなかつた。勝誇つた早大の応援隊は、慶義塾の三田通りでデモをやつた。数千の彌次隊が三田通りを二度も三度も行つたり来たりしたといふのは本当かどうか知れぬが「早稲田学報」にも「四時、戦を終るや早軍の応援隊は三田の大通りに列をなして『レー』を呼び、さしも広き大通りも一時は身動きならぬまでの雑沓をなしたるが、云々」とあるところを見れば、相当の大騒ぎをやつたのに違いない。一説にこの日早大の応援隊長吉岡信敬は白馬にまたがり長剣を抜いて指揮に當つたといふ伝説が残っているほどだが、真偽のほどは保証しかねる。

これで両軍一勝一敗となりいよく最後の優勝を賭けた決戦は十一月十一日、二回戦と同じ綱町のグラウンドで行われることになつた。文字通り天下分け目の関ヶ原である。一方が独立自尊を叫べば一方は学問の自由を呼号し、スチール、カブとも慶応の案に対して早稲田の赤、

しかも慶応が城南健児といえは早稲田は城北男子と呼ぶ、という風に何から何まで道具が揃いすぎている。今や全く源氏に非ざれば平氏、早か慶か、天下は完全に二分されたかっこうである。

ところが、せっかく満天下のファンを湧かせた早慶決戦も、試合の前日にいなり慶義塾々々長鎌田栄吉氏は、突如早稲田に安部磯雄氏(野球部長)を訪ね、さまん」と交渉のすえ遂に一応中止することとした。

一説に早大の応援隊が連日球場に現われて選手を激励するのを見た一巡查が、ビククリ仰天して新宿署に「形勢不穏」と報告し、新宿署から通知を受けた芝罘でも捨てておけず早慶両大と、当日審判を所持つ予定の一高の中野武二氏と学習院の三島彌彦氏に対し、一応の注意書を発したのが原因といわれる。

その後早大が繰返し妥協案を示したのに対し、慶応側が終始拒否し続けたのは、慶大の方の一部策士が「若し負けたら校運に關する」といふのが中止申出の真因だなどと取沙汰されたものであるが、いずれにしても、そのころの日本はロシアに勝つた直後でもあつたよめか鼻息が荒く、わけても若い学生などは血の気が多かつたせいもあり、思いがけない方向につづ走つてしまつたのだから。

(前号「愛知一中と野球使用」の項は全部「野球使用」と訂正します。

入場料徴収第一号

早慶戦中止の翌四十年十月す慶応はハワイのセントルイス大学を招聘した。これが外人チーム日本訪問の最初なのである。せつかく天下の呼び物になった早慶がつまらぬことから決裂状態に入り、かつての覇者一高に代って選手の頭数をそろえるのが精一ぱいという有様だったし明治、法政はまだ姿も見せず、横浜外人団またまたく昔日の面影なく、国内ではもはや骨っぽい試合がぜんく見られないと思っていただけに、好球家の期待は大へんなものだった。

ところで、この遠征第一号セントルイスは、表面、大学選手と名乗っていたのだが、それは真ッ赤ないつわり。実はオール・ハワイ選抜軍ともいべき精鋭ぞうだった。中でもロートオン、エバース、フツンネル、フェルナンデス等の攻守にわたる大活躍と、支那人エンスイの飛燕のようなベイス・テンニングは、小さな日本人の度胆を抜くに十分なものであった。

結局、彼等は慶応には四戦して二勝二敗、早稲田には三戦全勝の成績だったが慶応との二敗などは一部の人々に八百長試合などと噂されたほど、実力的には早慶とも足もとへも寄りつけないほどの実力を備えていたといわれている。

ところで慶応は遠征軍の費用を支弁するため一般観衆から入場料を取ること

を発表した。近ごろでこそ学生のスポーツだろ何が何だろが、入場料を払うことぐらいいはしごく当り前のことと考えているようだが、今から半世紀も前としてはずいぶん思い切ったことをやったものだと思心させられる。しかもこれが当日売りばかりでなく、入場券の前売りを堂々と新聞に発表したのだから世間は驚いた。

「切符代は一等六十銭、二等三十銭、三等十銭にして、早く買求めざれば売切れの恐れあるべし、云々」と、頭からおどかしている。ところで、ここになか／＼愉快なもの「軒下棧敷」とか、剣道部屋上の棧敷とかまるで芝居の見物席なみに取扱っていることで、入場券の割当は一等千五百



斎藤三郎

その年十月二十九日付の「時事新報」を見るとこんなことが書いてある。

「此壮快にして前古未曾有なる試合の行わるるは、来る三十一日午後一時なれば入場者はその心組にて、左の敷ヶ所にて売出せる切符を買求むべし」

と、早稲田の同文館、京橋の交詢社、三田の福島、岸田の両書店、横浜貿易新聞社、慶応大学内の消費組合などの名を

人、二等二千五百人、三等六千五百人の合計一万五百人になる勘定だが、あの狭苦しい三田綱町のグラウンドに果して収容しきれたものか——と思われるほど、とにかく現在から見れば貧弱なグラウンドだった。何しろ剣道部や柔道部の屋根にまでズラリと見物人を並べたのだから今から考えるとウソみたいな話だ。さて、セントルイスがいよいよ日本へ

来ると発表されたのは十月二十六日だったが、時事ではどう勘ちがいたものか「瓜哇セントルイス野球団」と書いてファンや関係者を面喰わせた。それもそのはず、一行の乗船サイベリヤ丸の横浜入港の前日あたりになって始めてハワイ軍来朝の確報が入ったらしい。しかも予定より一日早い二十七日早朝到着と変更したのだから出迎えるの連中は前の晩の終列車か、当日品川発の一番列車で駆けつけるという騒ぎ。ところが、てんでこ舞いしてやっと駆けつけた塾の関係者や新聞記者などは、眼前に船を見ながら、正午近くまであくびを噛み／＼待たなければならなかった。検査がひどく手間取ったからである。

もと／＼彼等はずっと早く来る予定だったが、ちよどフット・ボールのシーズンとかあ合ったものだから、最初に契約した連中がだいたいその方へ寝返りを打ってしまった。つまりフット・ボールの方がずっと金になったからである。そんな風だからキャプテンのグリースンは顔を揃えるのに大骨を折り、船がホルルを出帆する十六日になって「ヤア、君も行くのか」「お前もか」といった風に汗をふきふき顔合せをしたというよりな笑い話がある。

従って集った連中も衛生局の書記、商館の番頭、雑詰商のセガジ、料理屋の旦那などがあるかと思えば、ハワイ王族の血統を受けついで鉄商の子息という変り種もあり、おまけにキャプテンのグリース

ン自身が監獄の書記といふのだから笑わせる。しかもそれがどう間違えられたか堂々と「ハワイ・セントルイス・カレッジ野球団」と名乗って来たのだからいかに世間がのんびりしていたかがわかる。

ゴルフ・スウイン

グの提唱

船が日本の沿岸に近づくと一行がワイ／＼騒ぎはじめた。

「あの高いのは何だ」

船員が答えた。

「フジヤマである」

「フジヤマの白いのはなぜだ」

「雪が積っているためだ」

そこで彼等が異口同音に発した質問は

「雪とはどんなものか」

無理もない話だ。常夏の国ハワイで育

った彼等には雪がどんなものか、てんで

見たことも聞いたこともないからだ。

そんな風だから上陸第一夜に監獄局の二階を宿泊所にあてがわれた一行は、毛布を五枚もかさねた上に布団を何枚もかけ、それでも「寒い寒い」と夜ついでスロープを焚かしたがとう／＼一睡も出来なかつたという笑うに笑えぬナンセンスがあつた。

前にも言ったようにセントルイスの来朝は異常な期待をもって迎えられた。しかも時事が、

「グリーンスンの二打よく六十間の遠きに達し、六年間がつて三振せず、二ストライク後十七回ファウルレコードあり」とか「一塁に至る時間三秒五分の一にて世界のレコードを破りたる快走者」エンズイなどとどえらいことを書き立てるものだから、切符の高い安いなどは問題でないとばかり、うす暗いうちから押し寄せるファンの喧騒でグラウンドの近所の家々では何ごとが起つたのかとばかり驚

きあわてるやら、学校は授業にも差しかえると苦情を言った——などの記事も散見するから、話半分としても、とにかくすばらしい人気であつたろうことは想像に難くない。

その証拠の一つに入場券偽造犯?の現われたことを記しておく必要がある。

真逆——と疑う人はその年十一月四日付時事新報に掲載された次の一文を読んで頂きたい。

「第一回の盛況を見て横濱にも第二回入場券を偽造したるものありとの事なれば、入場志望者は真正の券面には上部に二條の横線と、慶應義塾体育会、会計のゴム印、何れかの一個が押捺しあるを以て能く注意すべし、然らざる入場券は無効に帰すべしとなり」近ごろでは入場券の偽造など珍らしくも何ともないようだが、一回戦の盛況を見てすぐに次のゲームの入場券の偽造を企てるなどは、それがスポーツの入場料としては最初のものであつただけに、その機敏さにはただ驚きあきれほはな

剰余金を生じ候事と存候、日本人は非常にベースボール熱心にて、午後の競技にも、早朝より押しかくると申す様の有様、毎回一人一人ぐらゐの入場者有之、盛んなる事に御座候、今もし日本人が斜形打球の術を会得せんか、この上なき強敵と相成申すべく候、誠に我等の一挙手一投足を監視し、得る処あらんとする彼等の熱心は感服のほか無之候、云々」

グリーンソン氏のいう斜形打球とはいつたい何を意味するものだらうか解釈に苦むが、私の考えでは一種のゴルフ・スウインに相当するバツティンクを指したもののよう気がする。今でも地方の学校などでは「バットは水平に振れ」と教えているところがあるらしいが、明治年代はたいいそんな風にコーチされたものだった。だから、先進国の彼等の眼から見たら日本選手の融通のきかない旧式打撃法の欠陥があり／＼とわかつたのに違いない。

なぐられたファン

早慶が妙ないきさつから戦わなくなつたのは、日本の学生野球発達のためまことに惜しみてもあまりあることだったが世の中はよくしたもので、いつの間にかこれに代る人気者が登場した——それは一高対三高戦だった。

現在では一高三高ともに名称も組織もすっかり変わってしまい、中年以上のファ

聖路易大學
慶應義塾
三田慶應義塾運動場
網町

會場

十月三十一日(木曜)午後一時開場當日
雨天なるか又は前日大雨ならば延期す
此場合には更に執行時日を定め時事新報に之を廣告す可し

第一回

入場料 白六拾錢 青參拾錢 黄拾錢
注意 此入場券は部室回限り有効
此入場券は専ら技藝人に限る

セントルイス大学を迎えた時の入場券

ンだけに華やかだったそのころの雰囲気を追懐させるだけになったよりだが、だぶぶとも明治四十年ころから大正末期ごろの人氣ゲームは何といつてもこの両校の対戦だった。関東と関西、古都和新都それに一高が豪放なら三高がやゝせん細といった風にその対照がハッキリしていたせいもあったろうが、それよりも年に一回、しかも時は桜花らんまん咲き狂り、四月の第二日曜前後に行われるところにも異常な魅力があったのだと思う。

これより前、明治二十六年ごろ一高では京都遠征の企てがあった。この時の目標は同志社だったが、相手が一高の挑戦を拒否したのでせつかくの京都遠征もあきらめなければならなかった。ところが三十九年の春、思いがけなくも三高からの挑戦状を受取ったので、一高ではさっそく会合を開いて応戦の可否を相談した。席上先輩の守山恒太郎氏は「もし負けたら来年は京都に遠征しなければならぬ。それには多額の経費を校友に仰がなければならぬまいが——」という意味からむしろ反対意見を述べた。これに対して潮恵之輔先輩は「将来は然し、高等学校同士の対戦に向うべきじゃないか」と賛成説を唱え、これに対して主将中野武二は、「我々は挑まれた以上、むしろ進んで応戦したい」と強行意見を即答したので、さうによりややく歴史的な試合への第一歩を踏み出したのだと伝えられる。

え五対四、まず一高が先勝の光栄を獲得した。三高の鬼投手菊池秀次郎が半面赤アザの怪異な容態でプレートの上にあぐらをかき一高の彌次をへいげいしたといふのはたしがこの時のことだったろう。負けた三高はその翌年また東上し菊池投手の健投と木下、三笠らの好打につづくバント攻めに、一高内野陣を攪乱し九対四とみごと雪辱こゝに一勝一敗の成績となったので一高方は四一年四月初めて京都に乗り込んだ。

この前年一高は三高につづく慶応、早稲田と三戦全敗に終った。何しろ当時の一高は人材に乏しく、九人の頭数をそろえるにも大骨を折るような状態だったので、中野主将はじめ小西(投)石川(捕)杉浦(遊)池内(三)梶井(中)加福(右)らの卒業生が、もう一年残留して陣容を固めようかという話を持ち上った程の涙ぐましいエピソードが残っている。

そんな風だったから一高はこの初の遠征に当って非常に慎重な態度をとり、四月八日ゲームがあるのに一週間も前の二日京都へ乗り込み、連日京都一中のグラウンドで火の出るような猛練習をやったほどだった。

期待された八日は時ならぬ夕立のため一回だけで中止し、翌九日午後二時半改めてやり直しのプレーが宣告された。さてゲームはたがいチャンスはあったが得点に至らず、第六回の目投手で一番を打っていた一高の戸田が三塁ゴロの失策に一挙二塁を奪い、安形のバント

は内野安打となって両者共に生き、野村投手ゴロの後、田代の四球にフルベイスこの好機に立った吹原がツー・ストライク後の球を痛打すると兎事三塁頭上を抜く安打となって戸田最初のテンスを挙げ、安形も君島のバントで生還し、幸先のよい二点目を記録したが、三高もさるものたちまち一点を返して差一点と迫り、いよいよ九回裏を迎えた。

一死後三高の一番打者木下が四球に出て虎視たん／＼二塁をうかがう時、池田の痛打は二塁の逆を襲う強襲安打となったので木下は得たりとばかり二塁から一挙三塁に向って疾走した。やと球を拾った君島が必死の勢いで投げる、そのボールを平山三塁手が腰を落してガツナリつかみ、猛然ヘッド・スライディングしてきた木下にタッチして間一髪アウトにき、やとピンチを切り抜けることが出来、結局二対一で遠征軍に凱歌が挙げられたのだったが、一高の野球部史は「あゝ一年の経営遂に空しからず、恨多き復讐の奥こゝに挙りぬ、暗雲低き吉田原頭白旗独り高く翻り、一高健児の凱歌の声勇ましく選手を擁して校門を出づ」と、感激的な文句で綴っている。

この一高三高戦は前にも言ったようにかなり長い間球界の人氣を独占した形で一年一年猛烈の度を増し、従って数々の感激美談をりんだが、また一方では応援隊同士の間隙など問題が起すのがおきまりのようになり、野球の試合か応援隊の試合かわからぬなどと言われた時代もあった。

一高三高戦で思い出すのは当時一高の球場では入場者に「洋服及び袴着用のこと」という厳則があったことだ、だからそんな気のきいたものを持たぬ町のおんちゃんなどは「長吉が親の名で来る御慶哉」の川柳をそのままにずいぶん珍妙な格好で入りこんだものだが、中へ入ったってスタンドがある訳ではなく、うすいムシロもあればいい方で、大部分は地べたに坐りこむのだった。しかも後から押されて制限外の地点にハミ出したり、桜の木へよじ登ったりしたのを見つかると思ふに當っている応援団の猛者どもが下から棒で突つつかやらバットの折れたので情け容赦もなく頭をコック／＼叩いて回ったものだったが、それでも誰一人不平を言うのではなく、黙ってニコ／＼していたのだから今から考えるとずいぶん悠長な時代だった。

野球創始についての論争

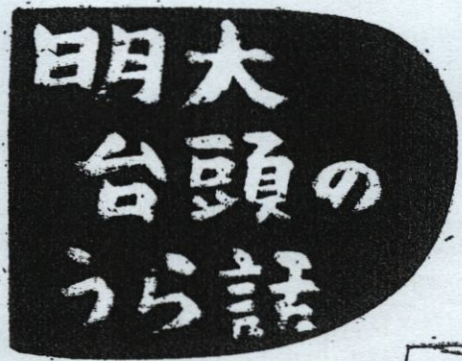
橋戸信氏の「最近野球術」とは別にアメリカ帰りの早大選手によって「ベースボール」という本が出版された。各自が所持のシートについて説明し、これに安部磯雄氏が「統御法」「野球の術語」などを加えたものだが、橋戸氏の著書が非常に勢いで歓迎されてから二年も後に出版されたから二年も後に出版されたか何となく色あせて見えるのも仕方があるまい。

同じ四十年に安部磯雄氏の「野球案内」という僅か六十六ページの小冊子が出ている。数年前筆者はこの本の著者安部氏に記念の署名をして頂いたが、御当人でさえ忘れていたほどの珍本で、その意味では大関格といえるかも知れない。

またこの年、体育倶楽部編の「ベースボール・ロケットニス術」という長ったらしい名前の本も出ているが内容はご粗末千万なものだ。

四十二年八月出版の山口龍吉氏の「米野球事情」は、この種のものとして最初だと思いが、これはリーチ・オール・アメリカンというセミ・プロ・チームの日本訪問を機会として、故国の野球ファ

野球文献史話 14



斎藤三郎

ンに本場の野球とはこんなものだという概念を与えようと考えて出版したもの。当人も「しろ」との見たる米国野球といくらいいの料簡で通読して貰いたい、云々」と断り書きしている。

と、いうとしごく平凡な出版物のよう

に思われるかも知れぬが、内容は決してそんな安っぽいものでなく、いやそれどころかある意味では、大変貴重な資料を提供していることに気がつく。——といふのは、従来あまり知られていない「野球の起源についての論争」と「ベース・

ボール競技がニューヨーク州クーパーズ・タウンで初めて行われた」という定説に落ち着いたまでのイキサツを非常にこまかく、親切に紹介していることで、筆者の知っている限りでは、現在までにこれ以上の記録は見当たらない。

このいわゆる「定説」も近ごろではだいぶ怪しくなり、一七八七年出版の子供の本に「ベース・ボール」と題する詩が挿絵つきで載っていて、しかもそれが野球百年祭で記念切手まで出た一九三九年の春、ワシントンの議会図書館で発見されたというニュースも伝わっている。

内容を説明すると、これだけでも原稿紙の十五枚や二十枚にもなるので、ここでは一応見送ることにするが、結論的にいえばヘンリー・チャドウィック氏(註II英国生れのスポーツ・ライター)とエー・ジー・スポルディング氏(註IIプロ野球初期の大投手にして、有名な運動具商)の間に行われた「ベース・ボールは果して英国の遊戯ラウンダースより変化發達したものか、それともぜんく米國獨得のスポーツか」という論争がきっかけとなり「野球特別委員会」に提訴した。そこで委員会は三年の日子を費やし、ひろく資料の蒐集につとめた上、これを取捨あんばいし、なお数ヶ月慎重に審議の結果「野球は米國に起源を有する特殊の遊戯にして「ラウンダース」その他の外國遊戯となんら素樸的關係を有するものに非ず」という最後の決定を見、これを一九〇八年度(明治四一年度)の「ベース・ボール・ガイド」に発表したまで

のいきさつである。しかも面白いことには、この資料蒐集の最中にコロラド州デンバーのある鉱山技師から「今日の野球は一八三九年ハリソン氏が十統領候補者として選挙場裡に駆逐せし年、ニューヨーク州クーパーズ・

タウンの人、アブナー・ダブルデー氏によりて案出せられ、かつ命名せられたものなり」という投書があり、結局、これが野球發生の地と決定づけられたことやその当時の模様などなか／＼面白く書いてある。

これに比較すると日本へ野球が輸入された年代、最初に行われた場所、当時の選手などは今から五十何年も前、つまり野球が伝わってから二十五年目にはチャンとした記録が、しかも当時の新聞に堂々掲載されているのだから、確かなものだ。(野球文献史話第一回参照)

ところで野球發祥の地といえは、いわゆる野球の知識人でもニューヨーク市の郊外だなどと思っている人が多いようですが、實際はニューヨーク市からアルバニー回りの汽車で約二百五十マイルの終点オツネゴ郡オツネゴ湖(南北に細長く、長さ十二マイル)の西南岸に位する人口二千七百二十五人(一九二七年版、エンサイクロペディアによる)の小さな町。クーパーズ・タウンというものは、近ごろわが国でも翻訳された「モヒカン族の最後」をはじめ数々のインディアン物語や海洋小説で名高いジエームズ・フニ

モア・クーパーの父(この土地の最初の開拓者)の名を記念するためにつけられたもの、つまり「クーパーの開いた町」とでもいうところであらうか。

大隈さんの珍始球式

前にも言ったようにリーチ・オール・アメリカンは運動具商の宣伝を目的としたものだっただけに、その顔ぶれもデレハンター、フラハター、ブリッス、パインズなどは当時アメリカのビッグ・リーグでも一流中の一流、その他ハイトミューラー、デベロウ、グラニー、ヒルデブラント、ダンジック、マッカードの面々はコースト・リーガー中の精鋭だから、日本の学生チームなど逆立ちしたって勝てるはずはなかったのだ。

リーチがこのよりな強チームを送って来たのは宣伝ももちろんあったろうが、うまく行ったら一ト儲けしようという下心があったらしい。というのには前に述べたハワイ・セントルイス軍や、その翌四十年早大が招いたワシントン大学の成功、さてはアメリカ東洋艦隊と早慶両大との、華々しい歓迎試合などの模様が頻々と伝えられたのでさてはとばかり両天びんにかけたのは一応もつともな話であらう。

米艦バアジニアと早大の試合にはこんな話がある。

早大の第一打者がボックスに入りプレイボールが宣告されたのにキャッチャー

がマスクをかぶっていない。これはテツキリ忘れたに違いないと、そこは人道主義一本槍の安部磯雄氏(部長)が急ぎタイムを要求し、マスクを掲げて打者のところに行った。

「汝、マスクを失念したるには非ずや」もちろん安部氏にしてみれば、せつか



伯大をやった始球式を珍妙な

東京日日新聞から抜書して見よう。

「リーチ・オール・アメリカン・ベイスボール・チームは別項の如く横浜に着し、直ちに上京、一たん帝国ホテルに入り、それより三合の馬車に分乗して午後一時というに彩旗翻騰たる戸塚原に着し、各自白地に藍色もてリーチ

・オール・ア

メリカンスの英字を現わしたる模範的制服に真紅に白く星を染抜きたるオーバの美々しき扮装にて楽隊の奏するりゆり

よるたるベイスボール・ソングに足並おかしく入場し、敢てその巧妙なる練習に黒山の如き観衆を驚したるが(略)やがて二時三十分というに米軍のマネージャー、フィッシャー氏審判官としてプレートの後に起ちたり。この時大隈伯は家扶にたすけられてプレートに現われ、フィッシャー氏より球を受取りてこれを投じ、ここに今回の始球式を終りたり、さて大試合は早軍の攻撃によって開始されたが、云々」

とわりあい簡単に書いているが、事実

はフィッシャーが自分の着ていた真紅のオーバを脱いで大隈さんに着せると、

伯は「ウム、これはなか／＼上等じゃ」とプレートに進む。愛嬌者のフィッシャーが自分のかぶっていたリーチの運動帽を伯の顔にのせるなどの景物があり、さしていよ／＼かんじんの試球式に入ると伯は今受け取ったばかりの処女球を頭の上まで振り上げ、はっしとばかり投げた。

と。

これまではよかったのだが、そこは素人の悲しさ、しかも明治二十二年十月八日、外務大臣時代の伯は刺客来島恒喜の投じた爆弾のため右脚を失い、大股骨の三分の二を残すのみで全く歩行の自由を欠き、僅かに柵杖と家扶の肩をたよりに左足一本だけで歩行していたのだったが、ボールを投げたハズミに身体のパラソスを失ったから堪らぬ。アツという間にボールは本塁と一塁の中間にころがってしまった。不意討ちに面くらった捕手のグリッブスが猛然球を追いベンチの近くでやつと球に追いついた。

これは日本における始球式の最初だったが、あとの歓迎会で米軍の一人が「我々国では始球式といえば本塁に投げることになっていますか」と言うと、伯は有名な大きい口をへの字に結んで「ウム、それは我輩があらゆる場合、常人より一歩先んじて行動しとるからであるんである」と心臓の強いところを示したという逸話もある。

ところで、もう一つの記録はこの試合の五回目右翼手のハート・ミューラーが出来るから間もない中堅後方の柵を越す大

本塁打をぶつ放して観衆のドギモを抜いたことで、これが戸塚球場における棚越し本塁打の第一号となっている。

一回戦は五対零、二回戦は三対零ともちろん米軍の勝利に終わったが、二回戦にはフラハターのアンダー・スローに脳まされ全回を通じて一塁を踏む者なしという、いわゆる完全試合（ペーフェクトゲーム）となり、ここにはからずも三つの記録を残した。

明大の野球部を創立

早稲田と慶応がつまらぬことから試合を中止したまゝいつ再開するか見当もつかず、その穴埋めに——というわけでもあるまいが——後から後から来朝する外来チームも度重なれば刺戟のうするものも自然の成り行きであろう。一高、三高戦はよりやくファンの視聴をあつめるようにはなつたが、何しろ一年一回の行事ではあるし、それに敗けた方が遠征するということになるとその年に完全に空白になるのだから非常に物足りぬ事になる。といって早慶と一高との間には最早好敵手と呼ぶには少し技倆にへだたりが出来たとあれば、そこに——早慶とすくなくとも対等か、或いはそれに近いチームの出現を要望することになるのは、これまた自然の勢いであろう。

前に私は、一高凋落の原因を、個人主義思想の影響、云々と書いたが、昨年十一月のある日、一高大先輩の方々十四名

の集りに招かれた席上のお話で、五年制の高等学校が三年制に改められたことも大きな動因の一つだということを知った。なるほどこれでは、専門部から本科と六、七年も在籍する他の大学と同等の技倆を保持するのは非常に無理な話でたま／＼天才的な大投手などの出た時だけ、辛うじて肉薄戦を演じ得るとい程度だったのもやむを得なかつたと思う。こゝろい情勢の中で、たとえ長い長い冬の試練を経てよりやく頭をもたげはじめた春草のように、僅かずつではあるが、芽をふきははじめたのが明治大学の野球部だった。

慶応も早稲田も一高も、芽生えてから数年を経てやっと正式の野球部として認められたと同じように、明大でも明治三十九年、つまり早慶が分裂した年あたりからキャッチボールぐらいはやつていたらしい。

それがどうやらチームらしいまとまりを見せたのは四十二年四月ごろからで、錦町に分校があつた時代、その予科生たちが、駿ヶ台本校の商科に試合を申し込んだのが最初だった。

ところで、申し込まれた方でも別にチームがあつたわけではなかつたが、受けなくては兄貴分の估券にかかわるとばかり、ろく／＼キャッチボールも出来ないような連中まで狩り集めてやつて見たら案外にも本科の方が勝つてしまった。これが病みつきでいよ／＼野球部設置の段どりまで発展したというから、まるで

ひょろたんから駒が出たみたいな話だがその記念すべき第一試合のグラウンドが三ツヶ原だったというから面白い。

三ツヶ原——などといっても五十年代以下の若い人々にはおそらく見当もつくまいと思うが、現在の東京駅附近一帯の広い地域を指して「永楽町の原」とも「三ツヶ原」とも呼び、たしか四十一、二年ごろまでは東南方の一隅に大審院の建物があつただけ、右を見ても左を見ても草ぼうぼうの原っぱだった。真つ屋間若い女が殺されたなどと噂があつたくらいだから大よその見当はつこり。

何しろ大正のはじめごろまだ東京駅が出来たばかりのころは、原っぱの片隅の広大な建物とはおよそ不釣合いに、丈なす雑草が繁つていたものだったが、ところどころに空地があるのを、少し手入れ（といっても草を引き抜くくらいだが）してはアウトだ、セーフだとかけずり回っていたのだから他愛ないものだった。

ところで敗けた予科の連中は復讐戦を申しこんだが受けつけてくれないので、さらばとばかり鋒先を交えて中央大学に申込み二度戦つて二度敗れた。場所は現在日比谷公会堂前一带の砂利だらけな運動場だった。

こゝろなつて来ると学校側でも黙つていられない。一つ野球部を設けようじゃないか」と発議するものがあり、幹事会では難なく承認されたが、それを校友会の委員会にかけると、がぜん雄弁会を中心とする猛烈な反対運動が起つた。このと

き矢面に立つたのが中津川源吉という豪傑で、群り寄せる反対派と渡り合つこと十数時間、夜の十二時過ぎになつてやつと野球部承認にまでこぎつけたが、何とその時の創立資金が金八百円也——というが、いくら物価の安い時代とはいえずソミたいな話である。

ところで部は承認されたが球場はもとより、選手だつてありはしない。やつと淀橋柏木に六千坪の土地を見つけたが、畑地の跡なので行軍に来ていた兵隊にかけ足をやつてもらつて地ならしをしたり各クラスを説得して廻つて選手を募つたりしたあげく慶応の旧選手にコーチして貰つた。四十二年の冬は房州の北條へ冬期練習に出かけ、四十三年夏、東海道沿線を神戸まで遠征してやや自信をつけたので、十月十五日の対早大（九対五敗）同月二十八日の対慶応（六対〇敗）を皮切りに華々しくスタートしたのだったが早慶と五角の実力を認められるまでにはざつと十四、五年の歳月を必要としたことがわかる。

急先鋒の新渡戸博士

明治末期の日本野球界最大の話題といえ、まず朝日新聞が提唱した「野球害毒論」とどめをさす。といったところ

んだがビールになり、その次に正宗といふようになり……などと学生風紀の頽廃を嘆いているように、だいたい明治時代から大正初期にかけては、運動家といふとかく色眼鏡で見られていたのは事実だった。

世論調査をやる」と意気こんだのが、四十四年八月末から九月十九日まで連続された「野球とその害毒」だった。ところで、連日発表された各界知名の人々の、いわゆる害毒論を現在から見ると、もちろんバカ／＼しいものもあり、また傾聴に値する意見も相当に多いが、次にその中から少し拾ってみよう。

「自分も昔は野球をやったが、野球は悪くいえば巾着切の遊戯で、常に相手をベテンにかけよう、計略に陥れよう、ベースを盗もうなどと眼を四方八方にくばり、神経を鋭くして遊ぶ遊戯である。だから米人には適するが紳士国英国には流行らない。云々」これは当時の一高校長新渡戸稲造氏の談。

野球文献史話 ⑮

野球害毒論の提唱



齊藤三郎

「日本の学制はドイツ式で非常に深目が多い。野球はアメリカのような自由主義の国だから発達したのだが、日本ではいかぬ」

大勢占めた害毒論

さらに珍妙なのは松見順天中学校長で「選手の学科が不成績なのは掌へ強い球を受けるからだ。すなわちその震動が腕から脳に伝わってその作用をにぶらせるためらしい」

「学習院では野球を運動として奨励してはいない、子供らがやりたがるからやらせていたまでのことだが、対抗試合には多くの弊害ありと認められたので禁止したのだ。こちらでは体操、体練の外に馬術、弓術、柔術、撃剣、水泳等は正課として生徒に奨励している。要するに一方は必要と認め、一方は必要と認めないという

しかも早慶戦中止以後の日本野球界は日米野球界の交流が次第に激しくなるに従い、アメリカ流の相当ハデなスタイルなどがだん／＼入り込んできたのだから、一般の教育家などから見たらかなり目にあまるものがあったのだらう。朝日ではときどき野球の弊害について論じていたのだが、ちよろどそれが未曾有ともいふべき興隆時代に当たっていたこととて相当激しい反対論や、時に脅迫的とも見えるような投書が非常に多かつたらしい。「よろし、そんなら名士による野球の

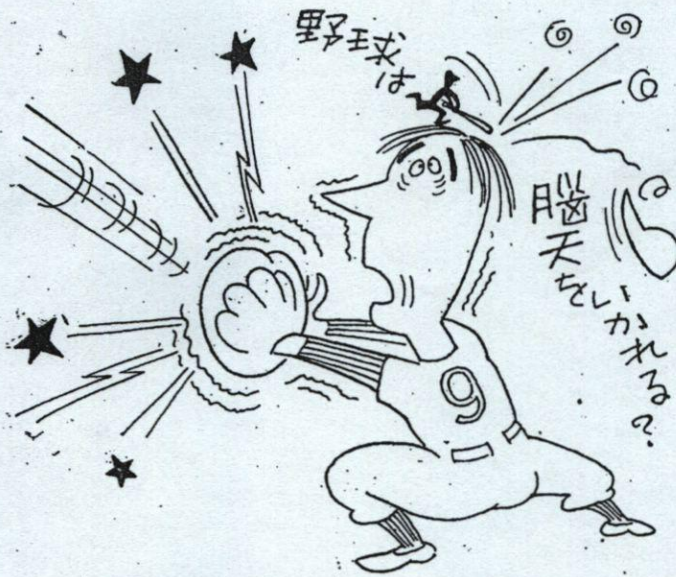
壮烈な攻防戦を演じたという伝説もあるし、三十二年欧米視察の旅から帰った近衛篤磨氏（文麿氏の父）が、日本体育会の招きに応じ帝国ホテルで「欧米体育の状況」と題した講演の一節にも、「私の関係している学習院なども他の学校と試合をした事もあります。しかしこれも一利一害で、学習院で一つ困っている事がある（略）まず向うの学校よりこちらへ来る時は御客が来たというのでもない、餅菓子でも出さねばならぬ。また向うに招かれる時は餅菓子か詣になり、茶を飲

人類の歴史は大別して前進と反動の繰り返しに過ぎぬのだから、時にこのような議論のとび出すのは当り前のことで、すでに野球が移入された明治初年頃から、「毛唐の遊戯」として一部からは白眼視されていたらしいし、現に十七、八年ごろ市川延次郎という人が、三崎町の原での野球練習の帰り道、たそがれ時の湯島天神境内で「国賊待て！」と三、四人の暴漢に襲われ彼岸桜の吹雪と散る中に、

招かれる時は餅菓子か詣になり、茶を飲

ことになる。

この思い切った意見の持主は日露戦争当時、第三軍の司令官として旅順攻略戦に武名を挙げ、後に明治天皇の後を追って殉死した乃木希典大将(当時学習院長)だが、野球部の委員がグラウンド拡張のことを懇請すると、「タマ投げの場所がもっと欲しいというのか、よろしい分った。学校の周囲の塀に沿った部分を二間幅だけ提供しよう。あとで事務の者に計算させるが、恐らく全部では数千坪にのぼるじゃろ」というと、アツ氣にとられている委員をおきざりにしたまま、セカセカと事務室に赴いたり、ポートが欲しい



と要請されると、「よろしい、待っとれ」とばかり悍馬にムチ打って海軍省に赴きあのバカ重い、龜みたいな格好のカッターを払い下げて貰い、意気揚々と帰校したという堅造だけあって突にハッキリしたものだ。

以上挙げたのはホンの一例だが、その年九月十八日に締切るまで都合二十一回にわたって各方面の意見を徴した結果によると「野球は教育に害あり」というのが約七十八パーセントだったことが分る。さて、朝日は最後に

「大体において何れも現在の野球が多くの青年に弊害を流しつつかある事は、

一点疑うべからざる事実である。しからばいかにしてこの弊害を防ぎかつ除くべきか(略)もし虚心にその利害を察して従来の弊根を断ち、さらに健全なる發達を図ったならば、独り諸君の快を取るゆえんなるのみならず、また天下青年の幸である」と結んで、いわゆる「野球害毒論」のピリオドとした。ところで朝日が取上げた野球問題に

ついでの原因を探ってみると、体育が目的のための競技運動に入場料をとり、学生がそれを取扱うことによつて生れる弊害。早慶戦中止以来しきりに行われて来た日米間の交流で、選手の間がだんだん華美に流れ、それが地方遠征やコーチなどで地方の学生などに与える悪影響。選手間にポツ／＼落弟生を出して来たという事実。選手が学校の広告宣伝などに利用される傾向がようやく顕著になって来たこと。米國遠征などで選手が何ヶ月の間全く学業から離れることの弊害などだったが、わけてもこの四十四年には早稲田は北米に、慶応はハワイにそれぞれ遠征中だったことも攻撃の目標にされた観があった。

これらの中には今なお考えさせる問題をふくんでいるが、結果からいって読売、毎日、国民、日日の各紙、前記天狗クラブの憤起などからかえつて野球の普及と隆盛を促し、当の朝日も大正五年には全中等学校野球大会を計画したのだが、これもしよせんは時勢というものであるが。

天狗クラブの活躍

ところでこの野球害毒論に対して第一の烽火をあげたのは押川春浪、中沢臨川両氏を中心とする天狗倶楽部の一団だった。近ごろは押川春浪などといっても知らぬ人が多いが恐らく明治大正を通じて、この人ぐらゐ青少年層の心をしっ

かりとらえていた者は前後を通じ唯一人だったように思ふ。春浪のえらさは燃えるような情熱と素晴らしい実行力だったが、その中核を成す人道主義的正義感が事毎に爆発するのだった。たとえば当時独占資本のチャンピオンと目されたデパートに対し「虚栄の殿堂三越呉服店を筆誅す」と真つ向うから食つてかかったり、早稲田界限にいかかわしい飲食店の激増するのを見て、学生の風紀上許し難いと中堅学生層を動員して追っ払い運動を起したり、京浜中等学校野球大会や学生相撲大会を起したのもみな春浪が中心だった。

仙台の東北学院在学中、彼は同僚と一緒に教室備えつけのストーブの上で犬の肉を煮ていた。運悪くそこへ入つて来た米人の英語教師が異臭に鼻をひよこつかせながら「これは一体何ですか」と叱責した。同僚がすっかりあわてふためいているのを尻目にかけた彼は悠然と答え

たものである。曰く「イット・イズ・ア・ドッグ」。この明快な返答に教師も二の句がつけなかったというが、三つ児の魂百までのたとえのように、春浪は死に



新渡戸博士



押川春浪



飛田穂州



三宅雲嶺

至るまで尊い童心を固く持ちつづけた、珍らしい人間の一人だった。

さて春浪らの天狗クラブは九月二日の「読売新聞」に第一声を挙げたのをき

かけに、連日各方面の知識人を動員して朝日に対抗した。これらの中には高田早大学長、鎌田慶大塾長、嘉納高師校長、潮内務書記官、坪井玄道、三土忠造、内ヶ崎作三郎、谷本富、江原素六、高杉滝藏など各界名士の顔が見え、さらに同月十六日には神田美土代町の青年会館に「野球問題大演説会」を開き、押川春浪、安部磯雄、向軍治、鶴沢総明、河野安通志、大森兵藏、三宅雪嶺、太田三次郎、内海弘藏、永井道明、横山健堂などの諸士が起って野球擁護のために萬丈の気を吐いた。大会の予告には、「入口にて下足の準備あれども混雑を避くるためなるべく靴、もしくは雪駄、麻裏、ゴム草履の類を穿きて入場せらるべし」とか「草鞋穿きの来場者は入場を謝絶すべし」などという珍文句が見え、読売はこの講演速記を全十四ページの特集号として同月二十日発行した。

当日の異色は慶大教授の向軍治で、「近い将来野球全盛時代が来よう」というのに、今頃よいの悪いのとグズグズ言っているのはひとり野球界のためばかりでなく日本の恥辱だ。こんなことをしている、日本はいつか地球上の地図から抹殺されるだろう」と痛論、満場の喝采を博した。氏は何かとつぐ日本亡国論をかかげ出すのが評判になっていたのだが、ここでもお得意の論法をふりかざしたわけである。

向氏の爆弾宣言に対しあくまで正攻法をとったのが、野球界の聖人と呼ばれた

安部磯雄氏で、「世の中にはめくら千人目明き千人ということがあつた。無教育者の中にそれがあるのなら分るが、いやしくも天下の教育者の中にめくらが千人もいるというところは軽々に見のがせぬ大問題である」と前提して、反対論者の各個撃破を試み、最後にベースボールの発達が国民にフェア・プレーの精神を植えつけ国民士気の昂揚に如何ばかり役立つかを強調降壇した。

次に変わり種として三宅雪嶺氏のいわゆる咄弁の雄弁中に、野球が商売になって悪いというが、外に内職をしている学生だつていくらでもあるではないか、それとこれとはどう違ふというのか」とズバリ言つてのけているのが注目される。これは当時としてはずいぶん思い切つた意見にちがいないが、学生野球の進むべき——いや、将来そつういふ方向に進むかも知れない一コースの暗示として考えるとなか／＼に面白いと思ふ。

信念の人押川春浪

さて、この大会にすっかり氣勢をあげた天狗クラブは、同じ月二十三日午後一時より、処も同じ青年会館で再び「野球事件演説会」を開き押川、河野の外、阿武

天風、中沢臨川、飛田忠順、それに早慶戦以来一躍天下の名物男になつた野次將軍こと吉岡信敬など多彩な顔ぶれで、いずれもその道の猛者だけに野球の効用を説くのはお手のもの、中でも飛田氏は登壇

するといきなり、「球場と違つて野次られるとのはせしてしまふかも知れないから野次つてくれるな」と前おきして前年春の対一高戦のウイニング・ボールを袂から取り出し「男子の意気をみよ」と叫んでから母校水戸中学と愛知一中との場合を比較し、運動競技の校風に及ぼす影響を説いたのは、問題が身近かであるだけに満場を傾聴させた。

さて、講演の趣旨や各方面から寄せられた反響にはなか／＼教えられるところがある。その中の一部は四十四年十月安部、押川両氏共著の形式で「野球と学生」と題し出版、またその年十一月に出た橋戸碩鉄氏著「野球虎之巻」にも収録され

た。

安部氏は「毒害があるという理由で野球を排斥するならば、同一の理由を以て殆んどあらゆる運動を排斥せねばなるまい。ただに運動ばかりでなく、およそこの世の事にして人類の多大の利益を与るものは、必ず一方に少なからぬ毒害を有している。しかもその毒害を抑えてその利益を収めて行くというのが吾人のなすべきことで、殊に教育家や経世家が勉めてなすべきことではないか」といつているが、如何にも聖人安部さんらしい見方だと思ふ。

次に春浪氏は新渡戸博士の所論に真つ向うから取組み

「若し敵の虚を窺い、隙に乗ずるを以て巾着切的遊技と言ふが如き、博士の論法を用いんには撃剣、柔術、庭球、蹴球、競走何れが巾着的遊技に非らざる。博士の言ふが如くんば、自ら競技といふ文字は絶対に破壊せらるべし。(略)もしそれ両競技に比するに英独米の国民性を以てしたるが如きは、友邦の紳士を侮辱するもまた甚しといふべく。(略)博士が賢明をてらいてここに引照せるいわゆる剛壯なる蹴球は、何ぞ知らん米人独特の蹴球なるにいたつては論理の矛盾撞著真に噴飯を催いするものなからんや。(略)余は当然博士の取消遠からずして必ず現わらるべきを確信したり。しかもこれまた空望なりき。(略)すなわち博士の所説に對する余が意見に附するにその談話全部を

英訳せしめ、これを米國五十有餘の大新聞に附書して以て、先進國識者の公明なる意見を求めん事を托せり、云々」とまで言っている。

つまり春浪は新渡戸氏の渡米に先立ちアメリカの大新聞に寄書して野球が果して有害無益なものかどうかを審判して貰おうといふのである。近ごろの常識からすれば「それまでに追及しなくともいいだろう」といふところであらうが、一度正しいと信じたが最後、トコトンまでやるといふのが彼の特質だった。

春浪のした仕事で記憶されなければならぬものに東京倶楽部の創立がある。これは早慶の決裂により、一種の空白状態に陥つた日本の野球界に活を入れるのが目的で、それにはどうしても早慶両大學を握手させるべきだといふ前提のもとに設けられたもので、協力者は中沢臨川だった。つまり早大選手の中に一人か二人他校の選手を入れたものを東京倶楽部と名づけて慶応と戦わせ、時期を見て完全な握手にまで進展させようといふのが主目的だった。

不幸にして彼の生存中実現の運びにはいたらなかったが、その精神は脈々として生きていたわけである。その他日本運動倶楽部の名の下にあらゆる階級人を集め、ひとり野球に限らず、すべての運動競技を一般大衆に普及させたのは、前に挙げた学生相撲や中等学校野球大会などと共に、不朽の功績として賞められたえらるべきであらう。

野球文藝史話

16

野区に跨る本壘打

用語も奇
黒船時代

齋藤三郎

スピーカーの妙技

大正二年も暮れに近い十二月六日早朝、横浜に入港したカナダ汽船エム・ジャパン号はニューヨーク・ジャイアンツ、シカゴ・ホワイト・ソックスの両野球団二十五名の精鋭をもたらした。

一行中にはスピーカー、クロフォード、ドイル、マール、ワイバー、ドンリン、リブなど一流中の一流を網羅し、これを率いるものに小ナポレオンの称あるジョン・マグロー、老ローマンと呼ばれたチャーレス・コムスキーの二大監督という堂々たる顔ぶれだった。大リーガーによる世界一周旅行という空前の企てからはマシューソン、マーカードなど待望の大選手の名の見えなかったのは、いささか淋しかったが、それはむしろせいたく

な希望だったかも知れない。

さてジャイアンツ、ホワイト・ソックスの第一戦は、その日午後二時から三田町野球場で行われたが、史上最大の外野手と呼ばれたトリス・スピーカーを三番におくシ軍は、終始巨人を圧倒し九対四でまずリードを奪った。

この日スピーカーの働きはまことにケソラン目を奪うばかり。第一回巨人に二点を先行されたその裏一死後、三塁失に出たイーガンを一塁においた彼は「怪打手スピーカー莞爾としてホームに立ち一べつ軽振すれば、球は中空うなりを生じて右翼の垣根を越し、隣家の林中に失してホームランとなり二点を収め、云々」と本壘打第一号を記録し、その興奮のさめやらぬ第三回「またも右翼垣根越のホームランをかつとばして、一挙三点を挙げ」三回にしてすでに五打点を得たが、

七回またまた「先鋒を承りて右翼越の痛快なる三塁打を飛ばし三塁により、一呼吸の後捕手の逸球に生還」という風に、この日はさながらスピーカー・デーの感があり、「さすがにボストンの大打者と呼ばれるだけあって……」と、小さい日本人の度胆を抜き去ったのだった。

翌七日は午前十時半から米連合軍と慶應義塾の一戦が催された。当時慶大のマウンドを踏む背瀬は名実共に日本一の大投手、しかも捕手高浜茂、遊撃三宅大輔、中堅森茂樹、一塁富樫与一、三塁日下輝、右翼石川真良などいずれ劣らぬ名手を揃えた黄金時代を形作り、海内敵なしと言われていただけに、この一戦如何に戦い抜くかと非常な期待をかけられたのだった。



たが、実力の差は争えず十六対A・三の惨敗に終わった。

何しろ九回裏最後の守りについた米軍スカット投手のため根本、背瀬、阿部の三人が九つのストライクを一つも振らずに三振させられたのだから話にならぬ。

ところでこの試合を取扱った各社の運動記事にはなかなか面白いのがある。まず「時事」を見ると刺殺を「刺除」補殺を「助力」などはさして奇異とは感じられないが、安打を「快球」とはうまく考えたつもりなのだろうが打たれた方にしてみれば「不快球」とでも言いたいのころだろう。次に「都」をみると「高浜中堅の過誤に生き」とか「石川の過誤は叱責すべく」などと、しきりに過誤という文字を使っているのも今から見ると妙な気がする。

芝一麻布間の本壘打

この試合につぎシカゴ対ニューヨークの第二戦でとくに勇名をとどろかしたのは巨人軍の一塁手フレッド・マールだった。七回裏ドンリン三振、ロバート中飛後ドイルが二塁の強襲安打に出るや彼マールの一撃は弾丸の如く左翼に飛び、あれよあれよと見る間もなく左翼手頭上を抜き、柵を越し、さらに柵外家の背後を流れる古河をオーバーする大本壘打となった。時人これを称して「芝から麻布に達する大ホームラン」と讃嘆した。このマールこそ三年前の対シカゴ・カップス戦に当然踏むべき二塁を踏まずに引き上げた有名なマール事件の主人公だった。

明治四十一年九月には早大の招きによつてワシントン大学が来た。これはアメ

リカ本土からのチームとして最初だったばかりでなく、大学チームとしての先鞭でもあった。

ついで四十二年九月来朝したウィスコンシン大学は、慶大の招きに応じたものだった。前に述べた菅瀬投手はこの第二回戦初めてプレートに立つて得意の十字火球をあやつり、一方ウ軍のナイト投手も容易に慶軍を寄せつけず、試合は延長に延長をかさね、熱戦苦闘十九回という空前の切迫戦となった。暮れるに早い秋の日は漸く落ちてあわや引分けに終るかと思われたが、一走者をおいて放った高浜の快打が左翼ラインの石灰を散らすタイムリーとなって二対一慶大に凱歌が挙った。結局慶大は三勝一敗と勝ち越したが早稲田はいぜんとして振わず、三戦して僅かに一勝を記録しただけだった。四十三年秋早大の招きにより渡来したシカゴ大学は前に来た二大とは比べべ

のにならぬ強味を持っていた。ことに左腕投手ページが自在にあやつる怪魔球には早慶とも三戦三敗に終った。

史上まれな珍事件

打ちつづく日本軍の敗戦にいきり立ったのが快男子押川春浪だった。彼はその弟押川清をはじめ獅子内謙一郎、泉谷祐勝など早慶戦時代の元老と若干の現役選手、それに早稲田中学のバッテリー山本、福長を起用して勝ち誇るシカゴ勢に一太刀浴びせようというのである。

必死の一同は試合全夜に水ゴリを取り穴八幡に詣でて戦勝を祈願するという涙ぐましい張り切り方だったが、結局十一対二の大スコアで軍門に降った。

東京の試合を終えた後早稲田はシカゴと帯同して西下、兵庫の香櫛園球場に三回戦を行ったがここでもまた完膚なきま

でに打ちのめされてしまった。早大のキャプテン飛田忠順は敗戦の責任を負って辞任するというような悲劇の一コマも演ぜられた。一度読売新聞の運動部に籍をおいた氏が、大正八年十二月から母校の専任コーチとなり「シカゴに雪辱するまでは孫児の代までも」と心に誓い、遂に大正十四年秋みごと初志を貫徹したのだが、文字通り難行苦業の成果である。

同じ明治末年来朝したスタンフォード大学が慶大、明治と戦って慶には五勝三敗、明とは一勝一敗で帰った後、九月中旬明大の招きにより来征したワシントン大学は、早慶明と各々四回戦を行い六勝五敗一引分に終ったが、ここにはしなくも日本野球界未曾有の大紛擾を巻き起した。しかも一度ならず二度も同じような事件を繰り返したのだから、或いはその意味で空前絶後といえるかも知れない。事の起りは、対慶大戦の三回三塁手ダ

ハムの一塁大暴投をエンタイトル・ツィベースとすべきか否かにあったのだが、当日の審判三島彌彦氏と慶大側の主張が全く同じであったことから、ワ軍はその審判を無法であるとし、試合を放棄して旅宿に引き上げてしまった。そこで当然「フォーファイテッド・ゲーム（放棄試合）」の宣告が下されたわけである。

この事件はワ軍の三島氏に対する謝罪となり一応解決し、中三日をおいて三回戦を行ったが、試合開始前よりの小雨は五回表三対三の頃となつてようやく激しく慶大は中止を申出でたが肯かれず、やむなく守備についたが四球失策の続出に業を煮やし、塁に走者を残したままサツサと退場した。そこで高瀬主審の放棄試合宣告となつたのだったが、恐らくこんな珍らしい出来事は野球史上にもちよつと類例を見出し難いものではあるまいか。当時の新聞も大きく採り上げている。



三大学リーグ出来る

大正三年十月二十九日、早慶明三大学によって三大学リーグ設立のことが協議された。近ごろでこそ六大学をはじめ東都大学、関西六大学など、それに実業団の何々リーグという組織は数え上げたら大へんな数にのぼるだろうが、こういう種類のものとしては、この三大学リーグが最初である。

ところで、リーグはその発足に当り次のような仮規約を決定した。

「今般、慶応、早稲田、明治の三大学野球部において左の仮規約をなす。
一、自今開催すべき三校の野球試合に
おいては、左の入場料を徴収すること。
一等 金五十銭
二等 金三十銭
三等 金十銭
一、前項入場料は左の目的に使用する
こと。」

この入場料について少し考えてみると三等の十銭は当時の食料にするとさばのり、かけが一杯一銭五厘から二銭だったから、少くとも五杯食べられることになる。この勘定だと神宮の外野席を最低に見積っても百円から百二十円取ってもいいのだが、今シーズンなど入場料が上つても四十円なのだから、一般の物価に比較して、非常に安いということが分る。余談はさておき、なぜ三大学がリーグを組織したかという点、日本の野球を発達させるためには当然早慶戦が復活されなければならぬ。もちろん復活のことはいろいろの事情もあって早急には望めないうとしても、まずその第一障害である早大野球部の「慶応とは再び同一運動場に

齋藤三郎

「立たぬ」という四十四年秋の決議を取消させる必要があったし、明大自身としても早慶二大学の板ばさみに合っている変則なりリーグではもちろん我慢出来なかつたに違いないが、まず次善の策として変則リーグを認め、時勢をみて完全なものにしようという非常に含みのある計画だった。

さて、成立第一回のリーグ戦はその年十一月中に行われたが、明大は師匠格の慶応をまず一対零に破り、二回戦は四対一に退けられたが三回戦は三対三の引分けを演じ、決勝戦も一対零の接戦に惜敗するという意外の躍進ぶりを示し、早大には四対一、五A対四に再敗したが、創立日なお浅い同チームとしてはあつぱれしごくの武者ぶりだった。

三大学リーグは翌四年秋、明大チームの一時解散のため中絶したほかは、五年春からまた軌道にのりしごく順調な歩みをつづけていた。ちょうどこの前後に法政大学にも野球部が設けられた。初めの設立費が三十円九段の靖国神社の広場が練習場に充てられていたというから大よその見当はつこうというものである。

法政が本格的に力コブを入れ始めたのは中野にグラウンドを設けた大正四年ごろからで、初代のコーチは早大野球部の右翼手にして強打者の八幡恭助氏だった

ような関係から、早大とはしばしば練習試合をしてもらった。もちろんその当時は二十三対三、十七対二というような段違いの成績だったが、大正六年春三大学リーグに加盟したころにはめっきり腕前を上げ、その秋行われた慶応との三回戦には三対二、翌七年春の対早大戦には七対二で共に快勝したのだからえらいものである。

なお、法政が大正六年秋から七年春へかけての二シーズンだけ、神田橋際の現在厚生省になっていたりグラウンドを持っていたことは、古いファンの間にも案外知られていないようである。

空前の強打者「趙子倫」

大正四年九月、早大の招きに応じてシカゴ大学野球部が来朝した。前回の四三年には左腕の怪投手ペーシが縦横の腕を振って話題を提供し、早慶、稲門と十回戦って全勝の成績を挙げ「ペーシを引っぱがせ」などと日本人ファンを口惜しがらせたが、今度の場合は六フィート四インチの巨漢投手チャーデンの強速球にあまり大きくないこの国の人々の度胆を抜いてしまった。

何しろ当時の日本で五尺五、六寸もあれば大男の部類に属し、慶大の首領投手が五尺九寸何分かあるというのでビックリしていたころのことだし、それよりなお数寸高いチャーデンの投げ下ろすボー

ルは、手許へ来て急に七、八寸もホップ（上昇）するといふのだから一体そんな怪球を誰が打ち得るかというのが戦前の話題をさらったに不思議はない。

果してシカゴは非常に強く早慶と七回、外人連合軍と一回、さらに関西で早大と三回、関西学院と一回合計十二回戦に無敗の記録を残して悠々帰米したのだったが、シカゴに対する打率は早大九分（四回を通じて十本）慶応二分七厘（三回で安打三本）という記録を見てもいかに日本チームが打てなかったかということが分ろう。

ところがここに個人打率二割六分七厘という抜群の強打者があつた。早大の中堅手にして一番をうけたまわる趙子倫その人である。趙は横浜生れの中国人で成城中学から明治に進んだが、当時の監督某氏が侮辱的な態度をとつたといふので即日退学、早大に転じたと噂された熱血漢。強肩、強打、駿足と文字通り三拍子そろつた稀代の名選手だつた。

大正三年秋、私は早大の戸塚球場でしばしば彼のプレーぶりに接したが、打つ球、打つ球の殆んどすべてが弾丸ライナーとなつて外野深くに飛び、チビツたり、つまつたりなどという当りは全然ないといつてもよかつた。これは私が話を面白くするためにいつてゐる訳でなく、後年巨人軍の監督になつた浅沼養夫氏（趙時代の早大の中将）

なども口を極めて賞讃され「あんなバッターは何十年に一度生れるか生れないかであれが本場の強打者といふのでしょね」と口ぐせのように語られたものである。

彼がまだ成城中学にいたころ、対麻布中学戦にショートがトンネルした球を追つて左中間の崖下に転落し数カ所に傷を負いながら夢中でボールを投げ返したがそれが直接の敗因を成したといふので、学校に帰るまで口惜し泣きに泣いたといふ有名なエピソードの持主だけに、しばしば人の驚くような放れ業を演じたものだつた。

身長はやつと五尺五寸前後しかなかつたろう。けれども非常にバランスのとれた身体の持主で、その彼がバットを左肩につけてまっすぐに立て、心持ち胸を張つたバッティング・フォーム、両手を腰に置く大胆不敵な中堅での構え方、一度ランナーに出ると縦横に走りまくり、少しのスキを見出すと敢然ホームスチールを敢行する慥慥さ。それから四十年近くもたつた現在でもハッキリ思い出せるほど、まことに天晴れしごくの武者ぶりだつた。

日本の野球史上にはずいぶん多くの変わり種を生んでいるが、趙氏のように三拍子も四拍子もそろつた名選手は他にちょっと類例を見出だせないのではあるまいか。

「着眼凡ならぬ」野次

終戦後「フアン」という言葉が急にやり出し、どうやら近ごろでは日本語になりきったようだが、その語源はあんが知られていない。一般には「好球家」という意味に使われているが

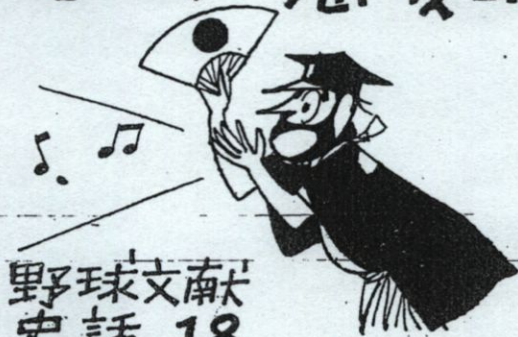
実際には「情熱」とか「扇」とかいうのが本当らしい。この好球家という言葉も以前はあまり使われず、明治中期ごろからは主として「野次」と呼ばれ、野次はつまり応援隊を意味していた。

そもそも野球における応援隊はいつごろからあったかというに、古い文献によると明治七、八年のころ、仙石貢、嘉納治五郎などを中心とする東京開成校の連中が、横浜外人団とのゲームなどにある程度の野次馬ぶりを発揮していたらしいが、もちろんそのころは後年のような組織だったものでなくただムヤマタラに怒鳴り散らしていたのだ。だが、明治も二十三、四年ごろになり一高が覇権を確立した当時からようやく面目一新して団体的となり、やがて応援歌が作られるまでに進歩した。

一高の野球部史によると、野次がようやく認められるようになったのは二十三

年十一月八日の対白金（明治学院）戦からで、「遂ニ専業ヲ以テ名セラルル者アルニ至リ、溜池戦（二十三年十一月二十三日）ノ候ヨリ野次ノ名起リ從ツテソノ着眼凡ナラズ、批評ヨク微ヲウガチ、選手偉功を奏スルゴトニ拍手喝采シテ声援セリ、云々」と言っている。

野次と応援歌



野球文獻 18
史話

齊藤 三郎

五尺の軀を鍛上げ 鋼の額に鉄の脚
学びの道の奥深み 迎り行手の糧と
やがて夏となり兼て嗜める半ズボン
紺の胸牌に足袋 足六十余州を跋渉し
富士の高峰の見下と 五大洲を睥睨し
人跡絶え野辺までも 日の出の國の譽れをば
止め置かなむ記しなむ 北海積氷何のま
アフリカ炎瘴何のその

一高・三高の応援合戦

さて、明治三十六年になると山内冬彦氏作詞の野球部歌が正式に認められた。作曲者は不明だが単純ながら快いリズムは一世を風靡し、地方の中学などではこの譜をそのまま使った応援歌が次々と現われ、つい十数年前までは盛んに愛唱されたものだった。

(一) 天地の正氣向陵に

籠りてここに十二年

その春秋に磨き来し

文武の道々数あれど

殊に勝れし野球部の

譽は世々に尽きざらむ

(二) 彌生ケ岡の春の夕

ノックの響雲に入り

向ヶ台の冬の朝

霜を碎きて玉糞ふ

雨に嵐に練習の

苦心を積みし年月や

(三) 風雲いかる校庭に

寄来る敵は多けれど

鎧の袖の一触に

物も言はさで逐返し

覇者の誉に年々に

上り行くこそ輝しけれ

(下略)

この後で作者は「この武威永く地に墮ちず」と歌っているのだが、翌三十七年には早慶のために覇権を奪われ、それからは大正七年の内村投手時代に早慶を破るまで十数年間の雌伏を余儀なくされたのは皮肉である。

一高といえはどうしても三高を挙げなくてはなるまい。

一、霧に乱るる曉の

白霧踏みて我立てば

袖染ケ丘の朝風に

若き血ゆらぐ狂熱や

二、我行く処君も見よ

鐵路二百里東征の

一挙に敵を蹴破れば

向陵の陣生気なし

三、桜花の匂ひ香ばしく

関の以西に幾年か

覇者の誉を担ひたる

我三高の野球団

四、活動の胸意気の腕

頭はさん時ああ到る

長棍さげて我立てば

天地の精も声あげん

フレージ高 フレージ高

フレージ高 フレージ高

このほか三高には

ヤーレヤレ、グルグルマイタホー、

柏の葉、柏の葉、柏の葉をよつ 飛ばせ

とかいう、珍妙な繰り返しがあつた。

文字で読むと少々噴き出したくなるような文句だが、これに一定のリズムをつけて合唱すると、三高のそれとはまた変わった雰囲気を出したものだ。前にもいつたようにこの一高対三高戦は陽春四月の十日前後桜吹雪の真ただ中で行われ、いずれか敗れた方が二百里の敵地に凄愴な復讐戦をいどむというロマンチックなところが、この国の人々の嗜好にかなつたものか、現在の早慶戦などはまた一種変つた球趣に天下のファンを熱狂させ

たものだった。

初期の早慶応援歌

初期の早慶戦時代では慶応のキャプテン桜井彌一郎氏の作と伝えられる次の歌が永く歌われた。

(ワシントン頌徳歌の譜)

一、天は晴れたり気は澄みぬ

自尊の旗風吹き靡く

城南健児の血は迸ばしり

茲に立ちたる野球団

二、勝利を告ぐる関の声

天下の粹ぞと仰がれて

三田山上に秋月高く

輝く選手がその勳

ララ慶応、ララ慶応

慶応、慶応、慶応

同じころ早稲田では橋静致氏の作といわれる、つぎの応援歌で慶応に対抗していた。

一、見よや早稲田の野球団

見よや早稲田の健男児

腕を振ふはこの時ぞ

振へ、振へ。

二、天下の敵をば拒まざる

日本男子の手腕をば

今ぞ現はせ 証しせよ

振へ、振へ。

ラ、早稲田、ラ、早稲田

早稲田、早稲田、フレージ

ついでながら早大の校歌「都の西北」の作詞年代をある人が「大正の初期か」という意味のことを書いていたが、これは明治四十年早大の創立二十五周年記念に際し詩人相馬御風氏が作つたもので作曲は東儀鉄笛氏、最後のエール「ワセダワセダ」は坪内逍遙博士の発案になつたものである。なお他校の校歌、応援歌については、いずれ別の機会にゆづりたいと思う。

野球と文学

野球文庫史話 19



「野球狂」の子規

文学作品に取扱われた野球——といえ
ば、誰でもすぐ思い出すのは正岡子規だ
ろう。彼の「ベースボールの顔」九首は
ずっと後で発表されたものだが、それ以
前、つまり二十三、四年のころ、彼はお
びたらしい作品を残している。

というよりは子規全集（昭和五年、改
造社版）のうち「少年時代創作篇」二冊
の大半はほとんど野球に関する俳句、随
筆、紀行文、小説などで満されていると
いつてもいいような気がする程だが、こ
こでは子規だけを語るのが目的ではない
ので、まず処女作とでもいうべきものだ
けを挙げて見よう。

恋知らぬ猫のふりなり球あそび
この俳句は二十三年四月のはじめ、丸
木写真館で撮ったユニフォーム姿の写真
に添えて親友大谷是空に贈ったもので、
彼は、その下に「能球弄」と目書きしてい

る。いうまでもなく彼の本名「升」にひ
つかけたシャレで、その意味は「野球上
手」と自分で自分を讃めているのだが、
その文中に「弄球家バットをふりまわす
珍重之至りにあらず（略）本箱のうじ虫
ボールをなげ飛ばして是に於て無量の雅
致ありとこそ申すべけれ」と言っている
ほど当時の子規は二個のベースボール狂
だった。

次は「六月五日再び横浜公園において
本校選手と外国人とのベースボール試合
を見てよめる歌」という長歌で、作者は
当時一高の学生、後に明治大学予科教授
になった大伴来目雄氏、これは前に挙げ
た一高対横浜アマチニア倶楽部の第二回
国際試合に一高が32対9の大勝を博した
時の記念作である。

「外国のあそびのわざはおほかれど、
やまとをのこにふさはしくををしき遊
はこれをおきて外にあらじと、（略）
横浜の、外国人とこのわざを、くらべ
んものと年頃、挑みつれども事なら

で日数すぎしを、五月の三日に事なり
て、ますらたけをはそのすめる、まち
にい行きてたやすくも、うちまかしけ
り。うちまけてかの国人は、やしとして、
幽がみやしけん（下略）」

野球文学の逸品として後代にまで残る
だろうと思われる河東碧梧桐氏の「ベー
スボール」は、三十四年七月発行の雑誌
「ほととぎす」を飾ったもので、一高対
横浜外人団のチームを心惜いまで精細な
筆でスケッチしている。これは、子規一
派が提唱したいわゆる写生文の一つの見
本としても意義深い作品だが、今までに
多くの人々によつて語られているので割
愛することとし、
次に少々方面を変
えた作物に眼を移
して見よう。

明治三十九年と
いえば、古いファ
ンはすぐ早慶戦の
中止を思い起すが
慶応義塾学生の織
関雑誌「三田評論」
は決裂の始末を報
告するために「学
生大会記念号」を
発行した。この中
に怒濤濤天浪とい
う匿名子が「紅葉
語り」と名づけた
一篇の小説を寄せ

ている。

紅顔可憐の美少年とその姉を中心に、
慶応芳選手の苦衷を物語るという筋だが
その一節に中止と決定した瞬間を知らせ
た手紙を讀むくだりがある。

「中止？中止！己が耳を疑ひしものは
たゞに小生のみには無之候ひき、一座寂
として語なし、やがて某講師はじゆんし
ゆん事をわけて、彼我の熱烈火の如き折
から明日の仕合とうてい満足に結了せん
事望むべくもあらず、のみならず事進ん
で三田綱町運動場に血汐の汚を見ん事ま
た保し難し、形勢すでにかくの如く不穩
なり（略）すなわち絶ち難き情緒を絶つ

子規の著作に見え
た野球文学の一部

松蘿玉液

○精神、四肢あり、杖にすがりて手のひら程の小
を、探す。日うち、かに照し、世人の
心よきことはいはれず、語は端なく世人の
ひて、
より以来ベースボールといふ語は端なく世人の
に芽を
は、
に芽を

耳に入りたり。されどもベースボールの何たる
や、始ど之を知る人無かるべし。ベースボール
は素と西米利加合衆國の國技とも稱すべき者
にして其遊技の國民一般に賞せらるゝは恰
は素と西米利加合衆國の國技とも稱せりとか
にして其遊技の國民一般に賞せらるゝは恰
も我邦の相撲、西班牙の闘牛等にも類せりとか
聞きぬ。（米人の吾に負けたるをくやしがりて
幾度も仕合を挑むは殆ど國辱とも思へばなる
べし）此技の我邦に傳はりし來歴は詳かに之

て吾人は今日この仕合中止に賛成の意を表するなり、卿等それ諒とせよ、と、云々」

微苦笑の川柳

川柳と狂歌は封建時代が生んだ抵抗文学の一つだと思ふが、へんなせんさくは別としてなかなか面白いものがある。

横っ腹にイヤという程ぶつけられ

ベツかきながらファーストへ行く

今度こそホームランだと懸命に

バットを振ればカーブしちまう

思い切つてスベリ込んだはよかつたが

顔はすりむくズボンに破く

などは罪のない方だが、川柳になると

いささかシラツ味を帯びてくる。

フォアボール出してピッチャー苦笑い

出来だてのキョウチャーは目をつぶり

ユニフォーム、ニトモテヨクラすべら

チャクイ奴キャッチのサインそと覗き

ヨシ／＼と怒鳴つてフライ捕り損じ
ここいらはわれわれが草野球などでよく見る光景だ。

ピッチャーが左と馴いて青くなり

掛け声で下手をゴマ化すへボ選手

泰然とトンネルをする主将殿

三球目ボールだったと言ひ訳し

わがへボを言わず球審こきおろし

凡打の照れ隠し一塁へ滑りこみ

などどくると、今でもそこいらに耳の

痛くなる人も多かろう。

狂歌と少し趣向を変えたものに「へな

ぶり」がある。

中堅は球と駛りぬ尺あまり、地をはな

るる飛燕の如し

応援は花散る中に熱狂す、紫の旗紅の

旗

大飛右球翼の垣を越へんとす、隕石海

に落つるが如く

となると、さすがに雄大無比、ホラで

はめつたにヒケをとらぬ、いにしえの中

國の詩人達も尻ッポを巻いて逃げ出すに
違いない。

大正七年内村、中秋時代の一高が早慶、

三高、学習院を連破して十八年ぶりに

覇権を奪い返したとき、雑誌「オリンピ

ア」が一高優勝記念号を出したが、その

中に幾首かの和歌があつた。たしか本荘

可宗氏の作と覚えてゐる。

邪が非でも勝たねばならならず内村の

第一球よストライクなれ

兼重がグローブ取りてセンターに、走

るを見れば涙ぐましも

× ×

さて、私の野球文献史話も昨年三月以

来約一カ年半に及んだが、実をいうと筆

者もいささか疲れを覚えて来たように思

うので一応筆を措くこととする。このか

なり永い間、紙面を割いて頂いた編集部

の諸氏と、終始ご鞭撻を賜つた読者諸

君には、こゝに改めて十分の謝意を表し

たいと思う。

(完)